1995.1.17

阪神・淡路大震災

兵庫県立夢野台高等学校

庫
3

寄贈

震災文庫 8－138

巻　頭　言

神戸大学附属図書館
平成
8年9.20
No. 9605718

ゴー　地鳴りとともにやってきた大地震
誰もが予想すらしなかった揺れだ
街は瓦礫の山と化し多くの人命が失われた
多くの人が住居をそして職場を失った

家を失った人たちでごったがえす学校
しばらく茫然自失であった人たちも
生活のそして街の再建に乗りだした
人間疎外や利己主義の風潮が叫ばれて久しい現在
助けあいを通してほんものの優しさや思いやりに出会う
心のなかに表現のできない熱い思いが走る

夢野台高校の生徒は全員無事だった
あの惨状のなかまさに奇跡だ
それどころか多くの生徒がボランティア活動に従事し
救援物資の確保と友の安否確認に東奔西走していた
なんてすばらしい若者たちだろう

喉もとを過ぎれば忘れてしまうとよく言われる
これは人間の弱さかもしれない
でも私たちはこの震災を決して風化させてはいけない
いつまでも語りついでいかねばならない
この冊子は永遠の“語りべ”にしたい

00096057185

目　次

・巻頭言……1
・あいさつ……2
・学校の動き……7
・生徒の作文（全62編）……12
・職員等の感想（全９編）……69
・夢高通信……84
・各種の経済的援助……90

あ　い　さ　つ

兵庫県立夢野台高等学校
校長　山　根　邦　雄

兵庫県南部地震のために犠牲となられました方々のご冥福を心からお祈りいたします。また、被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。この度、先生方のご努力により消しがたい爪痕を残した大震災についての、生徒諸君、先生方、その他本校に震災時関係された方々の記録と感想をまとめた記録誌が発刊のはこびとなりましたことを大変喜んでおります。この大震災の苦しくつらい体験を風化させないために、またこれらの体験をお互いに分かちあうために、この記録誌を発行することとなりました。寄稿いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

平成７年１月17日未明に起こりました未曾有の大震災のため夢野台高等学校も直接、間接に大きな被害をうけました。昭和２年完成の当時東洋一と言われた本館は関東大震災の影響で設計、施工とも当時の技術の最高のものが駆使されており、ほぼ無傷で残り関係者を驚かせました。しかし、昭和46年に完成しました本館南側の特別教室棟は鉄筋の柱が何本も大きな被害を受け使用不可能になりました。両棟の完成年次には、約45年の開きがあるにもかかわらず古い建物が生き残ると言う結果を残しました。このことについて新聞もかなり詳細に報道しています。校舎以外では、本館北側の擁壁がほぼ全面倒壊し、土砂が本館に押し寄せ電気室を壊しました。また、現在建築中の新校舎の南にある親蔦会の所有地の石垣も同様に崩れました。

大震災の朝、私は、生徒諸君・職員の安否と学校の校舎の損傷状態を心配しながら、電車が不通のため午前７時に車で鈴蘭台の家を出て、眼下に煙を上げて激しく燃える長田の街を見ながら夢野バイパスを下りました。それはまるで湾岸戦争時の空爆の光景を想起さすものでした。房王寺線を右折すると、校舎に相当な被害を覚悟していましたが、本館がいつもの如く無傷でたっているではありませんか。これで授業ができるとひそかに安心をしました。学校には７時20分に到着しました。その時すでに周辺の方が多数学校に避難しておられ、学校を避難所として開放して欲しいとの強い要請をうけました。非常事態で止むを得ないと判断し、体育館、一部の教室、グランドを開放することにしました。最初の夜は停電のためローソクの明かりで住民の様々な要請に応え、安否の確認、食糧の確保、電気の復旧などの仕事を行いました。大震災のため職員の確保も難しく、電話も受信だけで、外部との連絡もままならず始めの10日間は悪戦苦闘の毎日でありました。

生徒、職員の安否の確認には一週間を要し、１月23日には在校生全員無事が確認されほっと胸をなでおろしました。震度７の地震で長田区、兵庫区で全壊、全焼の家屋が多数にのぼり、道路の陥没、ライフラインの途絶といった悲惨な状況でした。震災のため神鉄が不通となり、残念ながら生徒の通学の足が確保できず３週間の休校の止むなきにいたりました。バス輸送で北区から生徒を運ぶ案も浮上しましたが、道路の大混雑で実現に至りませんでした。２月７日にやっと鈴蘭台、長田駅間が開通し、２月８日から午前中の授業ができるようになりました。水道、ガスが使用できない中で、２月20日からは体育の授業を除く５限の授業が実施できるようになりました。授業の遅れを取り戻すために３月は休日である第２土曜日も授業を実施し、例年であれば高校入試前に３学期の成績処理を終了して

いますが、期末試験を高校入試後に実施し、終業式を３月30日に行うといった異例の日程になりました。このためＴＶ局や新聞社が終業式を取材し、それを記事にしたり、放映するなどのこともありました。

ところで、この震災の教訓は一体何でありましょうか。一つには、自然のエネルギーの膨大さを痛感させられたことであります。東灘区では阪神高速道路の橋脚が何本も倒壊したり、10階以上の建物がおおきく傾いたり、港湾施設の破壊や、人工島を結ぶ橋の損傷、神戸高速鉄道の大開駅の倒壊、オフィスや家庭でも重い金庫やピアノが動いたりして、あらためて地震の持つエネルギーの大さを感じました。神戸は平地が少なく、それを補うためにポートアイランド、六甲アイランドといった人工島をつくり、それらを結ぶための道路、交通機関をつくりましたが、予想を越えた地震が襲いこれらの施設が大きく損傷を受けることになりました。人間の知恵の結晶であるハイテクを駆使した鉄道、高速道路が自然の猛威の前に屈した結果となりました。自然の災害は人間の力を越えたところで起きることを知り、人間の持つ力の限界を改めて認識することになりました。

二点めは、各地からやってきたボランティアの活躍でした。体育館で不眠不休で治療にあたられた第一生命の医療チィーム、曹洞宗の炊き出し部隊、岡山県からやってきたお風呂のサービス、ホームステイの申し出などいろいろなボランティアがやって来て避難住民のために奉仕をしました。また、本校の野球部の諸君が大開小学校に泊まり込んで避難者のため救援活動を続けたことをはじめとして多くの生徒諸君がボランティア活動に参加してくれました。震災のため人を助けることの大切さを体験できたことは、とかく知的トレーニングに重点をおきがちな学校の活動に別の視点から光をあててくれました。震災は、まさにlearning by doingの良い機会を提供することとなりました。

三点めは、この非常時にあって神戸市民が比較的冷静に行動しパニックに陥ることがなかったことであります。一時食糧や水の心配をしなければならない時期もありましたがみんな列をつくり辛抱強く待ちました。交通信号が作動しない時もありましたがドライバーはお互い譲り合いの精神で運転しました。バスが走らないときは歩いたり、自転車でオフィスと自宅を往復しました。みなエゴを抑えて震災を乗り切りました。困難な時ほど人柄、国民性がでるといいます。この震災で神戸市民が人間性の醜い面をさらけ出すことなく、冷静沈着に行動できたことは高く評価できると思います。

四点めは、震災のためお互いに助けたり、助けられたりして人の暖かさ、家族の温もりを確認できたことです。家庭でも、職場でも物心両面にわたり困難な状況で乏しい物を分け合い、相手の気持ちになり、助け合いました。また、私は、国内だけでなく外国人の友人からもお見舞いの手紙を頂きました。テレビが阪神大震災について全世界に報道した結果ほんとうに多くの人から神戸の状況、家族の安否について心配をしていただきました。いまさらながら国境を越えた人情の厚さを再認識した次第です。

最後になりましたが、本校の被災生徒救済のため設立しました震災教育援助基金のために親蔦会、ＰＴＡ、本校教職員の皆様から予想を越えた御厚志をお寄せ頂き誠に有り難うございました。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。基金は主に被災生徒の学習費等の支払に充当させていただきました。震災のために心配されました新校舎は若干の遅れはありますが本年10月には完成の予定であります。

生徒諸君が今回の未曾有の震災の体験を永く記憶にとどめ、それから多くの生きた教訓を学び、今後歩むであろう人生の糧にしていただくことを念願いたします。

共　　感

同窓会（親蔦会）
名誉会長　白　井　喜美子

平成７年１月17日午前５時46分、この度の地震を経験した者にとって、生涯忘れ得ぬ時刻です。強い衝撃に目を覚まし、反射的に布団を被り、身をまるめ、息をこらすと、一瞬衝撃が止んだと思った途端に、今度は左右への大きな横揺れ、布団毎ゆさぶられ、何といったすごさだということのみ思っていました。随分長い間揺られていた様に思いますのに、後になって聞けば20秒との事、あの時の気持は何と表現してよいのか、でも私の頭にしっかり焼きついています。揺れが静まり、手探りでそこに置いてあったはずの携帯ライトを、色々な物の被さった中に探しあて、まず、ベランダへの戸を開け、次に落下物の下になっていた普段着をひっぱり出して身に着け、襖を開けますと、隣の部屋の本箱は倒れ、物入れの戸は開いて中の物は掘り出され惨澹たる状態、階下へ降りていくと、そこも家具が倒れて物が散乱し、足の踏み場もない有様、その上を踏みしめて外へ出て驚いたことに道路の向側の石の角材を積みあげた20米程の長さの岩乗な塀が崩れ落ちているのです。我家の並びの一軒おいて隣もその隣もぺっしゃんこに潰れてしまっていました。あの揺れは、こんなひどいことをしたのだと呆然となりました。その時神戸全体の大惨状には思いも及びませんでした。後でこの地震で大変な数の方々が亡くなられたことを知って（その中に親蔦会員他親しい方も何人かあって)、亡くなられた方々に哀悼の意を捧げつつ、今ここに命を持っていることに、助かった命のあり様を考えてしまいます。

電気は３日目につき、テレビは５日目に写りました。電燈のついた夜の明るさに心が和み、テレビの写った時、世の中が開けた様な気になりました。それまで情報は新聞ラジオがたよりでした。我が家では水は２月７日、ガスは３月10日に出るようになりました。ライフラインの欠如の中での日常生活で、ふれあった人々のやさしさは、被災地での同じ思い、共感によるものと思いました。震災後逸早く訪ねてきて下さった方々、各地から安否を気づかって電話をかけて下さった方々に、人の繋がりの有難さを知りました。大変な被害を受けられた方々も、共感の響きあいが、多少は心の和ぎになったのではないかと思ったりしました。そして今、震災を通して、私共は人生にとって大切なものは何かといったことを考え直す機会が与えられた様な思いがします。

さて、今年平成７年は、夢野台高校創立70周年の年です。記念式典は見送られましたが、学校が70年間歩いてきたことは、心に留めたいと思います。２月27日卒業生への記念品贈呈と話をする為に学校へ参りました。講堂のある本館は、この度の地震に大丈夫だったと前にお聞きしていましたが、この日学校へ行き、母校本館を仰いだ時、近隣の被害の中で、厳然と建っているその姿に、私はすっかり感動しました。そして50年前、戦争が終って母校を訪れた時、戦災に耐えて、そこに建っている姿に感激した思いが、再び蘇ってきました。この校舎の落成したのは昭和２年、私の女学校１年の時でした。落成式の日の事は、今も記憶に鮮やかです。こんな立派な校舎に学べる幸を体いっぱいに感じていました。上村真理子先生のお話に寄りますと、本校の創立は大正14年ですので、その建築に際し、大正14年の関東大震災の生々しい経験が、建築者に強く働きそれが生きていたということで

す。この度の震災の経験は、今建築中の校舎にも、十二分に生かされることでしょう。私共の学校に寄せる思いを、新校舎に託したいと思います。

2月27日講堂に並んでいられた生徒さん達、随分と悲惨な思いをされた方も大勢いられたとおもいますのに、それに堪えて、何事も起っていなかったかの如く平然としていられて、胸が熱くなりました。私にとって本年講堂で卒業生にお話をさせて頂いた印象は何時迄も心に残るものと思います。

私はこの地震を通して「共感」というものの重みを心に深く感じました。同窓生は青春の日々の思い出を通して共感しあえる仲間です。学校を共にすることによる共感の重みを同窓会　親蔦会の上にかみしめたいと思います。

（震災後の学校風景）

1・17から5ヶ月を振り返って

兵庫県立夢野台高等学校
ＰＴＡ会長　金　子　晃　司

あの時早起きして、ちょうど顔を洗っていた時と思う。ドンという音の後、一瞬何が起ったのか理解できなかったが、柱にしがみついて心の中で「早く揺れよ止まれ、止まれ」と祈っている自分に気がついた。揺れが止んで、息子が懐中電燈を持ってきてくれた。床には食器やグラスやピアノの上にあったスタンド等が壊れて散乱していた。また２階にいくと、タンスがバラバラになって、私の眠っていた上に倒れていた。揺れている最中は、ガラスの割れる音も、家具が倒れる音も耳に入らなかった。驚怖というものは、目や耳の感覚も、人への思いという心も一瞬の内、奪ってしまうものかとびっくりした。

その後何回も余震がきた。ゴーという音のすぐあとにグラグラと来る。揺れる前兆の「ゴー」という音ほど気味の悪い音はないと思った。

西神戸有料道路から神戸、長田方面を見るとあちこちで黒い煙があがっている。会社に行く途中、灘駅付近の陸橋は段差が50㎝以上あり、通れない。阪神新在家駅前の橋も橋脚から落下して通れない。いたる所で今まで見たことのない光景が眼前にあり、これが現実なんだろうかと、何度も自分に問いかけた程であった。

ＰＴＡの方から電話がきた。数日後に迫った耐寒登山の実施はどうなるのかという問合せであった。学校も、校長先生も、ＰＴＡ前会長へも電話連絡がとれない状況であった。兵庫や長田区の人達にとって登山など考えもしなかったかも知れない。しかし北区や西区の人達にとっては、実施が不可能な状況ではなかったので迷っていたと思う。灘区から北区に避難した方が「日本中どこも灘区と同じように大変と思ってた」と語っていたことを思い出します。

２月４日震災後、初のＰＴＡ運営委員会が開かれた。校庭にはテントがいっぱい張られており、体育館も被災者が来て、学校内で約700名の被災者が避難していた。運営委員の中には自宅が全壊という方もいたが、元気に委員会に参加しており、頭が下がる思いであった。校長先生から生徒全員の無事も確認されたとのことで、まずは安心した。

あれから５ヶ月近く過ぎた今日、校庭のテントも減少してきたが、まだ40張程見られ、体育館と約200名がまだ避難していた。授業にも支障が生じ始めており、早く解決するよう、市や国の早期対応を切望している。

阪神大震災を参考に、地震直後に情報が伝わらなくても、被害を推定できるシステムを作った市や、消火栓からでなく、海水を利用して消火する訓練を行なっている市もでてきた。また多くの青年がボランティア活動に参加し、そこで心の何かが変わったと感じていた。更に兵庫県ではボランティア活動を授業の単位として認める方向でこのような活動を推進する姿勢になってきた。

困難に合った時、それを避けようとするのでなく、それを教訓にして良い方向ほ知恵を出していくのが人間であると思う。今回学んだ事を大切にし、未来人から借りているこの地を住みよい社会にして、未来人にお返ししたいと願っている。

＊学校の動き＊

1月17日（火）　午前5時46分　直下型地震発生（マグニチュード7.2）
気象庁は「平成7年兵庫県南部地震」と命名
（神戸・淡路震度6）
死者1,311人（警察庁午後9時発表）
学校の被害－本館南の特別教室棟損壊し使用不能
北テニスコート崩壊、武道場損壊
漏水によりプール使用不能
水道・電気・ガスのライフライン壊滅
電話発信不能
約1,000名の近隣被災者が避難
体育館、グランド、本館1F廊下
食堂、大会議室、一部教室に避難
公共交通機関全面不通
学校臨時休業（～1月28日）
職員による日直・宿直の開始（～8月27日）
神戸市は夢野台高校災害対策本部を設置
1月18日（水）　北神急行復旧
教員により生徒の安否確認を電話で開始
1月19日（木）　神戸電鉄が鈴蘭台～湊川間を除き復旧
死者2,943人
教員が生徒の安否確認のため避難所めぐり（～1月23日）
1月20日（金）　北淡町・三宮地域を震度7に変更

個人ボランティアからのポリバケツ（70個）や生徒からの救援物資（ティッシュ・生理用品など）も届く

進路指導室奮戦記――

1月17日の大震災で本校の水道・ガス・電気が止まった。そのため進路指導部は、多くの困難に直面した。①調査書の発行ができない。②前日にセンターテストの自己採点を終了したが、その結果が進路調整会議の日までに届かない。③調査書を発行できたとしても、国公立大学の2次テストの出願期日に間に合うかどうか。の3点であった。

①に関しては、電気の通じている兵庫高校でコピーをさせてもらった。②に関しては、会議を中止する。自己採点結果は、3年の担任が本校、鈴蘭台駅等、数個所に分かれて配るなどしてしのいだ。③に関しても、国大協に電話したり、必死だったが、うまく生徒が対応してくれたと思う。結果的には進路指導部としては何とか対応できたと思う。

1月23日（月）　生徒・職員の安否状況掌握
　　生徒・職員は全員無事
　　生徒の保護者・職員の親・校医の3名の方がなくなる

被災したにもかかわらず安否確認で東奔西走してくれた生徒も沢山いた

1月24日（火）　文部省が学校視察
　　職員会議（被災状況の確認）
　　死者5,051人
1月25日（水）　職員会議（学校の現況と今後について）
　　耐寒登山の中止決定
　※　多くの交通網が途絶しているのにもかかわらず、徒歩や自転車を利用して殆どの教職員が顔をそろえた
1月26日（木）　北テニスコート崖くずれ応急復旧工事始まる
　　職員会議（生徒への対応）
1月28日（土）　職員会議（授業再開や卒業式実施方法、修学旅行の中止決定）
　　避難場所－体育館、グランド、大会議室（避難者約900人）
1月30日（月）　震災後はじめての登校日
　　夢高臨時通信1号発行
　　〔神戸電鉄利用者→10時．鈴蘭台高校
　　上記以外　　→13時．本校講堂〕
　　「直接の手伝いだけでなく、共同生活上のマナー遵守も含めて、幅広いボランティア活動に参加しよう。でも全員無事で本当によかった。」（集会での話）
　　ＪＲ山陽本線全線復旧
　　仮設トイレ14個設置

避難されている方はグランドと体育館で各々代表者を選出し救援物資分配等を組織的に行ないはじめる

被害状況〈1月30日段階の調査〉

生　徒（全学年）

（家　屋）全壊35、半壊44、軽度307
（避難先）親戚や知人宅－77名、公共施設－19名
（移　動）転居3名、転校2名
（死　傷）死亡0名、重傷0名

職　員

（家　屋）全壊7、半壊12、軽度10
（避　難）18名
（死　傷）死亡－校医1名、重傷0名

多くの生徒達が校内の後片付けに馳せさんじてくれる

1月31日（火）　職員会議

(1)　電気設備復旧および神戸電鉄（鈴蘭台～長田間）開通時点で3時間の特別授業を開始

ただし安全の確認とトイレの確保に十分な配慮を行う

(2)　水道の復旧により平常授業開始

学校臨時休業（～2月7日）

この頃多くの生徒が避難所となっている母校の小学校や中学校等で熱心にボランティア活動をする（約250名）

2月2日（木）　職員会議

(1)　登校開始日を2月8日とする

(2)　2月9日から当分の間午前中3時間授業を実施する

崩壊した特別教室棟についてプレハブ校舎で対応するためプレハブ建設委員会を設置する

神戸電鉄鈴蘭台駅と本校の2ヶ所で夢高臨時通信2号配布

2月7日（火）　職員会議

(1)　卒業式は講堂で実施

(2)　1・2年生は代表のみ参加

神戸電鉄の鈴蘭台～長田間が復旧

教室に電灯ともる

簡易トイレ新たに5個追加し19個となる。

トイレ顛末記――

2月7日、学校再開の前日、全職員による校内トイレの一斉清掃が実施される。手に手に、スコップ・柄付きタワシ・新聞紙・バケツを持ち、固形物を除去し、新聞紙にくるみ、便器を磨く。便器のいくつかは震災のため粉々になっていた。

グランドに穴を堀りその中へ次々と新聞紙にくるんだものを投げ入れ埋めた。女子トイレには次のような張り紙が……

「小便拭き取り用ティッシュは絶対に便器に捨てず、前のビニール袋の中に捨てること。ティッシュは最小限使用のこと。大便禁止！」

この張り紙が取り除かれるのは1ヵ月余りが過ぎた高校入試前日の3月15日であった。その間、校内での生活は校門横の蛇口一本にすがるしかなかった。

毎清掃後、清掃担当クラスの男子生徒や運動部員によって、全トイレに次の清掃のための水がポリタンクで運ばれ、トイレ入口の大きなポリバケツに溜められる。生徒の持参するペットボトルの水も貴重な用水であった。

トイレを使用する際には柄杓とバケツが必需品だった1ヵ月余、さしたる混乱もなくトイレが比較的きれいな状態を保つことができたことを付記しておく。

2月8日（水）　生徒登校　10：00　清掃
10：40　ＨＲ
11：10　全校集会　於：講堂
高架水槽の破壊により校舎内の水道使用不能なので生徒各自
ペットボトルでトイレ用水持参
当分の間部活動禁止
教科書などの紛失調査
夢高臨時通信（最終号）配布
卒業判定会議

震災後約3ヶ月間炊き出しボランティアが続く
（おでん、ハンバーグ、ウドン、ぜんざい、朝食、豚汁）

お風呂のサービスや豆炭も佐賀県より来る

2月9日（木）　3時間の特別授業再開

	月	火	水	木	金	土	
1	英ＩＲ	国　語	保　健	生　Ｉ	数　学	社　Ａ	
2	家　庭	英ＩＧ	国　語	数　学	英ＩＧ	数　学	
3	国　語	化　Ｉ	数　学	社　Ａ	国　語	英ＩＲ	（2年5組）

2月10日（金）　県教育長視察
他校の教職員が支援のため来校（～2月26日まで）
2月14日（火）　兵庫教育大学より建物被害調査で来校
グランドに救援テント35張設置

この頃から3月下旬にかけ、対策本部をはじめ各種団体よりの救援物資が届き
被災生徒に配布する（衣料品、カバン、文房具など多数）

2月15日（水）　市営地下鉄全線復旧（新長田、上沢両駅通過）
夢野台高校震災教育援助基金について検討開始
2月17日（木）　被災生徒援助検討委員会を設置
2月20日（月）　短縮5時間授業開始
ガス未復旧のため食堂開けずパン等2階で販売
避難者数（約500名）
2月28日（火）　講堂で卒業式
※　式そのものが本校で実施できたこと等様々な思いが絡んで感動的な式典になった
3月7日（火）　大蔵省と文部省被災地現地調査で来校
3月9日（木）　建設省現地調査で来校
3月10日（金）　文部省現地調査で来校
夢野台高校震災教育援助基金創設
3月11日（土）　第2土曜日だが授業実施

3月15日（水）　水道復旧し学力検査準備整う
3月16日（木）　高校入試学力検査
3月20日（月）　合格者発表
3月22日（水）　学年末考査開始（～3月25日）
3月30日（木）　終業式
　　食堂を除きガス復旧
3月31日（金）　春季休業（～4月7日）地下鉄上沢駅開通
4月10日（月）　始業式・離任式・入学式を講堂で行う
　　食堂がメニューを減らしプロパン営業開始
　　会下山浄水場グランド使用開始
　　（神港高校と共同使用）

部活動練習場所

講　　堂	→	空手道．剣道．卓球．吹奏楽
会下山グランド	→	サッカー．ラグビー．陸上
大会議室	→	柔道（5月～）
校　　外	→	女子バレー．男女バスケ．男女テニス．水泳

4月以降については教育活動は平常の日課には復する
ただし特別教室・体育館・グランドが使用不能のため正常な教育活動はできない状態である

4月19日（水）　避難者（272名）
5月10日（水）　避難者（262名）
5月11日（木）　対御影高校定期戦（グリーンアリーナ神戸）惜敗
5月12日（金）　大雨により北庭園の東側よう壁崩れる

久しぶりの大雨で校舎内各所で雨漏れ発覚、大きなポリバケツがすぐいっぱいになるなど美術準備室と作法室は惨憺たる状況となる

5月25日（木）　神戸市よりテント25張支給
5月26日（金）　食堂北側の崩壊部分の撤去終了
6月15日（木）　避難者（210名）
6月16日（金）　文化祭（講堂を中心に1日で実施）
7月8日（土）　プレハブ特別教室建築開始
7月17日（月）　避難者（130名）
7月18日（火）　修学旅行のかわりに3年生（48回生）遠足
　　於：姫路セントラルパーク

震災により特別に採用された奨学金受給者ならびに授業料免除者数

（平成7年5月1日現在）

	1年	2年	3年	合計
日本育英会奨学金	未募集	6	7	13
神戸市奨学金	未募集	40	47	87
授業料免除	66	57	68	191

8月20日（日）　災害救助法に基づく救援食糧支給廃止
8月31日（木）　避難者（9名）

生徒の作文（62編）

地震について

阿　部　道　昭（48回生）

日本は地震列島であるということは知っていましたが、まさか阪神地区で地震が起ころうとは夢にも思いませんでした。北海道や東北地方で地震があった時、僕は正直言って、他人事のように考えていました。また、学校で行われた地震や火災の訓練も何気なくこなしていました。

午前５時46分に僕は地震に起こされました。僕ははじめは、それが地震であるということが分かりませんでした。とにかく、とっさに布団をかぶりました。ある程度揺れがおさまって、起き上がろうとしたけど、何か重たい物が僕の上にのっかっていて１人で起き上がることができませんでした。なんとか父の協力で布団からでてみると、真っ暗でよく状況を把握できなかったけど、自分の部屋がひどい状態になっていることは分かりました。まず、近くにあった靴下をはきました。次に懐中電灯を照らしながら外に出ました。家の中はガラスの破片が多く落ちていたので踏まないように靴のまま上がりました。辺りからガスの臭いがしたのでガスの元栓を確認しました。次に外に出て驚いたのは、湊川やその周辺で煙が立っていることでした。そして、ラジオで震度６ということを伝えられた時、大変なことになっているのではないかということに気付きました。

しかし、そんな大災害の中で僕は生活の知恵というものを知りました。とにかく水、ガスがでないのでできるだけ節約しました。日頃は水に対して特別何とも思っていなかったけど、この時ばかりは水をいとおしく思っていました。ガスコンロとガスボンベを買ってきて温かいものが食べれるようになりました。とにかく節約したということが僕の心に強く残っています。

そんななかで、近所同士の関係はいっそう深まりました。助け合いの心を忘れず、水くみやゴミ出しや、家を解体するので荷物を運び出す家の荷物運びもしました。ある日、１人の老人がとても重そうに水が入ったバケツを持っていたので代わりに持ってあげると、何度も何度もお礼を言ってくれたのでとても嬉しかったです。やはり自分自身が地震を経験したからこういうことができたのだと思います。しかし、地震を経験しないと助け合うことすら知らなかっただろう自分をとても情けなく思いました。

ピ　ア　ノ

粟飯原　里　江（48回生）

私は今日、幼い頃から大切にしてきたピアノを捨てます。“不幸中の幸い”とでも言うのでしょうか、私の家は崩れませんでした。でも、住むことはできません。引っ越さなければならなくなりました。仮設住宅に引っ越すか狭いマンションになるかは分かりませんが、どちらであっても体重200キログラムのピアノは連れて行けないのです。両親は、「焼

けたと思ってあきらめなさい。」と言いますが、実際のところ私の家は焼けてないのです。もちろんピアノもです。無理だと分かっていてもやっぱり…。

地震から一ヶ月程経った頃、私の考えに変化が起こってきています。地震当初は「命が助かっただけでもよかった。」と思いました。命の他は何もいらない、とも思いました。でもこの一ヵ月の間に私は明らかに当初よりも欲深くなっています。ピアノ以外にも捨てたくないものは山ほどあります。普段は絶対に読まない本や、ほとんど忘れていた人形にまで急に愛着を感じてしまうのです。

でも、当初感じた“生きている”という事実がどんなに嬉しかったか、これだけは絶対忘れたくありません。私は今日ピアノを捨てますが、そのことを今までの自分を変えるチャンスだと思うことにしました。今日、家に帰ってからピアノに「ありがとう」と「さよなら」を言いたいです。

あ の 日

一 松 恵美子（48回生）

あの日、ドーンという音と共に目が覚めました。すぐに布団に潜り込んで、震えながらゆられていました。やっとゆれがおさまった頃、起き上がってすぐに、家の一階に家族皆が集まり、懐中電灯を一本ともした中で、不安な気持ちで座っていました。姉が、二階にもどってラジオを持って来たので聞いていると、「淡路島を震源とする…。」という声が耳に入って来て、そこでやっと地震だったのだということが分かりました。それまでは、何が起こったのか分からないまま、ただぼーっとしているだけでした。その後、いくらか時間がたって、口数の少なかった皆が話し始めて、人の事を心配する余裕がでてきました。近所の家を見てみると、瓦がはがれている屋根がありました。幸い私の家は、なんの被害もなくすんだので、その時は、被害が少なくて良かった。友達はけがをしていないか。とぐらいしか思っていませんでした。

台所から、冷蔵庫の音が小さく聞こえてきだした頃、外は明るくなり始めていました。それから数時間後、テレビがつくようになり、画面を見て、声が出ませんでした。映像に映し出されるのは、倒壊してアメのようにねじ曲がった高速道路、見る影もなく無惨につぶれてしまった家々ばかり。一瞬のうちに、それまでの安心はふき飛び、友達や親戚のことが気になって、電話をかけても誰一人として通じません。父も、須磨区に住んでいる弟に電話をかけましたが、やはり通じませんでした。テレビを見るまでこんなことになっているとは、私も家族も思ってもみなかったので、皆のショックはとても大きかったです。

あの日から何日かたって、周りから友達や親類の無事が、耳に飛び込んできました。父の弟も、８時間もの間、生き埋めになりながらもけが一つなく救出されました。それを聞いて、父はあの日から一度も見せなかった笑顔を、私達に見せてくれました。しかし、現実には、父の様に笑顔になれなかった人々も、沢山いたのです。

一日も早く、この神戸に全ての人の笑顔が、もどることを願います。

震災にあって

岩　井　美　枝（48回生）

午前５時46分、まるで夢でも見ているかのような異常な体の揺れで目が覚めた。真っ暗で、何故か重たい布団の中ゴゴゴッーという地鳴りが耳にひびいていた。どうやら布団の上には、本やその他いろんな物が落ちていて、その重い布団にもぐった私はかなり息苦しかった。とにかく姉と二人で父と母の所へ行こうとした。

その時父が、「靴をはくんだ！」と叫んだので、「いいのかな」と思いながら靴をはいて歩いていこうとすると、足元でガチャガチャ音がした。なるほど食器が割れていたのだ。

驚いたのはカーテンを開けた後だった。外は暗いはずなのに真っ赤だった。道を挟んで前にある市場が燃えているのだ。そしてその炎の明るさで家の中の状態を知った。置いていた位置によって倒れている家具や食器棚が、分かった。しかし見事に天井にあるはずの電気のカサが吹っ飛んでいた。幸い家の皆、無事だったので、それはよかった。

しだいに外で声がして、一応外に出ようということになり、ガスの元栓や電気コードを抜き、着のみ着のままで外へ出た。やけにガス臭く、他の遠くの方も燃えているのが見えた。私はマンションに住んでいるので、たくさんの人が外に出ていた。ケガしている人も少なくなかった。

何分経っても消防車は来ず、近くで見るとものすごい炎で今にも飛び火しそうだったので、男の人達がマンションの消火器を持ち出して消火しようとしたが一向に消えなかった。本当に、仕方なく、鎮火するのをただ見ていることしかできなかった。

夜明け頃、ようやく飛び火もせず鎮火した。ほっとして明るくなり出した周りを見た。はっきり言って声が出なかった。マンションやビルを除いた家という家がつぶれて道路をふさいでいた。詳しく言えば屋根が地面についているのだ。それでもなお余震が続いた。

マンション内はガス臭く当分戻れないようだったので、家族４人小学校へ避難した。

その日一日はやけに長く、サイレンの音、ヘリコプターの爆音がやたら騒がしく、小さな余震でもびくびくしていた。それからの後の日は、避難所にいるか、ボランティアをするかで一日一日がはやく過ぎていった。家に戻れたのは、電気が通った一週間後だった。

私は、この歳で本当にすごい体験をした。まず地震、そして往復往復の水運び、配給の冷たいおにぎりも食べた。陥没した道路も歩いて通った。カセットコンロも初めて使った。温かいご飯やおみそ汁を飲んであれだけ幸せを感じたことはなかった。でも、これだけ、ガスや水道が使えないことが、どれだけ不便かを知った。普段、何気なく使っているだけに、思い知らされた。今では、すべてが元通りの生活だ。ただ、まわりの景色が、哀しくなるくらい何もない空き地ばかりになってしまった。段々日が経つにつれて薄れていってしまっているが、あの揺れは、絶対に忘れないだろう。

神戸への夢

太　下　　聡（48回生）

１月17日の早朝、激しい揺れがこの神戸を襲いました。

自分はこの震災で多く、求めていても出なかった答えのヒント、そして自分の思い、自分の夢について学べたと思います。

揺れの中で頭をかばいながらも、懐中電灯をとることができました。そして、家族の安否。自分で驚いているほど人に親切になれて、冷静にもなれて、気をつかうことができた。その後の数時間も、「何かしなくては」という気持ちでいっぱいでした。

しかし、余震が来るたびに思う、「何故、自分達が」というやり場のない怒りと、その事を恐れてしまう自分にいらいらしていました。

その日の日暮れ頃、電気が回復、自分たちの家は不安な夜に明かりを向かえてすごす事ができました。また、自分は１つ山を越えた自分になじみ深い景色の変わりようをテレビで見て、つい声を出して驚いていました。そして、それと同時に判明した激震地区。自分はふと、「友達と連絡をとらなければ…。」と思っていました。普段、電話とかしてなくて、少しかけにくい友にもかけた。ずいぶん、たくさんの友にかけた。――つながらない。本当に自分にとって友という存在と、そして、また自分という存在について考えさせられ、考えている自分の心に大きく横や横だけでなく四方八方からかかる不安、特にまたそれもやり場のないもので、自分の弱さを痛感するのはいやでした。

とにかく、その晩は連絡のとれなかった友の事を思いながらも、その反面、「冷静になっておかないといけないな。」なんて、今までになかった複雑な思いで過ごしました。

数日後、連絡のとれなかった友の２人とあうことができました。彼らは、いろいろ複雑なのだけど、様々な障害のある中でお互いに将来を誓いあった２人なわけで、自分がたまに訪ねている小さな飲食店をそこの御主人（自分達はマスターなんて呼んでいるわけで）とその２人が経営していたのでした。残念ながら店は倒壊、しかし、マスターも、彼の家族も無事だったわけで自分はとても安心したのですが、彼らにとっては、いろいろな思いのあった店がそんなことになってしまい、とても悲痛なのがはっきりと表情にでているようでした。確かに、自分よりも大きな夢を彼らは持っていました。

友の２人の夢をいとも簡単に、そう、それも一瞬で壊してしまう震災というものに、自分は恐さを、そして物だけでなく、人の心をも壊してしまうことには、何よりもあてどころのない怒りをおぼえました。

自分には思い出があり、夢があります。

思い出には、それぞれの各地の、特にこの神戸のその事柄に対する１番の飾りつけがあります。又、夢には、それを決心した場所、決心させた景色があります。

あの橋、あの道、あの公園、この風景。その景色がたとえ、崩れさせられたとしても、それを悲痛に思うなら、もう１度自分に、「今、何をすべきか」を問う必要があるということを、そして、その解答を出すのが自分であることを、自分はよく知りました。

そう思うと、亡くなられた方々の、又は人生の決断を変えざるをえなくなった人々の、限りなく無限に近い意志が、限りなく大きくなる夢が、どんなふうに１人１人の大きな力となるのか。そして、１人１人がその力をどう受け取り、継いでいくのか。

自分達の夢を生かすこと。そしてそれが少しでも、うまくいくようになる環境、都市を作ること。

それが神戸への夢になるに違いないと思います。

あのときのこと

大　谷　優見子（48回生）

「ゴゴゴゴゴゴ」という音がして、何かわからないけどとても怖くて、体中に力を入れて小さくなっていた。「ドーン」とすごい音がしたと思ったら、信じられないくらい揺れた。何かとても重い物が背中に落ちてきた。あっという間だった。とても痛かった。息も苦しかった。「助けてー」って叫んでも誰の返事もなかった。2階で弟がドタバタしている音が聞こえた。

まさか家がつぶれてるなんて思わなかった。自分の上にのっかっているのが家の2階だなんでことも全然考えなかった。ただ、いつまでたっても誰も助けに来てくれないから、大変なことになっているんだと思った。

中は真っ暗で、とても怖かった。すぐ横にお母さんと犬がいた。呼んでも返事がなかった。寒さと心細さと不安で泣きそうになった。でも、犬とお母さんを手でさわりながら、ずっとこらえていた。弟がずっと外で声をかけてくれていたおかげで、落ちついていることもできた。

3時間後、私はレスキューに助けてもらえた。外に出て、いとこのお姉ちゃんにつれられて小学校の体育館へ行った。しばらくふるえが止まらなかった。お母さんのことをずっと考えていた。1時間ぐらいして外に出たら親戚がみんな泣いていて「お母さんは？」と聞いたら首を振った。頭の中が真っ白になって力が抜けた。

あの日見たものは今でもはっきり覚えている。割れた道や、建物に寄りかかった電柱、半分に割れたビルや、真っ赤な空、自衛隊のヘリ、人の表情。何もかも異様な雰囲気だった。

今まで私は地震を別世界の出来事のように思ってきた。たった何十秒の間に、建物が倒壊し、道が割れ、人が死ぬ。その数は信じられないくらい大きくて、この地震がどれくらいすごかったかがわかる。だけど人間ってすごいなって思ったことは、こんなに悲惨な風景を見て、最初は呆然と立ち尽くしていても、次の瞬間には、生きるために動きだす。人間って結構強いと思う。

私は、この震災で大切なものをたくさん失くした。だから地震になんかに絶対に負けない。負けたくないと思う。あの時、見たこと、感じたこと、思ったこと、いろんな人の言葉をずっと覚えていようと思う。

最後に、地震の数日後、中央区の親戚の家まで、リュックに食べ物をいっぱい詰めて、北区から歩いて来てくれた、さなえとあき。それから、みち、ともみ、みえ。いろんなところで私を支えてくれた人たちへ、この場をかりて、お礼を言いたいと思います。どうもありがとう。

地震のあった日

大　村　美穂子（48回生）

私の家は兵庫区にある。地震当日、私は朝４時に起床して英語の予習をしていた。はじめにゆれを感じた時、それはとても小さかったのですぐやむだろうと思い、気にも留めなかった。しかしそのうちゆれがだんだん大きくなっていくので、これは今日にかぎってどうしたのだろうと思い、とりあえず母を起こしに行こうと机を離れた。部屋の戸を開けようとした時、ふいに机のライトが消えて部屋が真っ暗になった。その瞬間言いようのない恐怖感が体を走り、ひどくいやな予感がした。そのときだった。突然のすさまじいゆれに私は立っていられなくなり、ゆられるがままの状態になっていた。家がミシミシというのが聞こえた。とにかく激しい地震で今現実にゆれているのだということは理解できる。しかしなぜこんなことが神戸で起こっているのだろう――そんなことを考えていたような気がする。そして家具のそばで寝ている母のことが気がかりだった。

やっとゆれがおさまったので戸を開けて母を呼んでみた。「出られないのよ」という返事があった。私のほうは母の方へ行こうとするが何かが道をふさいでいるらしく真っ暗でなかなか前に進むことができない。母は二つの家具の下敷きになっていたが、布団をかぶっていたこともあり幸運なことにケガもなく、しばらくして自力で脱出することができた。その後、ころがっていたライターをさぐり当て、それで家の中を照らしてみた。物が倒れたり落ちたりめちゃくちゃで、本当にひどい散らかり様だった。あれだけゆれたのだから当然の光景のはずなのに、驚いてなぜだか信じられなかった。私の部屋を照らしてみた。本棚の教科書や辞典、花びんなどと、天井のつり棚に上げていた本のつまった大きな箱がすべて机と椅子の上に落ちていた。もう少しそこから離れるのが遅かったらどうなっていたかと思うとゾッとする。

外が明るくなるまで布団をかぶってラジオを聞きながらじっとしていた。このときラジオの重要さを痛感した。手元のラジカセは普段コンセントで使っていたが、乾電池でも使えるのを思い出し、急いでありそうなところを手さぐりすると意外に簡単に見つかった。それで情報を確保できたことは大きな安心につながった。もしラジオがなかったら不安でたまらなかっただろう。これからは一家に一台携帯ラジオ、これは基本だ。

母と共に部屋の片づけを始めていた午前８時頃、電気が復旧した。外に出てみようとしたが家具が倒れかかっていて玄関まで行けない。そこで窓から外へ出て外から鍵を使って開けようとしたが、ドアが壊れていてびくともしない。仕方ないのでくつ下のまま家のまわりを眺めた。倒れている家は見あたらなかったが、隣の家の壁がごっそり崩れ落ちていた。ほとんどの家の壁にひびが入って落ち、瓦もそこらじゅうに散らばっていた。道路ではみんなどこへ何しに行くのか、車がやたらたくさん走っていた。屋上に上がって見てみると、南に３本、西に１本煙が上がっていた。

正午頃、電気が再び止まった。だんだん日も暮れ、寒くなってきた。午後６時すぎに外を見ると近くの空が火を反射して真っ赤になっていた。大きな余震が来ると恐いので、避難することに決めた。家の中も真っ暗だったが、貴重品はまとめていたし、朝おにぎりを作っておいたのでそれを持ってすぐ家を出た。

近くの小学校は電気がついていて、みんなテレビを食い入るように見ていた。１階は人

があふれ、どこもいっぱいだったので3階の教室に入った。その部屋には約15人の人と犬もいた。布団類を持って来ていなかったので寒くてまた取りに帰った。しばらくテレビを見ていたが、この地震が東京で起きたらどうなるかシュミレーションなんかを放送してのん気なものであった。その夜は家が燃えるのではないかという不安と余震で熟睡は無理な話だった。

避難所には約1週間いた。最初は同室の人も普通の家族という感じで子供もたくさんいたが、入れかわり立ちかわりで最終的には中年のおじさんおばさんばかりになっていた。しかもその中の数人は朝からお酒を飲み、タバコを吸い、部屋の中で一日中しゃべっている。夜は夜で遅くまでまたしゃべっているので私達は眠ることができなかった。店も開き始め、電気もすでに回復していたし余震も減ってきていたので、それまでは昼間しか帰らなかった家に完全に帰ることにした。私は家が無事だからこんなこともできたが、この地震で家を失ってしまった人は嫌でも避難所にいるほかない。夢野台でもたくさんの方が暮らしておられるが、その心痛、疲労はたいへんなものだと思う。そう思うから毎日の水くみもがんばることができた。

自分の家がある。家族がいる。今までは口に出すほどのこともなかったあたり前の生活がこんなに幸せなことだなんて初めてわかった。これからの毎日の中で地震の細かい記憶は少しずつ失われていくだろう。しかし初めて水が出た時のあの気持ちは決して忘れないようにしたい。

最後に、この地震により亡くなったすべての人々、そして私の中学時代の友人のご冥福をお祈りします。

（震災直後のグランド）

どことなく間接的な思い

表　　早　香（48回生）

あの瞬間は、ただ恐かったことしか覚えていない。３、４日は同じ街にいるはずなのにただ、嘘みたいな情報を得ることしかできなかった。そして、１週間ほどしてから少しずつ自分の生活を元に戻して行くようになった。

何ができるのかもわからないまま、怒りのようなものをぶつける対象を探していた。気休めに本を読んでも、あまり役には立たなかった。

近所にも避難されて来られた方々がかなりいるときいた。電車が通ってなかったり、みんなに会えないこと以外は、何一つ変わってないように生活していることが申しわけなく思えた。しばらくの間は、服を送ったり、本当に少しのお金を出し合うことしかできないと思っていた。

それから何かのきっかけで、ここに来れる人がいるのに向こうに行けないわけがないとふと思った時、このままでいたら、これからずっと人の優しさに触れる度に生きるのが辛くなるように思えた。そんな思いがどうしても消えなくなって、その週末にたった１日だけど避難所になっている、ある学校へ手伝いに行った。物資運びや炊き出しなどとんでもなく大変だったのに、手伝いに来ていた人は予想外に少なかった。しばらくの間そこで生活することを強いられている人たちも、いつまで続くかわからないことに、とんでもない不安や疲れを抱えていると思う。けどそれにしても、あまりにも全てを人任せにしているように見えたのには驚いた。

たった１日のことで何の役に立ったのかもわからないけど、残った疲れがまた、私を辛い気持ちにさせた。

（グランド風景）

『ボランティア』とは…

川　添　友　理（48回生）

日が経つにつれ、被害はますます大きくなるようでした。最初は状況が分からなくて、「このままだと、死者も1000人越してしまうかも…。」と心配していたのが、5500人余りという、多くの犠牲者をあっという間に出してしまいました。そして、1ヵ月以上経った今、まだまだ避難生活を余儀なくされている方は、減りそうにもありません。「もう、1ヵ月…。」多くの方が、そう思った事と思います。もう1ヵ月以上経ったのに、現状は…。そんな幻滅した気持ちが含まれているように思います。ですが、そんな中一生懸命神戸を立て直そうと、頑張っている方々もおられます。その中でも、ボランティア活動をされている方のことを、今回考えさせられました。

ちょうど冬休み前に、私は塾のスタッフの方に、「ボランティア～もう一つの情報社会～」という本を借り、読んでいたところでした。でも、半分程読んでから、忙しい、忙しい、とそのままになっていました。そして、今回の震災が起こり、ボランティアの方が忙しく動き回り、「居ても立ってもいられなくて、ここまで歩いて来ました。」などと、言っておられるのを聞いて、本にも同じようなことが書いてあったことを思い出しました。そして、私が共通して思ったことは、「どうしてここまでできるのだろう。」ということでした。私も家から近ければ、すぐに行っていたと思います。でも、電車も通ってなくて、何時間も歩かなければ…となると、その気持ちも鈍ります。また、まあ、私がまだ高校生ということも多少ありますが、自分のお金で必要品を何十人分も買いそろえ、他人に分け与えるのです。身内や友人なら、そうするでしょう。でも、見知らぬ人となると、冷たいようですが、お金の面なども考えると、躊躇してしまうような気がするのです。

その後、その本の続きを読んだのですが、一貫して、書いてあったことは、「ボランティアとは、『無料奉仕』という言葉で表わされることが多いが、自分が何かを与えているのではなく、何かを与えられているのだ、そして、何かを受け取って、それが自分にとって、価値があると感じた時に、自分は『報酬』を受け取ったのだ、助けるつもりが、助けられたと感じ、与えているつもりが与えられたように感じる、と。そして、その為には、『つながり』が必要なのだ。」ということでした。「ああ、なるほどなぁ。」と思いました。でも、普通、その『つながり』を持つのが大変なのではないか、とも思います。

例えば、私なら、募金に協力したり、援助物資を送ったり、というその時だけのボランティアならできても、毎日となったら、しんどくなるんじゃないか、ケガをするかも、何か文句を言われたどうしよう…と不安がふくらんできて、さらには、人から「立派だ」と思われたいだけじゃないか、などと考えだし、せっかく「やろう！」とふりしぼった勇気や気持ちが、なえていくのを感じます。何度もアガペ（アガペハウス＝民間ボランティア団体のこと）に電話しようとし、その度にやめてしまいました。結局、身近なところから、とその本を借りた塾のスタッフの方に電話し、塾でボランティア活動をしていたので、「何か手伝うことはありませんか。」と聞いてみたところ、「三宮は危ないし、人数は間に合っているから、家でできることをやってごらん。」と言われました。私は、それで自分を納得させてしまいました。塾なのだから、生徒を危ない所へ連れていくわけがない、ということまでは考えずに…。

そして、学校も塾も始まっている今、私の生活の中心は、「勉強」になってしまっています。どうして、あの時もう少し勇気を出さなかったのか、いや出せなかったのか…。それはまだ、私の中では『ボランティア』という言葉が特別な響きを持っているからだと思うのです。だから、まずは『ボランティア』という言葉をもっと身近に感じて、無理なくできることをやっていこう、と思います。少し気を配ってすることも、『ボランティア』につながるのだという気持ちで、今度は自分の弱さに負けてしまわないように、口だけで終わらないように頑張りたいと思います。

震災で学んだこと

北　田　美由季（48回生）

1月17日のあの瞬間、自分の上にタンスが倒れてきた時、私は地球滅亡がやって来たのでだと思いました。もうすぐ自分が死ぬのか、と思った時、体の震えが止まりませんでした。…というのも私の思い過ごしにすぎなく、父と母がタンスを起こしてくれた時は、もう一度生きれるような気持ちと、家族に会えた安心感がありました。

あれからもう1か月、地震が起こった日から学校が始まるまでは、何か時間が止まっているようで、違う世界で生活している感じでした。私の家は、少し亀裂が入っているのを除けば、しっかり建っているし、家族も全員、不思議なほど健康です。初めのうちは、外に出るのも恐ろしくて、家の中でじっとしているばかりでしたが、母がある日、「私らは助かって、自分の家の片付けばかりしているけど、家を失くした人なんか、片付ける物もないんやねえ。そんな人達がいること、知っていながら、自分のことばっかりしてたら、また地震が来そうな気がする。」と言い出しました。それから話をしていると、家族全員が、何かしなければと思っていたことがわかりました。そして私達は、被災地になっている所へお手伝いに行ったのです。そこで働くと、すごく気持ちがすっきりして、やっと心から笑えるようにもなりました。家にばかりいると、テレビで震災の被害がひどく、亡くなった人のことを放映しているのを見ては涙し、笑うことがあまりなかったのが、外に出て人と触れ合い、話をすることでこんなにも楽になったので、とても驚きました。この地震が起こらなければ、人と触れ合う喜びなんて、知ることがなかったと思います。

また、私の家は、まだガスが使えないので、お風呂に入るために、祖父母の家や、叔父夫婦の家に行っています。そこでも、人の心の温かさが身にしみて、今まで当たり前のように過ごしていた生活が、なんて贅沢で、ありがたいものだったか、ということもまた、身にしみて感じることができました。

私が、この震災に遭って、一番強く思ったことは、5000人以上の人達の死を、無駄にしてはいけないということです。毎日の生活を、「何となくのその日暮らし」ではなく、いつでも自分は精一杯生きているんだと胸を張って言えるような生き方をしなければいけないと思います。そうすることがまた、あの人達の分まで生きていくことにつながっていくと思うのです。

淡路・阪神大震災について思ったこと

黒　木　万　理（48回生）

「神戸には地震は来ない」という確固たる自信は、一体何を根拠に存在していたのだろうか。そんなとんでもないデマのために、耐震の準備をしていなかった多くの兵庫県民が命を落とした。死者は5400人を超え、その中には102歳のおじいさんもいた。数々の戦争を経験し、せっかく生き延びた命なのに、そう思うと涙が出た。生きながら炎に焼かれた人も数多くいた。必死で自分を助けようとする家族達に、埋もれた身体を少しずつ火に焼かれながら、「火が来たからもう逃げてくれ。」と言った時、迫りくる炎に救出の手段を阻まれて、見殺しにせざるを得なかった家族の気持ちは計り知れないものだったと思う。

この震災の後、コロンビアで大地震が起こった。死者は確か、5、60名だったと思う。この数字を新聞紙上で見た時、「なんや、少ないやんか。」と思ってしまった。数字の持つ威力は恐ろしい。震災後、１時間毎に100人、200人と増えていく数字に、これが死者の数であるという神経がマヒしてしまったのだろう。数字に対する感覚が鈍くなっている。死者50人を少ないと感じた自分を恐ろしいと思うし、同時に、おろかだと思った。数字に圧倒されているばかりでは、その数字に隠されている一人ひとりの生命が無になってしまう。彼らには愛する人もいただろうし、夢も持っていたはずである。それが、たった数秒の短い時間に、粉々に砕け散ってしまったのだ。阪神大震災の5400人、コロンビアの50人、その双方に、一人ひとりの失われた命を悲しむ遺族が何千、何万といるのだ。数字の威力は、それら一人ひとりの人権を、ベールの向こうに隠してしまう。どんなに大きな数字であれ、被害の大きさを一瞬のうちに伝えることはできても、本当の惨状を伝えることはできないだろう。

本震が起こって約１ヶ月が過ぎた。もう１ヶ月が過ぎたのかと思う。長いようで短い30日が過ぎた今、世間は冷静さを取り戻そうととしている。１ヶ月前の騒ぎが、まるでウソのようだ。でも、こんなに早く、冷静になって良いのだろうか。神戸をはじめとして、被災した土地には、今だに問題が山積している。仮設住宅、ゴミの処理問題…。マスメディアが復興を唱えつつ、日々、震災関連のニュースを減らしていく中、被災していない土地の人々は、何をどう感じているのだろう。「もう神戸は大分落ち着いた」などと思っている人もいるのではないだろうか。しかし、それは違うと思う。確かに、物的には随分良くなったかもしれない。それでも、天災で家を飛び出した人々は今も、１ヶ月前のまま、不自由な避難所暮らしを余儀なくされている。状況は、何も変わってはいないのだ。１ヶ月やそこらで、肉親や知人、家を失った人々の悲しみが消える訳がない。

マスメディアは熱しやすく冷めやすい。私達の生活は情報の上に成り立っているので、ＴＶや新聞等、マスメディアに左右されやすい。被災地以外の土地の人々に、被災地の惨状を知ってもらうには、ＴＶ等の手段しかない。そして、今回のような交通網の破壊等の２次災害を、２度と起こさせないよう呼びかけるのも、マスメディアだと思う。被害を最小限にくい止めるために、私達はもっと知らなければならない。もう２度とこんな体験をすることのないように。

未曾有の大地震

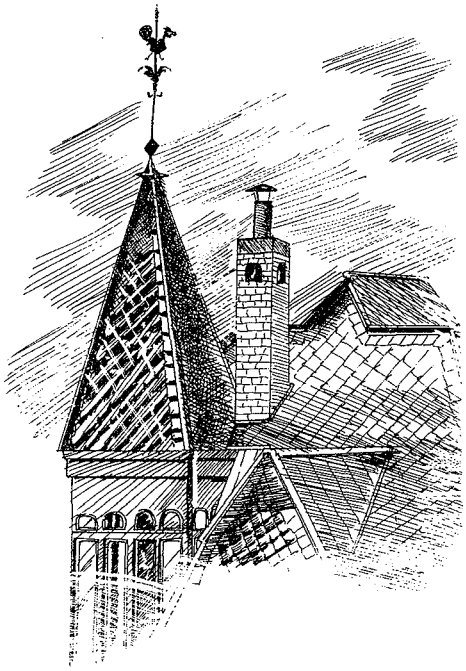
小　堀　良　子（48回生）

あの地震の起こった日、いつもとかわらず、ぐっすりと眠っていた。今まで寝ている間に地震がきても、気づいたことのない私でも目が覚めるぐらい大きな地震だった。

地面の奥深い所からつきあげてくる感じ、また、ベッドの前にある本棚のガラス戸がゆれたうるさい音で目が覚めた。あまりに突然のことで、いつもとは違う地震だとわかっても、頭の中が真っ白になった。まだ、部屋の中が明るかったら、精神的に少しは落ちついていれただろう。しかし、地震が起こった時は、まだ朝の6時前。ドアも雨戸も閉めていて、私の部屋は真っ暗。何が何だかわからなく、ベッドの上の本は落ちてくるはで、相当強い地震だと感じた。そんな真っ白の頭の中に冷静さというものがあった。だから、私はキャーキャー騒がず、じっとしていた。今から考えてみると、なぜ、じっとしていられたのかわからない。動揺、混乱の中で、なぜか冷静でいられた。

しかし、なんとか最初のゆれがおさまると、それとは裏腹に、「この家がくずれて死ぬのでは？」と思った。その時、父が私の部屋にかけつけてきて、「大丈夫か？」と声をかけてくれたので、安心した。そのあと、家族4人でかたまっていると、親切にもお向かいの人が音量大にして、近所に聞こえるようにラジオをかけて下さったので、それに耳を傾けて聞いていた。ある程度落ちつくと、下におりてみた。もう、めちゃくちゃだった。テレビは落ち、本は落ち、食器は割れて、想像をはるかに超えていた。その日の朝10時頃には電気・ガス・水道も戻り、ほっとした。テレビをつけてみると、あの頑丈そうに見えた高速道路はみごとにくずれ、家もくずれ、あちらこちらで火の手もあがり、まさか、こんな大地震が神戸にくるとは、思ってもみなかったので、ただただ、驚くばかりであった。

日がたつにつれ、地震の恐ろしさが身にしみた。母が趣味で集めていた食器が割れて、残念と思っていたが、これは命あってこそ言えるんだとわかった。多くの人が亡くなられやはりショックだった。人間の命、人間が築きあげたもの、本当に多くのものを失った。しかし、この地震で学び得たものもたくさんあったと思う。自然の恐ろしさ、いくら人間が科学的に進歩しても、自然には勝てないこと、また、人とのつながりなど……。そんな忘れかけていた大切なことを、ある意味で、教えてくれたのでは？と私は思う。



阪神大震災について

阪　本　幸　範（48回生）

１月17日、突然の地震によって目が覚めた。始めは、意識がうつろだったが、あまりの揺れと、部屋のあちこちから、物が落ちる音、ガラスの割れる音などが聞こえてきたため、「ただ事ではないな。」と思った。そして、しばらく停電が続いたので、懐中電灯の明るさだけで、夜が明けるのを待った。

夜が明け、家内の有様を見て呆然となった。しかし、もっと驚かされたのは、テレビがついて、神戸の下の方の現状を見た時だった。すさまじく悲惨な光景に何も言葉が出なかった。あらためて自分の家の被害の小ささが分かった。

僕は最初に部屋の片付けをした。幸い自分の物に破損したのはなかったが、家の高い所にあった物は、ほとんど落ちて壊されていた。それから、家では余震に備えて、すぐにでも逃げられる用意をした。昼になって、落ち着いてきたので、父は仕事場に行った。僕はずっとテレビを見ていた。その晩、ずっと長田区を中心に火事があった。それもかなりの大規模で、全く消火活動がなされていなかった状態に腹が立っていた。焼けるものすべて焼きつくして、やっと鎮火した。その焼け跡を見た時は、ものすごいものがあった。まさに焼け野原という感じだった。

それから数日後、西宮のあらゆる所に避難している親戚に、食べ物や歯ブラシなどの生活必需品を持っていくために、家族ででかけた。夜になってから出発したので、道もあまり混んでいなかった。車の中からは、いろんな家や店が倒壊しているのが、次々と目に入ってきた。それは、テレビで見ていたのとは全く違う感じがした。何度も見たことのある建物などがあるだけに、それだけ一層、心をうたれて、涙が出そうになった。

それからの毎日というものは、余震が度々あるけれど、なんか慣れてしまったって感じで、だらだらする日が続いた。そして、学校の再開が始まる中で、夢野だけは、かなり遅れた。こんなに学校に行きたいと思ったのは、今までの人生の中では、まず、ないだろう。最近やっと学校が再開された。ほぼ、１ヶ月ぶりに見た学校は、だいぶ変わっている様に思えた。それよりも、１番ショックだったのは、テニスコートだ。わずか、１年足らずで、帰らぬ物となってしまった。次の日から、次第に授業もできるようになっていったが、避難している人々がいたり、水が出ないとか、まだまだ、不便な生活が続くけど、やっぱり、これくらいは我慢するべきだろう。

この体験は、みんな一生忘れないだろう。修学旅行が中止になったのは残念だけど、それに変わるだけの思い出になるはずだ。将来、自分の子供に、この話をするのが夢だ。最後に、地震以来、毎日毎日、復旧工事が進んでいるけど、早く、元の神戸に戻るように頑張ってほしい。

あの日を振り返って

相　良　英　憲（48回生）

もう５ヶ月が経った。５ヶ月も経った。なれない神鉄で学校へ通う。なに不自由することなく、平凡に日々を暮らしている、また過ぎていく。いつも満員で、締めつけられた電車の中で、はやく人が下りることばかりを考えている。駅についても人ごみの中、人の多さばかり考え、初めはその人の多さに驚いた。

この神鉄線にも広場という広場には仮設住宅が建っている。２日、３日もすれば、立派なものができている。その工事の早さはすさまじい。数だってたくさんあるはずなのに、まだまだ足りないのが現状だ。ほとんど被害のなかった家々の間に、弱々しく一ヶ所にかためられた仮設住宅を見るとなんとなくもの寂しい思いがする。でも有難いものにはかわりはない。それとは対照的に、ぼくの家の周りには、ほとんど家がない。ぼくの家というのは学校から近い所にある。ぼくの家からは、今まで見えなかった会下山が見えるし、今工事している神鉄の線路も見るようになった。なんだか見はらしがよくて、最初は、楽しくて、じっと工事を見ていた時もあった。しかし、次から次へと周りにあった家が解体されていくにつれ、ここにいた人はどこへ行ってしまったのだろうと考えるようになった。近所で今だに住んでいる人は５軒だけだ。崩れかかった家や、傾いた家、完全に壊れた家などがほぼ全てなくなった。あとに残ったさら地の広さを見て、あの地震の揺れのひどさが自分の体に残っている感覚と違った感覚で感じとれた。

午前５時46分、ゴォーというすさまじい音と共に目がさめ、寝起きの自分に、これが何であるのかも考える間もなくいきなり下からつき上げられた。そしてまた下にたたきつけられて、それが４、５回続いたかと思うと横にゆられた。タンス・置き物・本棚・テレビボード・食器棚、ありとあらゆるものが、いっせいに倒れた。タンスが自分の方へ倒れてくるのが、なんとなく見えた。食器が全てわれる音が聞こえた。前の家の崖が崩れ落ちる音も聞こえた。屋根瓦が落ちて割れる音も聞こえた。その時、「これで死ぬんだなぁ。」と、思った。これしか考えれなかったし、考える間もなかった。やがて揺れがおさまり、自分の生きていることがわかって立とうとした時、粉々になったガラスの破片の音を聞いて、どれほどひやりとしたことか。そして歩こうとしても真暗で、いつもない場所にタンスやザラザラした感触。動けず逃げれず、不安になって口に出して叫んだ言葉が「お父さん」だった。今になって、どうして「お母さん」ではなかったのか不思議に思う。いざという時には父親という思いがあったのだろうか。それにしても、かわり果てた家の中で、みんなが怖い思いではい出てきて、柱の下に家族４人が集まった時、今までの自分が何であったかと思うほどほっとしたし、心強くなった。

まだ薄暗い明け方に、家の中からほじくり出した懐中電灯と、ラジオをもって、兄といっしょに近所を見て回った。砂ぼこりが舞っていて、車のライトがぼんやり見えた。そんな時、なぜかぼくは、歩きながら耳にラジオ、手には紙とペンを持っていた。そのために何時にどこで、震度はいくらでということがすぐにわかった。その紙には、「９時15分行く。」と書いてある。近くの公民館に避難したことだろう。ぼくたちが行った時には、もう人がいっぱいで、足の踏み場もなかった。

避難所にはそう長くいなかったが、たくさんの思い出がある。２、３日眠れなかったこ

とや、ボランティアみたいなことをしたことなど、いろんなことを体験した。しかし、それから、学校が始まるまでの１ヶ月間、何をやっていたのか、まったく覚えていない。どこに行ったのかも覚えていない。次に記憶があるのは、鈴高で集まったことだ。

こうしていろいろと思い返してみると、被災地から離れた所にいるせいか、あのころの思いが希薄になっている。いつまでも引きずらない意味では、いいことかもしれない。記憶として残っているものは忘れていっても、印象として残っているものは忘れない。

まだ学校にも他の施設にも避難されている人は数多くいる。ぼくの知っている人でも、今だに避難生活をしている人がいるけれど、その人は、いつも、「あんな所はしんどい、つらい。」とばかり言っている。そんなことを聞いても、ぼくは何も言えない。「がんばって下さい。」という言葉は、一番言ってはいけないと思う。それは、避難し、何をしていいのかわからない人が、最も必要としているものは、今からどうするかを、じっくり考える時間が必要であって、こういう言葉を周りからたえず言われると、かえって、行動することを急き立ててしまうように思うからだ。だから、あまり励ましすぎるのもいけないし、そっとしててやることが、一番いいと思う。仮設住宅に入っても、そこが自分の家だなんて思える人はほとんどいないだろうし、今まで通りになったなんて言えない。そんな人たちの苦しみは、だれだって分からない。ぼくもちっとも分からない。やっぱり、被災し、避難している人たちの気持ちは、その人にしか分からないのかなぁと思う。

最後に、ぼくは、多くの人に助けてもらったし、お父さん、お母さんにも助けてもらった。地震当日一番動いてくれたのはお父さんであったと思う。その時に、避難所で、「子として自分は養われてる身なんだなぁ。」と、改めて思ったことを覚えている。また、避難所は寒かったので、温かいお茶を用意するために、３、４日眠らないで、世話をしてくれた人のことも覚えている。ぼくも、施設の中で、いろいろとしたが、まだもっとできることがあったのではないかと思う。これからは、この経験を生かして、周りの人に対する気配りや、思いやりを忘れずに、また、自分自身にも強くなろうと思う。

震災のあと

四　宮　将　光（48回生）

自分は平成７年１月17日に起きた阪神大震災によって家を失った。我が家は最初は原型を留めていたので、少し修復すればまた住めるのではと思ったが、見た目以上に損傷はひどく、震災から１ヶ月もしない間に解体され、跡形も無くなってしまった。もっとも、こんな早い時期に解体されたのは幸運と言うべきであろう。解体してもらうのが１年先という所もある。それはさて置き、自分は意外と適応力があるようで、震災以来、親戚や知人の家を転々としてきたが、どこへ行ってもすぐに馴染んでいった。この作文を書いている平成７年６月18日、元の土地に新居が建つまでの間住む事になるプレハブに引っ越して来たばかりだが、思っていたより住みやすそうで、ここにも直に馴染めそうだ。幸い、家の中の物を持ち出す時間は十分にあったので、身の周りで足りない物はほとんどない。そういうわけで自分の生活は落ち着いてきた。しかし、両親は違うだろう。両親が家を建てるためにしてきた苦労は、苦労知らずの自分などに想像できるものではない。その家を一瞬

にして奪われた悔しさや怒りは計り知れないものだ。さらに、再び家を再建するためにもう一度最初からやり直さなくてはならない。両親ももう若くはないので、自分が少しでも力にならなくてはならない。いずれにしろ気が遠くなる…。

それにしても、これ程の被害を受けながら、自然現象ゆえにどこにも文句が言えない。確かに人間も自然を破壊しているが、その返礼にしてもこれはひど過ぎやしないだろうか。

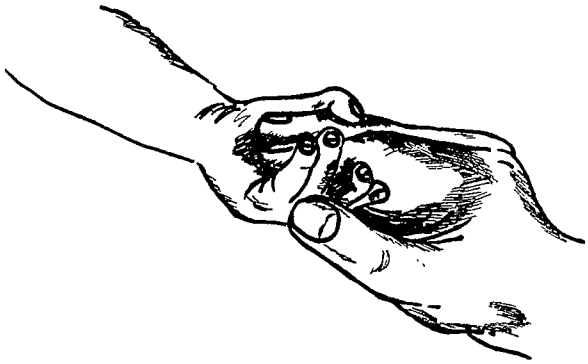
地震で私が感じたこと

西　川　佳奈子（48回生）

“ドーン”というすごい音で目覚めると、いきなりすごく揺れて起き上がることができなかった。私には一体何が起こったのかすぐには理解できなかった。お弁当を作るために既に起きていた母が、たまたま廊下に出ていて、「誰か来てー。火を使っているけど、ドアが開かない。」と、叫んでいるのが聞こえた。その時、父はガラスの破片がちらばっていて動けず、弟はインフルエンザで高熱があり寝こんでいたので、私は急いで下に降りた。「大丈夫。私が行ってちゃんと止めてくるから…。」と言って、廊下ではない方から台所に行こうとしたところで父が降りてきて台所に行ってくれ、火が止まっていることが確認できた。私も母も、地震が起これば自動的に火が止まることに少しも気がつかず、ただ頭の中には、“火を止める”ということしかなかった。私はこの時ほど“自分の家が焼けてしまっては困る。”と心に強く感じた事はない。

しばらくして落ち着いてから父の部屋に行くと、タンスの上の人形ケースなどが落ち、辺り一面ガラスの破片が散らばっていた。その光景を見た時は、体の力が抜けて、「父がけがをしなくてよかった。」と思うと涙が出てきた。もし、母が地震がきた時、台所にいたとしたら…。そう思うと、私はただ家族全員が無事だったことが何よりもうれしかった。また、すごく心配していた友達から電話がかかってきた時も、本当に無事でよかったと思った。

私は今回の地震で、私が普段、何気なく生活している事がどれだけ幸せかを感じた。家族がいて、友達がいて、家があって、食べる物があって…。私は今までその大切さにあまり気がついていなかったように思う。あと思ったことは、人はひとりでは生きていけないということだ。人と人が助け合って生きていけるのだと感じた。



地震にあって

根　来　あゆみ（48回生）

たった20秒で私の生活が激変しました。家がなくなりました。幸せな生活が奪われました。友達をなくしました。思い出すのも嫌だし本当に辛いです。すごく書きたいと思うけれど思い出すと胸がつまってしまいます。

あの日１月17日は、私にとって楽しみにしていた日でした。３連休の前、熱を出して学校を休んでいたので４日ぶりにみんなに会えると思ったからでした。それなのに、ほんの20秒間で私の楽しみも幸せもすべてなくなりました。家族と親戚のみんなの無事が確認できた時本当に嬉しかった。少なくともその時は幸せを感じられました。でも次から次へと死を聞かされました。やはり友達や後輩をなくしてしまったことが一番辛いことでした。私と同じ年で今からって時なのにと思うと今でもすごく苦しいです。夢でありたいと何度も何度も思いました。けれどそう思うたびに現実が目の前に現われました。今でもよく夢であったらなぁと考えたりもするけれどやはり避けられない現実に私は向かっていこうと思います。地震でなくしてしまったものは多いけれど、地震がなければ気が付かなかった事や得られなかったものがたくさんあると思います。自分の中で地震は許しがたいことだけど、でも負けずにやっていこうと思います。私の友達、後輩のぶんまで生きようと思います。自分が助かったこと、それほど大きな幸せはありません。この幸せは絶対忘れません。私には友達がいます。みんな生きています。だから私も頑張って生きます。こんな事は二度と起こってはいけないけれど、もし同じ立場にたっている人がいたなら私は助けに行きます。自分がしてもらったことを返したいからです。

最後にこの地震で私は「生きること。」の大切さを知りました。こんな事は今まで私には考えもしなかったことです。本当に生きていて良かった。

おばあちゃんへ

濱　　志穂子（48回生）

我が家では、毎晩の様に父が地震について話し始める。１月17日、地震が起こった時、父はすでに会社におり、頑丈な建物のせいか揺れはそれほど大きくなかったと言う。しかし、辺りは火がつき出し私が以前住んでいた住宅が倒壊していたのを見て慌てて家に電話をかけたらしい。夜が明けるにつれて、次第に目の前に広がる悲惨さがあからさまになってくる。父は急いで祖母の家へ行き煙の中で一人じっとしていた祖母を連れ出した。その時、火は目の前まで来ており消防車が来ても水が出ない。どうしようもなく父は、祖母を連れて自分の生まれ育った家を後にした。

１月22日、私と妹は現実を見たいと両親に頼んで兵庫区、長田区の祖母の家へ連れていってもらった。不幸中の幸いにも奇跡的に風向きがかわり両方の家は焼けはしなかったが、住める状態ではなかった。やはり、テレビで見ていたとはいえ、現実は違った映像で色のない世界だった。長田区にある祖母の家は全壊だった。早くから夫を亡くし一人で働いて建てた家だ。小さな頃からの、たくさんの思い出が一瞬にして消えさった気がしてボーっ

と立ちつくしてしまった。人間の真の気持ちは同じ立場に立って初めて分かるものだと私は思う。だから私には祖母が一体どのような持ちで家を見たのかは想像できない。

祖母が家に来た時、私は、おばあちゃんを見て小さな子供みたいに泣きじゃくってしまった。そんな私を見て、「おばあちゃんは、もう一頑張りして、あそこに家建てるから、又遊びにおいでよ。」と泣きながら言った。その時、自分も自分のすべき事を頑張らなければと心から思った。あの日から、はや5ヶ月が経つ。今日も、おばあちゃんは朝3時に起きて市場で働いている。今は家も解体して跡形もなくなってしまった。区画整理地区に入っている為、これからどうなるのかは分からないが、祖母の建てた家に遊びに行ける日を楽しみにしている。今回の震災で、数多くの尊い命が奪われた。たまたま安全な所にいた自分だが被災された人達のことを思うと祈らずにはいられない。火事の時、一番活躍したのは市民のバケツリレーだと言う。その事は、私達の誇りでもあり希望でもあるだろう。

地　　震

柳　田　慶　子（48回生）

この地震が起こって、たくさんの人がボランティアなどをして、少しでも早く復旧しようと働きかけていた。その中で、私は、“こんなことが出来るなんてすごい”という感心や感動がありました。

すごいと思ったことはたくさんあるけど、友達のことを言いたい。あの地震が起こった時、私は、こわくてこわくて家族の人と和室でかたまっていました。少したって電気がつき、テレビがつくまでは、地震の規模の大きさに、いまいち実感がわいていなかった。時間がたつにつれて、情報がどんどんつたわってきて、ぞくっとした。ニュースを見ていると、火事がたくさんおこっていて、死者もどんどんと増え続けていた。家の倒壊の情報も次々つたわってきて、夢野の方の家がたくさん壊れているのを知って、今までよりももっとぞくっとするものを感じました。

“友達の家が壊れているかもしれない！”そう思い電話をしてもつながらない。どうしようと思い、あせったけれど、私は何もすることができなかった。それから少しして、私の家の方も、電話がつながらなくなり、それがつながるようになったのが、次の日ぐらいだったと思う。ある友達に連絡をとったら、そこに家が壊れた友達がいた。その時、その友達は、「兵庫に避難しとったからつれて来てん。」と、軽く言っていたけど、後からそこのおばさんに聞いてみたら、その友達は、家で「〇〇つれて来て！」と、泣いて泣いてすごかったらしい。それで、お父さんがどこにいるか分からなかったけど、探して家につれて帰ったらしい。それを聞いて、私は、“どうしよう”と思ったけど、何も出来なかった自分がイヤで、イヤでたまらなかった。何で私は、お母さんに、「助けに行きたい。」って言えなかったんだろう。

今思い返しても、自分の弱さを悲しく感じます。それに比べて、その友達は強い。ほんとに強く、優しいと思った。

今、思うこと

山　田　知　沙（48回生）

今回の地震で、一瞬にしていろんなものが変わってしまった。ゆれている最中は、もう自分のこと以外何も考えられなくて、北区民の私でも「これでもう死ぬかもしれない」と思うぐらいだったので、南の方に住んでいる人の恐怖は想像もつかない。そんな恐怖の中で私に「大丈夫か」と父が声をかけてくれた。私は自分のことしか考えられないのに、私たちのことを心配してくれる父を、さすがだと尊敬した。地震のゆれもとても恐ろしいことだが、暗闇の恐ろしさというものにも初めて気づいた。太陽が昇り、明るくなってきただけでも、ずいぶん気が楽になった。そしてテレビがつき、無惨な姿になってしまった神戸を見た。泣きたくなった。横倒しになっている高速道路。傾いているビル。ものすごい勢いで燃えている町。まるで、どこか遠くの国のことを見ているような気がしたが、それはまぎれもなく、私が生まれ育った神戸だった。自分のまわりの被害が小さいことに気づくと、そこで初めて長田区や兵庫区にいる友達のことが心配になった。それまでずっと、自分のことしか考えられなかった自分が情けなかった。そして、知っている人が亡くなったことを聞いて、改めてこの地震が、ごく身近なことだと感じた。でも、今でも少し気を抜くと、この地震が神戸でおこり、ものすごい被害があったということを忘れてしまう。それほど、信じられない、想像を絶するようなことがおこった。

自然には、やっぱりかなわない。人間がどんなに考えて、抑えつけても、自然に負けることの方が多い。そんな自然の法則に従って生きていくのが、いちばん人間らしいことのような気がした。

美しく、華やかだった神戸に、今は以前のようなにぎわいはないけれど、これからの新しい神戸をつくるのは、これから大人になる私たちだと思う。今は、たいしたことはできないけど、この地震で、チームワークのよさや、人を思いやる心があることや、前向きな気持ちがあることがよく分かった。「若い者もヤルときゃヤル」と言わせることもできた。だから、きっと、以前よりもずっとすてきで、誰からも愛されるスーパーシティ神戸ができるよ、と思っている。私も、その力になりたい。

（炊き出し）

地震について

横　山　貴　志（48回生）

北海道南西沖地震やはるか沖地震などをすごいなぁと本当に他人事のように思っていたけれど実際に体験してみると一言ですごいと言うだけでは語り尽くせないものです。地の底から聞こえてくるような地鳴り、ガラスの散乱する音、近所の人の叫び声、ガスの臭い、暗闇、火事、忘れられない事が山ほど思い浮かんでくる。

自分の家が傾いているのはすぐに分かった。そして頭の整理がつかないまま、余震がおさまってから玄関の外へ出ると同じマンションの人と会って一瞬ホッとしたのもつかの間火事が近くで起きていて、火の粉が自分の目の前に降ってきた時の恐怖感も忘れられない。すべて燃えてしまうのかという不安を抱きながら何も出来ずにただ燃えさかる炎を見ているだけだった。運よく火は3軒程隣で消えてくれてホッとした。一生に1度経験するだけで充分であった。その後に続く学校の路の下、公園のテント、車の中で過ごした10日余りや食事は4日程で別に問題はなくなったのだけど、排便時の悪臭は実に悪夢でした。

この地震で失くした物は非常に多いけれど、人の心の本当の姿を見たような気がして、そういう事では得たものも大きいように思う。普段ならめったに口をきかない人や全然知らない人とも抵抗なく会話が出来たし、持っている物をみんなで分け合ったりもした。今はまたもとの状態に戻りつつあるけれどあの時の人の心の変化というものは忘れられないものがある。

話は変わるけれど、避難訓練というのは無意味なような気がする。少なくとも今回の地震では、“あそこにしまってある大切なものを持って逃げよう”などと考える事なんて不可能だと思うし、もしそんなのが出来るくらいなら家が崩れてしまうようなものでもないだろうし、だったらそのまま居残っていても平気なのだから。確かに普通の火事などでは必要でしょうし、しないよりする方がいいのでしょうが、そんな事より国が大災害訓練みたいなのをした方がより役立つのじゃないでしょうか。

それにしても、昔からよく言われている“地震・雷・火事・親父”の1位にたつ地震には納得がいった。自然の力はすごい。

（グランド風景）

びっくりしたなあ、もう

綿　貫　政　志（48回生）

あの日はひさしぶりに熟睡できた日だった。連休はずっと、美術の作品の石をみがいていて、あまりよくみがけなかったなと思いながら床についたのを覚えている。しかし、その久しぶりの熟睡さえも破られるような出来事がおこるとは思ってもいなかった。

突然、床から放り出されるような感じがして、深い眠りから一瞬にして目が覚めた。しだいに頭が冴えてきて、地震だということに気がついた。しかし、ゆれている最中は、不思議と恐怖は感じなかった。怖さがこみ上げてきたのは、ゆれが収まってからだった。周りを見ると、机の上の物や、本棚の本、タンスの引き出しなどがほとんど床に落ちていて、そこら中に散らばっていた。自分の布団の上には、棚の上にあった日本人形のガラス箱のガラスが割れて突き刺さっていた。毛布が無ければケガをしていたと思う。

幸い、家族にケガ人はいなかった。外は不気味なほど静かだった。下の階に降りると、テレビやピアノが少しずれていたり、食器棚の中の食器が床で半分以上砕けていたり、電灯が落ちて壊れていたりで、居間には入れなかった。しばらくして、少し片づいてから入ろうとすると、ガラスの破片が落ちているかもしれないからスリッパをはけと言われた。庭の植木バチもほぼ全滅だった。

うちで飼っている熱帯魚の水槽は２つとも無事だった。しかし、その後数時間の間、電気がこなかったので、ヒーターが止まってしまい、水温が12℃くらいまで下がって、魚が２匹死んでしまった。何もしてやれなかった。きっと須磨の水族園の人はもっと辛かったと思う。震災後のニュースで、水族園の魚などがほぼ全滅したというニュースを聞いた時に、そう思った。

時計を見ると、（１つだけ動くのがあった）まだあの出来事から何時間もたっていなかった。僕はその時、フッと、ちょっと前にテレビでやっていた、「矢追純一のＵＦＯ特集！！米・アリゾナでついにＵＦＯの基地発見…か？」（再）系のうさんクサそうな番組で、近い未来に日本の西部の都市に大災害がおこると言い残していったという話をしていたのを思い出してゾッとした。しかし、テレビを見ると、被害の大きな地区の人々はそんな非現実的な話に今はかまってられないというような映像が流れていて、なんか悲しかった。

こういう時に、人の性格や人格は現れる。自分のことしか考えない人や人の事を思いやる人…。自分がどっちの人間に分類されるのかはわからないが、わからないということが、人の事を思いやれると言い切れない自分が、なんとも言えず悲しかった。

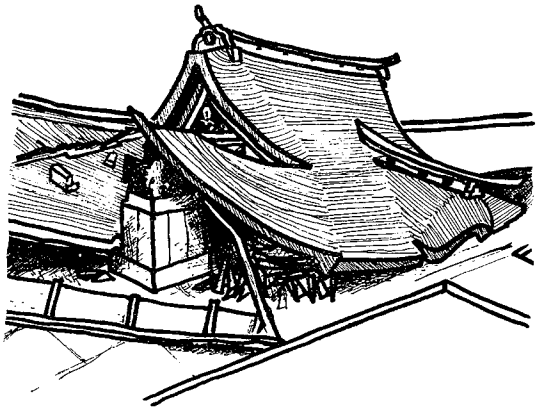
ボランティアの経験

梶　本　千　春（49回生）

西代の体育館に友達とボランティアに行きました。その日は、ボランティアを２回やっていたので、少し慣れていたころでした。体育館に着くと、さっそく下着を配ることになりダンボールのなかには、タイツ・ズボン下・パンツ・くつ下がそれぞれきちんとはいっていました。避難されている人々は多くいらっしゃるので、一ぺんには配れません。それで年齢順、例えば「20代～30代の女性」というように放送をかけてとりにきてもらいます。放送をかけるとさっそく多くの人々がやってきます。どの人も下着をもらうととてもうれしそうに、「ありがとう」とか「おおきに」といってくれます。その時私は「ああボランティアに来て良かった。」と思うのです。

次に、お昼をはさんで靴を配ることになりました。男性ものの靴と子供用の靴です。用意しているとのぞきにやってくる人がいたり、出してある靴をはいて取ってしまったりする人がいます。ちょっときついですがそういう人にはボランティアははっきりと、「まだ用意できてないからね。放送してからとりにきて。」と言わなければなりません。そうしないとあの人だけが…ということになってしまいます。やさしさも必要ですが、はっきり発言することも必要です。はっきり発言することが目立って「あの人はきついね。」と言われているボランティアの先生もいました。でもやさしさよりはきつさの方が目立ってしまいます。

「靴をくばります。」という放送をかけると靴をもらいに多くの人がやってきました。靴をもらうとやっぱりうれしそうで、私は自分は何足も靴をもっているのに、まだ欲しいと思う気持ちにはずかしくなってきました。もらえる靴はもちろん１足でしかもデザインはほとんど同じ。見るからに安ものといった靴です。でもほとんどの人は「はけるなら」と言った感じで文句もほとんどありません。

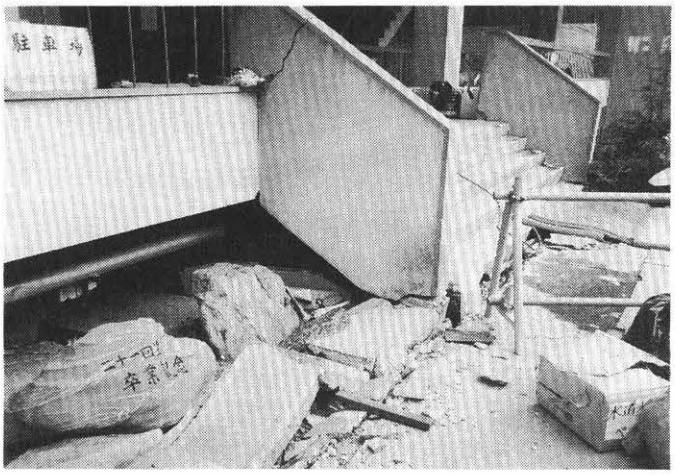


私は家で震災前と同じ生活をしています。被災者の方々は家をなくされ精神的にも苦しいのに、とても落ち着いていてすごいなぁと思いました。

私の阪神大震災

金　本　知　美（49回生）

布団のなかでぐっすりと眠っていたらいきなり「ドンドン」とわけのわからない大きな音がした。ぱっと目をあけてみると部屋のタンスが3つくらい私の上に倒れていた。すぐに下で寝ていたお父さん、お母さん、お姉ちゃん3人みんなが「知美、知美。」と呼び、身動きひとつできない私の上にあるタンスを壊すようにしてどけてくれた。そして電気のブレーカーを切り、家の外へ出てきた。お母さんが隣の人を大声で呼び起こしたりしていた。その間、私は震えて涙が止まらなかった。お姉ちゃんが、「あっち見てん。すごい火事やわ。市場の方かなぁ。」と私に言ったので、見てみると、煙で空がくもっていた。急いで飼っている犬のラッキーとカメのポコを持って隣に住んでいるいとこの一家と一緒に小学校に避難した。学校に着いてからも余震は続いていて、「家はくずれてないかな。友達は大丈夫かな。」という事で頭がいっぱいだった。横にいた知り合いのおばちゃん、私の中学校時代の友人の姉が亡くなったと聞いた。その夜は眠るどころか泣いているばかりだった。次の朝、少し外に出かけてみた。予想以上に火事が広がっていた。中には花がそえられている所もあった。学校へ帰ってみるとみんながイライラしていろんなウワサをしていた。次の日くらいに学校の南側で火事があり、私が気が変になっていてその時のことをあまり覚えていない。「死ぬ覚悟っているものなのかなぁ。」ということを考えていたことは覚えている。今聞いてみると私の住んでいる所のまわりは、ほとんど燃えていたという。また震えた。お父さんに、「火事になっとったら、私死んどったかなぁ。」と聞いてみたら、「自分の命なんか捨ててもおまえ助けるわ。」と言い返された。お母さんに聞いてみても全く同じ答えだった。私は何も言い返せなかった。その後も清原さんから「うちにおいでよ。」と言われたり、ボランティアの人とも仲良くなかった。地震による苦しみと同じくらい大きな幸せと喜びを得たからプラスマイナスゼロかと思った。そして何よりも生きていることが一番幸せだと実感した。



（体育館入口）

阪神大震災

小　島　良　子（49回生）

あの１月17日の地震には大変驚かされたのと同時に、“地震　かみなり　火事　おやじ”の意味を痛感させられました。現に、私の祖父の家も地震の時の火事でなくなりました。でも、幸いなことに、身内の人は全員無事でした。

私は、地震がおこった日の夜、長田区に行くとあたりは一面焼け野原でした。そのことを祖母に話すと、祖母は空襲のときも同じくらいひどかったんだと言っていました。それにしても、予告もなしに、こんな大きい地震が関西にくるなんてとても酷だなぁと思いました。

それから、何日か後に、部活の先輩や友達とで長田区の室内小学校にボランティアに行きました。その小学校では、廊下や玄関にも被災されている方が生活しておられました。それに、水が出ていなかったので、給水車がくるたびに水を求めに行く人を何度も見かけました。その小学校では、流しをそうじしたり、運動場に穴を掘って作ったトイレの処理をしたり、水を運んだりいろんなことをしました。運動場のトイレは、運動場の土を便器の形に掘り、ネットで壁を作ってあるだけのもので大変驚きました。もちろん、仮設トイレもありましたが、ＴＶなどは、被災地の表側ばかり見せてこういった裏側の部分を見せていなかったせいか、小学校ではいろいろなことがわかりました。

それから別の日には、長田区の駒ヶ林中学校に行き、下着の仕分けをしたり、食料を配ったりしました。この中学校では、バナナが大量に余っていました。そこに、配給をもらいに来たおばさんは大量のバナナを見て、「長田区役所のほうは、あんまり食べ物がなかったのにねぇ……」と言っていました。食料が十分にいきわたっているところとそうでない所があり、被災地での生活はかなり大変なことをあらためて感じました。おおげさですが、私は、この２日間だけで多くのことを学んだような気がします。

（新館２Ｆ廊下）

地震と人間

小　薗　あかね（49回生）

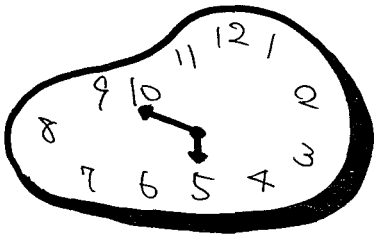
「１月17日５時46分、神戸で震度６の地震が起きました。震源地は淡路島の北淡町。震源の深さは20㎞。地震の規模を示すマグニチュードは7.2です。」

この言葉をラジオ・テレビから何回聞いただろうか。あの時、私はたまたま目が覚めていた。窓の外が光り、地鳴りのような音が響いてきた。その光や音と揺れのどちらが早かったのかは分からなかったが、とにかくすごかった。部屋の電気が今にも落ちてきそうな位ゆれて、家が倒れてしまうのではないかと思うほどの地震だった。でも私の家は幸運にも外見上は何の被害もなく済んだ。私の周りの家もほとんど何もなく、ニュースを見るまではこんなにもこの地震がひどかったとは知らず、テレビを見てがく然とした。幸いにも私の親類や友達など誰１人として亡くならず、その点は恵まれていたと思った。

地震から１、２週間後、電話が通じるようになり予備校から「何の被害もないから顔でも見せに来てほしい。」と言われ、２日後ぐらいに友達と行ったが、その予備校はもののみごとにヒビひとつなくしっかりと立っていた。中学校の時、通っていた塾はとても授業ができるような状態ではなくなっていたけれど……。そもそもその予備校は建てる時に震度７にも耐えられるように作ってあったらしく『さすが』というよりかは『やっぱり』という感じだった。

中学校の時の塾の先生の家が壊れて避難していると聞き、その先生に会いに初めて避難所の扉を開けたが、その中の空気は暗くて重苦しかった。その先生は、ある小学校の体育館に避難しており、私が行った時にはもうすでにそこを去る用意をしていた。その先生は「どうせもう長いこと、この小学校にもおられへんやろうから。」と言っていた。やっぱり面と向かって「もう授業を始めたいから出ていってほしい。」とは言われなくても、避難している人にはそういう不安がつのってきているのかと思うと、何もしてやれない自分や、こういう人達に即座に対応できない日本の社会制度に腹立たしく思うと共に悲しくなってきた。その先生は自分の身内や友達について色々話してくれたけど、どれも嫌な話ばかりだった。

私は今まで人と接する時に、生きているということが当然でその上で色々暮らしてきたけれども、この地震でその考えは消え去ってしまった。生きているということは当たり前なのではなく、とても価値のあるもので何にも変えることのできない尊いものだと知った。普通に生活していると分からない、家族や友達、水や食料などがどれほど大切でかけがえのないものかということが実感でき、良い経験になったとは言いがたいが（こんなにも多くの被害を出した地震を良い経験だなんて私は思っていない）、命の重みを知るという上では、かなりのショックを与えられた地震だったと思っている。５ヶ月たっても、なかなか復興されないこの街神戸は一体この先、いつになったら元の活気あふれる街並に戻れるのだろうか。



地震の恐怖

瀧　宮　久　恵（49回生）

１月17日以後５日間ほど、私にとって記憶にあることはとぎれとぎれしか覚えていません。地震直後の私の部屋は、細長いタンスやファンヒーターなどが倒れ、私はもう少しではさまれるところでした。今考えると、頭と足との方向が逆だったなら…タンスに頭をぶつけてどうなっていたのかわかりません。そう思うと今でも恐ろしいです。

地震がおさまってすぐに、自分の部屋を出ようとしました。でもドアを開けようとしても、倒れたタンスが邪魔をして開けれず、無理やりタンスを押してドアをこじ開けて部屋から飛びだしたようです。そして家族４人と犬１匹とで急いで家を出ました。はっきりいってそのへんの記憶がありません。憶えていることは、自分の部屋で他の部屋にいる両親に、「部屋から出られへん!!」とおもいっきり叫んだことぐらいです。

外に出るとガスの臭いがひどく、「これで火が出たら死ぬわ。」と思いました。辺りの道路はすごいきれつでよくつまづきました。近所の人達は、もうあっけにとられている人ばかりでしたが、やっぱり男の人たちがいろいろ動いてくれて、「さすがだな。」と感じました。私も、近くの１階のアパートの人の家を、外の窓から照らして声をかけました。見知らぬ人の声でも「家のドアが開かない」というのを聞いたときは心配だったし、役に立ちたいと思いました。

少し向こうの道路へ出たら、建物の後ろから火が大きく大きく見えました。「すごい」とつぶやいてしまって、どうしようもなく感じました。近くの木造の家はつぶれてペチャンコでした。17日の昼ごろ、外の道をみると、本当に何もかもがボロボロで声も出ませんでした。自然の力はとても大きく恐ろしいものだと思いました。私の家の前の道からは、光にあたってかげろうのようにふわふわと出ているガスを見ました。空はヘリコプターが飛びまわり、サイレンは聞こえっぱなしで、最初は気になっていたけど２日くらいたつと聞きなれてしまいました。そして余震にもなれてしまい、初めは少しの余震でもこわくて夜も眠れなかったのに今では震度４がきても、「あーきた」という感じです。

私の家の周辺はまだましなのだと思います。もっともっとひどい被害をうけている人達は大変なのだと思います。何か少しでも協力すべきだと思うのですが、何もできません。そんな自分がくやしくてしかたありません。今、少しでも役に立つことができるのは、家での手伝いと、私よりひどい被害にあった友人への手伝い、いろんな明るい話題で気をまぎらわす程度だと思います。役立てることがあまりないのだから、せめて自分の事で迷惑をかけないようにしたいです。そして、みんなで協力してがんばっていくしかないなとすごく思います。

阪神大震災を体験して

谷　口　優　子（49回生）

ゆれている間中、私はずっと震えていた。何が起きたかわからなかったが、すぐに地震だとわかった。家がこわれるかと本気で思った。まっ先に頭に浮かんだ事は、「家がこわれたらローンが増えてしまう」といった馬鹿みたいな事だった。ものすごい音がしていたが、まっ暗で何がどうなっているのかは全然わからなかった。とにかく怖かったので、布団にくるまって、「はやく止まってくれ」と思っていた。余震がずっと続いていたので怖くてたまらなかった。ゆれがおさまってもしばらくふるえが止まらなかった。時間がたつにつれて、なんとか家は無事だという事がわかってきたので明るくなるまでひとまず休もうと思い、また眠った。

起きると部屋がめちゃくちゃでびっくりした。でも思ったほど損害はなく安心した。私はこの時、のん気にも、多分ここらへんが一番激しかっただろうと思っていた。学校にも行けると思っていた。

電気がつくようになってからテレビを見て、初めて事の重大さがわかった。燃えている長田区を見て呆然となった。よく行く三の宮の無残な姿にも驚いた。長田区には友達がいるのでその人達の事がすごく気になった。行こうかとも思ったが、余震が続いていて怖かったし、車はひどい渋滞なのであきらめた。

そのうち震度３ぐらいの地震にも驚かなくなった。コープが開店したので友達と行ってみるとものすごくこんでいて50ｍ以上人が並んでいた。カップラーメンなどは、ほとんど売り切れていた。

水がその日の22時から出なくなり、知らなかった私の家ではまったく水をためてなく大変だった。しかし幸運にもななめ前の家は水が出るので少しもらってひとまずトイレの水を確保した。最初は大変だったが、２、３日するとけっこう慣れてきて今まで水をどれほど無駄にしていたかと反省した。１週間ほどしてやっと水が出るようになった時は本当に嬉しかった。水も出たのでおちついたせいか、長田区の友達の事が気になりボランティアに行く事にしたが、一緒に行く予定の友達の父親が危険だと反対して中止になった。

ボランティアに行こうと思った理由はもう１つある。それは現地で働くボランティアの人々の姿をテレビで見たからである。その人達の中には自分も被災している人や東京からわざわざやって来た人もいたのである。それにくらべ、水もガスも電気も使えながら何もせずに家でゴロゴロしている自分がとてもはずかしく思えた。でも一人で行くにはやはり怖いし他の人を誘ってもいろんな面で迷惑をかけるので結局ずるずるとすごしてしまった。

そしてやっと登校日がやってきた。２週間ぶりである。登校日と言っても夢高にではなく鈴蘭台高校にである。しかも兵庫・長田区の人は夢高に集合するので長田区の人が無事かどうかはわからなかった。でも集合した時に、「全員無事です。」と聞いて心底ホッとした。中学別に集まった時に誰かが、「ボランティアに行きたいなぁ。」と言いだし、もちろん私も賛成して女子７人で２日後行く事になった。私は他の人も私と同じふうに思っていたのでとても嬉しかった。

まだ長田まで電車が通ってなかったので途中からバスで行く事になった。ひさしぶりに早起きしたのと、ずっと立っていたので夢野に着いた時はすでにつかれていた。しかし歩

くにつれて建て物の被害が激しくなっていき見ているとつかれもふっとんでしまった。夢高に行ったがあまりする事がなく私達は西代の文化体育館に行く事にした。「がんばろう」と思っていたが、する事がわからずだんだんつかれてきた。でも、しだいにやる事もわかり「来てよかった。」と思えるようになった。お弁当を持って行かなかったのでごはんをもらった。なぜお弁当を持っていかなかったかというと、テレビで届けられたお弁当などが多くあまっている所を見たし、私の母が実際、ボランティアをしている学校からあまっていたお弁当を持って帰って来たからである。結局自分の家のごはんでおなかがいっぱいになり、そのお弁当は捨ててしまった。せっかく各地で作ってくれたお弁当が捨てられているなんてすごく悲しかった。しかし私の行った所ではあまったりはしないらしかったので次からは自分で持っていく事にした。けれど、学校が再開されて被災した友達に聞くとやはりあまって捨てる事が多々あるらしい。帰りが遅くならないように5時に終わる事にした。すごくつかれたが、とても充実した気分だった。

2日後、また行く事にしたが5人しか来ず、お昼からは3人になった。3日目は3人だった。この時、つかれはピークに達していて、頭痛はするし、もうフラフラだった。4時頃、帰ろうとしたら、“さくら”を頼まれた。被災している人達を元気づけようと、何かのイベントをしているのだが客が少ないらしい。行ってみるとカラオケ大会のようだった。友達も歌い、けっこうもりあがった。チャップリンの格好をした人もいた。みんなけっこう楽しんでいるようだった。イベントが終り、帰る頃にはもうクタクタだった。3日間だけだったが、とてもいい経験ができたと思う。

それにしてもボランティアというのは大変だなぁと感じた。交通費がだいぶかかってしまうのが一番こたえた。交通費をうかそうと、4～5キロの道を歩くので時間がかかるし体もつかれる。ボランティアの人は交通費をなしにしてほしいと何度も思った。今では、ようやく長田まで電車が通じ、お金もかからずに行けるようになった。だから、これからは学校帰りとかにでも、行けるかぎり行こうと思う。

今まで、他の地域で地震などの災害があっても、私は、「ひどいなぁ。」と思うだけで、これといった支援をした事がなかった。でも、今こうして神戸に全国各地、そして世界各地からの救援物資が届くのを見て、これからは私も何かしようという気持ちになった。「今の若者は何を考えているかわからん」と言われていた若者が先頭に立ってボランティア活動をしているのを見て、日本もまだ大丈夫だなと思った。今回の震災で、本当に貴重な体験をしたと思う。それを忘れてはいけないと思う。はやく、もとの神戸に戻ってほしい。

今の気持ち

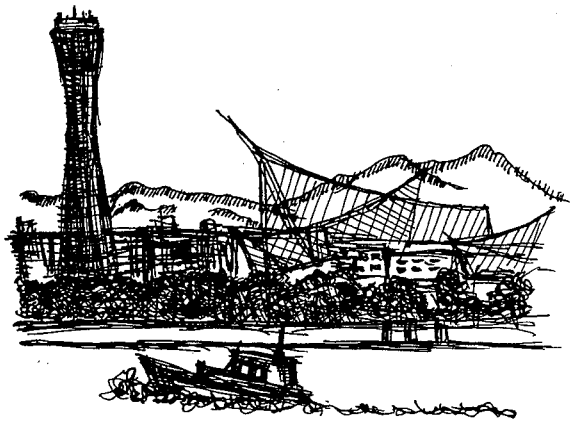
親　里　未智留（49回生）

今、いやずっと前からかもしれない。あまりいい気分で眠れない。何故だろう。目を閉じると『また地震が来るんじゃないだろうか。』という気持ちがあるのかもしれない。どうすればいいんだろう。グチャグチャになったビルや燃えつきて灰になってしまった家。そして、それらのために避難された人たち。本当にアッという間に。普通の、本当に普通だった生活がもろくも、いとも簡単にくずれていった。悲しさを通りこし、むなしさがわいてでてきた。

その時一番ショックだった出来事は友達の家が焼けてしまいそれをさみしそうに見ていた友達の姿だった。何も声をかけることができなかった。一瞬はずかしくなった。それは何もできなかった自分にだろうと思う。

いつまでも耳に残っている言葉がある。それは、「これから、神戸を復旧してもとどうりに、いや、それ以上に栄える街にオマエたちが立て直していかなあかんねんぞ。」とぼくと弟に言った、そのおやじの一言だった。本当にその通りだと思う。

最後に、未来の自分がこの作文を読みかえした時に、
「この震災をバネにしてガンバレ。」と声をかけておこう。



1月17日からの生活

野　本　峰　孝（49回生）

地震が起きたと分かった時、すぐに何もできなくて、何も上から落ちてこないのにふとんの中に入りこんだ。父はすでに起きていたらしく、弟に向かって叫んでいた。揺れがなくなって、ぼくはまずポケットラジオと懐中電灯を取って、家じゅうのガスの元栓を閉めて、電気のヒューズを切った。その時に割れたガラスをふんだが、明るくなるまで全く気付かなかった。明るくなるまで家の中は全く火の気がないのに、パジャマ姿でも寒くなかった。寒さよりも怖かった。

日が昇り始めて、電気がくるまで何もできなかった。テレビで信じられないような状況を知って、初めてどんな事が神戸に起きたのか分かり、父と急いで須磨の祖父の所へ向かった。道はすごく混んでいて、離宮公園の前まで行くのに、２時間近くかかってしまった。山陽電車より南側はほとんど家が倒壊していて、祖父の家も全壊していた。家に入ると、祖父が泣きながら出てきた。戦争よりも恐ろしかったと言っていた。そしてすぐに祖父と一緒に自宅へ戻った。家に帰るとガス・電気は戻っていたが、水はまだ出なかった。夜、今度はおじさんの家に向かった。須磨から見た東の空は炎でまっ赤に染まって、恐ろしかった。おじさんの家も傾いていて、おじさんの一家４人も家に来ることになった。狭い家で９人暮らすことになって不自由だったがつらいだとかいやだとは思わなかった。また友達とも連絡がついて安心した。

ようやくいつもと同じ生活にちかくなってからは、友達としあわせの村のボランティアに行った。家に居てもひまだったので行けるだけ行った。全国からの救援物資を開けて、仕分けする作業だった。ダンボールはどれも重く大変な作業だった。中には、カイロ、ウェットティッシュ、衣類、おむつなどいろいろな物があった。次々と運ばれてくる救援物資で広い体育館がみるみるうちにいっぱいになった。送られてくるダンボールの中には、はげましの手紙も入っており、全国のみなさんの暖かさが感じられた気がした。

まだ今現在も仮設にも入れない、テントで生活している人が夢野台をはじめ、たくさんいる。もっと県、市にがんばってもらって１日でも早く不自由な生活から抜け出してもらいたい。神戸の街は絶対にどこよりも美しい住みよい街になると思う。そしてぼく達がずっと美しい神戸を守っていかないといけない。

負けられない

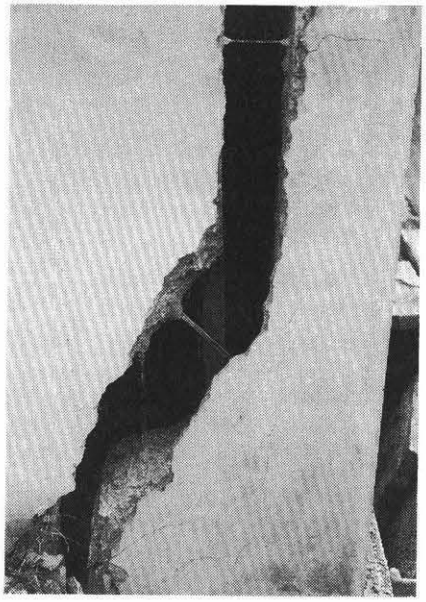
橋　本　聡　子（49回生）

わけがわからなかった。何が起こったのかわからなかった。どうしていいかわからなかった。こわかった。死ぬかと思った。本当におそろしかった。真っ暗な中で非常ベルだけがなっていた。棚から落ちたひょうしにオルゴールが勝手になり始めていた。その音が耳についてはなれない。しばらくしてから「お母さん」と叫んだ（らしい）。お父さんが懐中電灯をもって助けにきてくれた。もし電灯がなかったら、下に降りる階段はぬけてしまっていたので、落ちていたところだった。なんとか家族全員一番下にある店までいけたもののシャッターが開かなかった。出られないと思った。早くしないと死んでしまうと思った。外からとなりの人が手伝ってくれて、なんとか出られた。

市場の外に出ると、空が真っ赤だった。火の粉が飛んできた。東の市場が燃えていた。風向きが東から西だったから、もうぜったい火事になると思った。でも、その間にあるあき地のおかげで火事にならずにすんだ。

そうこうしていると、中学のときの友達が亡くなったと聞かされた。そんなこと信じられるわけなかった。今、何が起こっているのかよくわからないのに、そんなこと絶対信じられない。今でもこの地震が夢なんじゃないかと思うことがよくある。夢やったら早くさめてほしい。本当にそう思う。

地震からもう１か月近くがたって、いろんな人に助けてもらって、今自分が生きていることが本当にうれしい。人のやさしさとか、強さとか、本当にすばらしいものだと思う。命をもう１回もらったようなものだから、これから、しっかりと生きていきたい。犠牲になった人達の分まで、それを無駄にしないように、いつまでもこの苦しさを忘れないでがんばらないといけないと思う。



（格技場外壁）

この地震によって、失ったものは悲しすぎるほど多くて、大きいけれど、そのかわり大切なことがいっぱいわかった。すべての人にお礼をいいたい気持ちでいっぱいです。助けてくれてありがとう。心配してくれてありがとう。言葉にできないほど、たくさんの人のあたたかい心を感じた。

はやく、１日もはやく被災したすべての人が元気でもっとよい生活ができるように、心から願っています。自分が今できることは少ないけど、できることを精一杯やろうと思う。信じて、協力しあってがんばれば、きっとどうにかなるはずだから。

地震で学んだこと

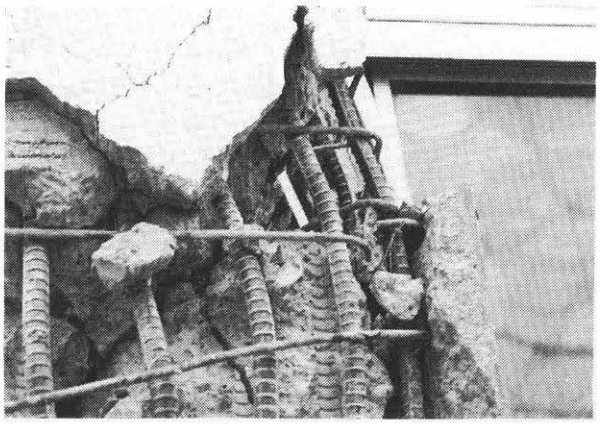
林　　慶　子（49回生）

私はあの地震で家の周りが危険になり、近くの保育所で避難することになった。そこでいろんなことを学んだ。まず、みんなで力を合わせること。給水車がきたら、お年寄りの人から若い人までみんなで水を運んだ。私は、水というものはとても重いなと思った。そしてみんなで協力することはとても大切だなと思った。

次にボランティア。保育所にもたくさんのボランティアの人達が来てくれた。布団を持って来てくれた人、飲料水を持って来てくれた人、炊きだしをしに来てくれた人など、たくさんの人が来てくれた。来てくれるたびに、ほんとうにうれしかった。私は広島県から炊きだしをしに来てくれた４人のおっちゃんと仲良くなった。おっちゃん達は３日間、泊まりこみで来てくれた。テレビを見ていたら、「おっちゃんも混ぜて。」と言って、一緒にテレビを見ながらいろんなことを話した。そして最後には、「広島に遊びにおいで。おっちゃんが案内したるから。」と言ってくれた。とてもうれしかった。おっちゃんと一緒に写真を撮った。そして住所も聞いたので、お礼の手紙といっしょに、写真を送ろうと思っている。とても親切でおもしろいおっちゃんだった。おっちゃんが帰る時は、保育所にいるみんなが外に出て見送ったぐらいのいいおっちゃんだった。私は絶対におっちゃんのことを忘れないと思う。またできれば会いたいと思っている。

次に友達。たくさんの友達が心配してくれた。私の家には電話が通じなかったし、テレビなどで私の家の近くがよく映っていたから、すごく心配してくれた。電話をやっとかけれるようになってかけたら、「泊まりにおいで。」とか「何かいるものない。」など聞いてくれた。私はすごくうれしかった。ほんとうに友達っていいなと思った。

私はこのようなことを知ることができて、すごく自分にとってよかったなと思う。これから先、このようなことをバネにして生活していきたいと思う。



（新館の柱）

明日に向かって

前　田　晋　三（49回生）

鈴蘭台高校に集まった時にラグビー部で集まって次の日に学校を手伝おうということになった。40人ぐらいだったと思う。

当日神鉄は鈴蘭台駅から新開地駅の区間が不通になっていたので、バスで行って平野から学校まで歩いていくことにした。行く途中ちょっと辺りを見ながら行こうということになったので、僕達は少し遠回りしながら向かった。そこで目にしていった事柄は、本当に何と表現したらよいかわからないが、何か現実と空想の中枢が入れ替わるようなそんな衝撃が僕の頭の中を走った。テレビで被災地の状況を認識していると思っていたことは一気に崩された。改めてこの地震のすごさを肌で実感した。

学校に着くと、いつも部活などで使っていた道は家でふさがれていた。中に入って教室に入ってみると、もう他から来ているものもいた。僕達の仕事はほとんど掃除などで、後ロッカーなどもたてた。時間的には１～２時間ぐらいのものだったが又明日来るとみんなで決めて、昔の姿から変わってしまった学校を後にした。

その後小学校に避難している友達の所に行くことにした。救助物資を配っている声も聞こえた。友達の所に行ってみると被災者の人達がたくさんいる中にいた。その友達は顔は笑っていたけれど、僕は少し元気がなく少し顔がやつれているように思えた。そしてもう１人の所にも行こうと学校の外側に足を運んだ。辺り一面焼野原だった。言葉が出てこない。それは一言二言では言い表せない姿になっていた。

僕は被災地の被災状況については前にも述べているが、それ以上に人が偽善ではなく本当に助けあっている姿が素直にうれしかった。僕ひとりの力は無に等しいけれど、少なくとも神戸市民全員が少なくともこういう気持ちになれれば、次には元の神戸以上の神戸ができると思った。僕達がやらなければならないことは、この地震を過去の歴史の一部としないで決して忘れないことだ。自然災害がいかに恐ろしいもので、実際に被害にあうと人間はいかにもろく無力なことを忘れずに自覚していくことだ。僕は死者5000人以上出たこの地震で初めてわかった人の助けあいを大切にしていき、一日一日明日に向かって神戸の復興に役立てるようにがんばりたいと思った。

地震の落とし物

松　田　雅　樹（49回生）

地震発生の日の２・３日前、中学校の友達と高取山に登った。なんで、高取山に登ったのかよくわからないけど……。そして頂上に着いて、その友達と神戸の町はきれいなぁとか大阪の町の空はうす黒いで、とか言っていた。それが今では焼け野原のようになっている。トラックや単車の排気ガスなどでくさい。雲の色も気が悪いくらいにどす黒い。

地震の日、すやすや眠っていた。その時、急に揺れて住宅が倒れるんとちゃうか、て思ったぐらいすごく揺れた。その日は僕の親父も兄貴も家におらんかったから、ごっつい恐かった。足が本気であんなにもふるえたのは、初めてだった。自然の恐怖をあれだけ感じたの

も初めてだった。それで地震がおさまって、布団にうずくまっていたら、隣りのおっちゃんが助けに来てくれた。その時おっちゃんが「松田、だいじょうぶか！」て言ってくれた時の声が今でも頭に焼きついている。その後、公園に出ていって昔の友達に会って、いろいろ話をした。その日、菅原の燃えている風景を見て、立って見ているだけしかできなかった。食パン１枚でその日の胃袋は満たされるわけがない。おなかがすいて夜は眠れなかった。次の日に役所から食糧が出されて、ホッとした。海外でうえに苦しんでいる子共達をＴＶとかでよく見ていたけど、人ごとのように見ていた。しかし僕はあの子らの気持ちを少しだけわかった気がする。

この地震で２つの印象に残った事がある。まず１つには地域の人達がよくしてくれた。飯食べ、とか果物食べ、とか言うてよく持ってきてくれたことがごっつうれしかった。そしてもう１つは家族のきずなが深まったような気がする。親父は地震の次の日に東京から帰ってくるし、兄貴は大阪からダンボールにいっぱいパンやジュースを入れてバイクで３時間ほどかけて、きてくれた。涙が出よった。

もっちゃん

宮　嶋　佐智子（49回生）

地震があった日は、ずっとテレビを見ていた。そしてそのテレビで「神戸デパートの付近が燃えてます。」とかリポーターが言った時私は、もう声も出なく涙だけが流れてきた。

ちょっと前調理実習があってその時同じクラブで仲の良い森本（もっちゃん）さんと同じ班やって一緒に買い出しに行こうとか言っていて私が「スーパーとかこの辺ないん？」と聞くと「あっ私の家の近くに神戸デパートがあるわ。」と言っていたのだ。

その時私は、ぼーっと見ていたテレビを見るのをやめてもっちゃんに電話したが「ツーツーツー」だった。何度も何度もしてみたが結果は一緒だった。それから何もする気がなくなりテレビ・電話というローテーションだった。そんな事で何も考えていなかった私の家の水が止まってしまった。水もためてないし、どうしようもなかった。給水車なんて全く来る気配もなかった。２日間ぐらい歯がみがけなかった。そんな時に家から10分ぐらいのところの公園から水が出ると聞いてそれからは、母との水くみの毎日やった。１回行って帰って来ると30分はかかった。それを毎日４、５回やった。

しかし、その時はすごくつらかったが今思うといい経験やった。水の大切さもわかったし、水を入れたバケツを自転車のカゴに入れる時重くてうまく入れれなかった時全く知らないおじさんが入れてくれて「大丈夫か？」と声までかけてくれた。そんな人の暖かさも身にしみて感じれた。

それからだんだん元気も出てきて、友達と３人で夢野の方に、おりてみようという話があって行ってみた。地図を見ながら歩いていると、もっちゃんに会えた。もっちゃんの家は、もう壊れてどうしようもないが、全員無事だったそうだ。もっちゃんに会えた時の感動は、なんとも言えない。

もうダメかと思った

水　野　佳奈子（49回生）

今まで大きな地震なんて経験したことはなかったので、これ程までに水やガスが使えない事で辛い思いをするとも思わなかった。あの地震が起こった朝、すごい揺れと聞いた事もない様な音がして飛び起きた。何か長い間信頼していた人に裏切られた気持ちだった。

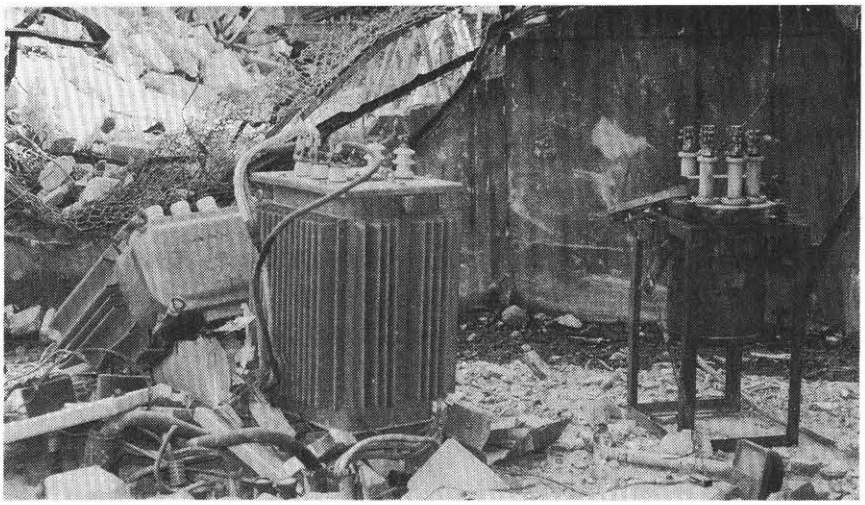
家の中は、足の踏み場の無い程ちらかって、食器は割れていた。外に出てみると、もっとすごかった。隣の家が崩れて、ガレキの山になっていた。近所のおばさんが、「中に人がいるから誰か助けて」と他の人に言っていた。私の家の道路をはさんだ向こう側の家からはもう火が出ていた。そこは病院だった。そのうち、「隣にも火が出そうやから消火器を出して。」と、マンション中の消火器を集めて持って行った、にもかかわらず火が出た。消火器なんかでは追い付かない位大きくなって、崩れた家にまでもえ移った。信じられないスピードで広がった。その崩れた家には、まだ住人が埋まっていた。消防車なんてとんでもない。全部通り過ぎていく。助けようとしたのは近所の人達だった。そして外には、「ガスが臭い」と家の中から出てきたたくさんの人が逃げ場を失くしてウロウロしていた。そのうち私の家のすぐ隣のマンションにまで火がついた。

「早く外に出ろ、死にたいんか！」と怒鳴られたけど、自分の家が焼けるなんて考えられなかった。逃げ出した私達は、どうすることもできなくてただ赤い炎をじっと見ているだけだった。

「タンクの水も、もう20分しかもちません」と言われた時は、もうダメかと思った。

火は私のすぐ隣の家で消えた。

私の家の周りにはガレキの山と、あちこちに転がった消火器があり、花束や食べ物が供えてある。小学校、中学校とずっと一緒だった友達とも、もう二度と会う事は無く、今ではガレキになった所にも、ついこの前までは、たくさんの家庭があったと思うと、悲しかった。



（食堂裏の受電盤）

いい友達に会えてよかったです

松　本　壮一郎（49回生）

僕は、地震の１週間後から２週間、大開の小学校でボランティアをした。いろんな人がいた。いろんなことを見た———。「生きててよかった。ね、生きてればなんとかなるよね。」そんなことを言うおばあちゃんは、家がつぶれていた。「私には、ここしかないねん。」小学校のすぐそばで避難せず、がれきの中で暮らしてるおばあちゃんもいた。「こんな時こそ、人のほんまの姿が出るのよね。」そう言ってたおばちゃがいた。いい人ばかりではなかった。「１人１枚やで。」と言って配ったくつ下も何度も何度もとりにくるおばちゃんもいた。そういうことが続くと、やはり人が信じられなくなり、なにも悪くない人に冷たくあたったりして自分がつらい面もあった。でも、やはりそんな人ばかりではなかった。「学校のそばの水道管から水がわき出てるさかいに、便所の水につこうたらどや。」と言ったおっさんがいた。いかつい顔、姿のおっさんが、そういう提案をし、自分から、おもたい水をはこんでいた。そして次の日、その水道管に行ってみると、そこには蛇口がついていた。「もったいないさかいに、これつけたんや、蛇口ひらいたら水出るで。」とそばで言ってるおっさんもいた。他にも、トイレ掃除を「おばちゃんやるから、兄ちゃんらはええで。」と１人でやってくれるおばちゃんや、自分は家を失ったけど、どうにか避難してる人たちをまとめようと、やさしく話しかける校長先生。とまりこみで起きてから寝るまではたらきつづける先生たち。富山から仕事を休んでかけつけてくれた人もいた。その人が帰る時、「いい仕事させてもらいました。」と言って帰っていったのがとてもうれしかった。他にも「自分は勉強ばかりで、世間を知らないから。」と言ってやってきた大学生。私立の女子校に通う高校生。小学校のボランティアのあと赤十字に行った人。失業中で教職をとるんだ、と勉強してる中、手伝っている人。ボランティアの中にもいろんな人がいた。いい人ばかりだった。

そして、自分らの中にも、新しいことがあった。そのこととは、いっつもヘラヘラと笑っている修が真剣な目で、根気強く、人に指示を出しながらはたらく姿だ。僕と修とは、長いこといっしょに野球をしてるけど、今回ほど修が輝いて見えたのは、はじめてだった。次々と入ってくる下着などの衣類を男女、サイズ、年令、種類別にすべてをわけて平等に800人に配れるようにするのは、どれだけ大変だったかと思う。今回一番頑張ったのは、修だ。あまり目立たなくて、自分からは言わないけど一番の功労者は修だと、そう思う。それから自分も被災したのに、いっしょにやってくれた林くん藤山くん清水くん、それに他の野球部のみんな、マネージャーさん、小学校の先生、遠くからかけつけてくれたみなさん、「ボランティアをしたい。」と言った時、快く賛成してくれた両親どうもありがとう。重なるけど野球部のみんなと藤山、どうもありがとう。

阪神淡路大震災

山　形　洋　一（49回生）

1月17日の朝、地震で目が覚めた。真っ暗なので何も見えず、隣りでは弟がたんすの下敷になっていた。日が昇りはじめて、家の中や近所の様子を見ると、それは別世界だった。隣とくっついていたはずの壁からは光が入り、窓は半開きのまま動かず、テレビは台から落ちていた。近所も商店街が炎につつまれ、いつも利用している本屋の二階はつぶれ父の勤め先の会社社屋も傾いていた。正に別世界である。前日の午後6時30分ごろにも一度小さなゆれがあり、父も冗談で「大きい地震があるかもな。」と言った矢先、こんなことになろうとは……。

その日、僕は近くの小学校に避難した。食料は家にあった物と頂いたもの、そして混乱していた中、配給されたパンとバナナ。この日はいつもの朝の1食分位しか食べていないと思う。腹がすかないのだ。のども全然かわかない。余震におびえながら16年と数週間生きてきた中で最も長く、恐怖におびえた1日は過ぎていった。

18日、父の兄が明石から単身バイクに乗ってやってきた。父に会うやいなや「みんな無事でよかったなぁ」と言って父と共に泣き出した。僕もその場にいあわせていたので泣いてしまった。伯父が持ってきてくれた食糧をいただいた。その日は電気がつき明かりがついたので不安がほんの少しやわらいだ。加古川から母の妹が来て僕と弟は加古川へ向かった。伯母が加古川を発って須磨近辺に着くまで10時間以上かかったそうだ。

その後、両親も加古川へ来た。そして数日後、荷物を取りに神戸に戻っていた時、相手の気持ちも考えずに軽率な行動をとってしまった。友達の一家がどこかへ行く途中、彼に手を振って「おーい」と言ってしまった。すると僕をにらみながら去って行った。その時は返事ぐらいしてもいいだろって思った。が今思えば彼にはいろいろ迷惑をかけているのにとどめをさしてしまったような気がする。何とも情けない話だ。

新潟と北海道でもその後強い地震があった。阪神大震災を体験しただけに恐怖心が思い出させられる。サハリンではひとつの町が地図上から消える位の地震があった。神戸とは状況が違い避難場所すらないらしい。ここ数年、天変地異が続発している。宗教的なことをふまえないで、人間が自然破壊をしていくことに、地球の神というかそのような存在が自然の力で人間に報復しているようだ。地球に生きる人間は悔い改めて次へと進まなければならないのが今世紀末であろう。何年か後、復興した神戸に戻りたい。そのためには僕たちががんばっていかなければならない。

奥尻、八戸の時は他人事だったけど、わが身になってテレビ等のいきすぎた報道や無神経な見物人には腹が立った。反対にボランティアの方々や救援物資を送ってくれた人や、電気、水道、ガスなどのライフラインや交通機関の復旧にあたってくれた人には心から感謝したい。ありがとうございます。

地震から

山　口　しのぶ（49回生）

私の家は長田区にあって、地震で１階がつぶれかけて全壊になりました。私はあの地震の時は眠っていて、何か息苦しくなって目が覚めました。すると真っ暗で家が揺れていましたが私はまだ地震と気付かず、何かと思いました。息苦しかったのは母が私の上に毛布をかぶせて上からかぶさっていたからでした。そして母が地震だと教えてくれて、やっとわかりました。地震がおさまった後も戸がゆがんだりして外に出られず、近所の人達に窓などを割ってもらい、とにかくそこらへんにあった毛布やトレーナーなどを持って必死の思いで外に出ました。外に出て家を見てななめに傾いているので驚きました。幸い隣家があり、壁に寄りかかっていたのでつぶれなかったのです。もし隣家がなく跡地などだったら１階はつぶれて、そこで寝ていた私と母は生き埋めになっていたかもしれません。そう思うとぞっとしてきます。

地震からだいぶん時間がたって自分も落ち着いてきたら、これからどこで暮らすのだろうと思いました。今までは自分の家があって電車が通っていてというのがあたりまえだったけど、地震後は昨日までのことがすごくなつかしく思われました。

私と弟はその日から４、５日は叔父の家にお世話になりました。叔父の家は兵庫区だったけどどうもなかったので私達を預かってもらいました。でも寝ていても地鳴りがするので車の中で寝て、朝になると家に入るという生活でした。その間には近くに井戸水が出ていると聞くと私と叔母と弟で何度も水くみに行きました。水くみは腰や手、体じゅうが痛くなったりしましたが水がないのでがまんしました。またスーパーに８時から３時間も並んで買い物をしました。でも１人５品しか売ってくれませんでした。

５日目ぐらいに祖父母の家へ行き、久しぶりにお風呂に入れてとても気持ちよかったです。北区なので水も出るしガスも使用できたのが本当にうらやましかったです。今までにこんなに水などがありがたいと思ったことはありませんでした。それからは今もずっと祖父母の家で暮らしています。だからできるだけ買い物に行ったり、洗い物をしたりとできる限りお手伝いをしようと思っています。

３月に家を解体してからはずっと祖父母の所にいます。だけど父だけは会社が長田区なので祖父母の家から通うのはちょっとしんどいので、会社の寮で暮らしています。毎週土曜日に帰ってきて日曜日には行ってしまいます。ちょっと寂しいけどしかたがありません。早く家を建て直して元のような生活に戻りたいです。

でもまだ住む家があるだけましだと思っています。親戚などが近くにいなくて避難所などに避難しなければならない人達はもっともっと不便だろうなと思うと、祖父母たちに感謝しなければならないです。

１月17日以降、余震も続いているけどあの地震は一生みんなの心に残ると思います。またいつ大きな地震がくるかわからないけど、早く神戸が以前のようににぎやかで活気あふれる町に戻るように心から祈っています。

阪神大震災で感じたこと

山　本　敦　子（49回生）

「Kさんはここに来てませんか。」

息を切らしながらやってくる。そこの避難所でボランティアとして受付けをしていた私はどうかここにいますようにと願いながら避難者名簿を急いでめくる。この人も、何日もそこらじゅう歩き回って、Kさんを必死の思いで探しているのに違いない。この避難所で何ヶ所目になるんだろう。Kさん、どこかで無事に生活してるといいのに。できればここにいて欲しい。……載っていない。Kさんの名は無かった。事実を伝えてしまうのが恐かったけれど、「すみません」と、いないことを告げる。その人のさっきまでの必死な表情は悲しい顔になってしまう。そして、頭を垂れて離れて行った。そういう人は何人も何人も訪ねて来た。つらかった。

私の住んでいる所は、被害が断然少なかった。同じ神戸にいながら、いつもどおりくらしているのがものすごく悪く感じた。食事するのさえ悪い気がした。ところが、海側の神戸はめちゃくちゃだった。崩れかけの建物も全て壊して、瓦礫を取り除けば、後は空地だらけになってしまうように思えた。それだけの何10万もの人が避難している。テレビを見て、ラジオを聴いて、避難所の生活が大変なことを知った。かわいそうとか言ってる場合ではない。市に訴えてもしょうがない。私が家で見ているだけなのはおかしい。そう思えてしょうがなかった。そんな時、母がボランティアを募っている所を見付けてくれた。避難所の物資の仕分けの手伝いや受付をするボランティアだった。

その避難所では、震災後１週間たっても、報道されているほど物足りた雰囲気はなかった。最初に驚かされたのは下着不足。全て救援物資に頼るしかないのに、１週間も下着を変えることができないでいたことを知った。私達は届いている下着の箱全てをいくつもいくつも開けて、公平に分けていった。10人くらいで半日かけてやっと分けられた。それはもう、ものすごい量。箱をいくつ空けたかはわからない。各部屋にひとつずつ、１人では持ち切れない程に下着をつめた袋を作った。私達は膨大な量と作業の姿勢と時間とでへとへとになった。ところが1000人以上いるその避難所では、それでも全然足りなかった。下着の何かが１枚か２枚もらえるくらい。そしてまた新しい下着は当分来ない。水道ももちろん通っていなく洗うこともできない。洋服だって毛布だって全然足りず、どれもいくらかはあっても、1000人にはまかないきれなかった。それがそこらじゅうの避難所で起きているのだから考えきれない。毎日の生活にさえものすごく苦心し、共同生活する中、たくさん一度に失ってしまった中、将来を考えるのは怖いと思う。それでも倍率の高すぎる申し込みが次々と始まって、嫌でも考えなければならないなんて。

心に焼きついて忘れられないことがある。届いていた救援物資の箱に、大きく「神戸のみなさんがんばれ!!」と紙がはってあって、手書きの励ましの手紙も入っていた。それを見て、涙をおさえきれなかった。うれしかった。あたたかかった。ずっと遠くの県からもこうやって声援が届いていることに感動した。

今、いろんな所で募金活動やボランティアしてる人達がいたり、チャリティーコンサートが開かれたり、とてもあたたかい。いろんな人がいろんな所で何かやっている。自然に助け合っている。素敵だと思う。人間らしいなと思う。見たり聞いたりするだけであたた

かくなるし、自分も何か手伝えたらもっとうれしい。私も少しだったけど、手伝うことができて、少しでも役に立てたのならうれしい。でもそれで終わって、後は知らん顔というのがとても心残り。

今、神戸が人と人と人とでつながって、ひとつになって頑張っているように思う。こういうのってすごくきれいだと思う。力を合わせて、みんなで励まし合って、早くみんなに幸せになってもらいたい。元通りとまでは言わないから、笑顔で、落ち着いて、毎日が暮らせるようになってもらいたい。

私は自分勝手な人間だった

横　山　ゆ　き（49回生）

私は自分勝手な人間だった。あの日、私はラジオを聞いてこの地震の起こした破壊のありさまをなんとなく知った。テレビを見て絶句した。知り合いへの電話を父親に止められ、ただ、ただテレビの番をするしかなかった。私も事実、学校に行くつもりだった。

前日の夜、３学期最初のグラマーの授業のために予習をし、問題集も終え、やる気満々で寝た。神戸電鉄不通を知った時、せっかくグラマーの予習をしたのに、はりきって損した。水曜日は持久走があるからもう１日休校にならないかな、などと思っていた。いくら南がどうなっているか十分にわかっていなかったからといって、なんとも勝手な感想を述べたな、と思う。

市街地の様子を知り、いてもたってもいられなくなった。長田、兵庫に住んでいる人たちの安否も気になった。祖父に、心配もしとらんのにテレビばかり見るな、と言われた。複雑な気持ちと落着かない怒りとでごちゃごちゃになり、言われたまま部屋に入った。口に出すだけが心配なのだろうか。形にしてこそ心配なのだろうか。祖父とはあわなかった。

１月26日、学校に行った。21日に、安否確認が出来ていない人、その他思いつく人に電話をかけた。それだけでは満足出来ず、学校に行った。手伝いが目的ではなく、単なる確認のためだけに学校に行った。そのまま帰った。

全て、今考え直せば、避難している人、学校の周辺にいる人になんの気配りもしなかった。倒壊して建て物の影響で半分通行不可能な道路を通り、アスファルトを掘り起こしていた工事現場の間を抜けて学校まで行った。報道された無神経で迷惑な人。それは私自身だ。

２月３日、再び学校に行き、音楽室を片付けた。夜、熱を出した。綿のマクラで寝たためだろうか。６日まで熱は下がらなかった。あの日の無神経で迷惑な私への罰だった。

あの日を忘れない
～ボランティア活動を通して～

浅　井　謙　一（50回生）

だんだんと日が経つに連れてあの惨事が忘れさられていく、しかし被害に遭い、多くの友達や親戚の人などを亡くした人達はあの惨事を忘れることはないだろう。ぼくも絶対忘れたくない。

ボランティアに一度行った。行く途中、いろいろな光景を目にした。哀れ無惨だった。ある所では焼け野原、またある所では家の倒壊、見る物全てがあの美しい街、神戸とはほど遠かった。目にした者しか分からない、地震の恐ろしさ。ぼくは残念だった。あの大好きな街がこんな荒れ果てた広野になっていたなんて。

そしてボランティアをする場所に着いた。被災者の人達も顔が沈んでいた。全てを失ったんだろう。胸が痛む。

ぼくの仕事は豚汁をよそって渡す仕事だ。みんなおいしそうに食べていた。少しでも明るい顔が見れたらぼくはそれで嬉しい。心をこめて渡してあげた。「元気を出して。」うまく口では言えなかったけれどぼくはそう心から思った。今言えることだが、ボランティアというのは人と人とが触れ合える大切な場を作るものなのだ。活動することで神戸の人々の心がつながっていく。そんな気がするのだ。

帰り、ぼくらが後片付けを始めたら、２人の人がやって来て一緒に手伝ってくれた。最後に「ありがとう。」と言ってくれた。嬉しかった。「あなた達は被害にあまり遭っていないからいいけど私達は被害をうけているんだ、なにくそ！」などと思っていない。心から嬉んでくれた。ぼくは本当にボランティアをしてよかったと思う。

あれからかなり日が経つ。まだまだ復興していない。早くして欲しい。被災者の人達の声が聞こえる。近日、ぼくは壊れた家の前に花と水が供えてあるのを見た。どんな気持ちで供えているのだろう。やっぱり悲しくてつらい気持ちだったとぼくは思う。心の奥底ではまだあの日のことが忘れられないでいるのだ。被災者でないぼくは同じ神戸市民として、その気持ちが十分に分かる。死者5000人以上を出した阪神大震災、忘れるわけないだろう。そしてぼくもあの日のことを絶対に忘れたくない。

忘れてはならないこと

足　立　敦　子（50回生）

驚いて飛び起きると、父がもう私の部屋に入ってきていて、向こうの部屋から母が「早くこっちにおいで!!」と叫んでいるのが聞こえた。豆電球をつけていたはずが、辺りは真っ暗で、足元の散乱物に気をつけながら父にくっついたまま、母のいる部屋へ行った。冬の早朝６時前。まだ寒くて、ふとんにくるまって母と抱き合っていた。周りは人形ケースの割れたガラスが散らばっていて、ひどい状況だった。

ようやく、余震も落ちつき、明るくなり出したところ、改めて家の中を見て信じられない思いがした。幸い、私の家族には傷ひとつ負った人はいなかったが、あの瞬間に本当に

たくさんの人の命が奪われたことが、後になってわかった。

親せきの人達が何日も泊まったり、父が水を車であちこちに運び回ったり、私の目の前で、想像もしなかった出来事が次から次へとどんどんくり広げられた。一度にたくさんの初体験をした。自然の恐さを心底思い知った気がした。なのにそれが最近になってすっかり、希薄になってきたように思う。あれだけ恐い思いをしたのに、いざ、自分の生活が戻ってくると、あっさりとそれを忘れてしまっている。1月17日からもう5か月が過ぎたが、今でも、不自由な生活を強いられている人がたくさんいることを決して忘れてはいけない。そして、あの日のこともしっかりと心に刻みつけておかなければならないと思う。

過ぎた出来事は日々疎くなる。けれど、多くの被災者が残っている限り、みんなが幸せな生活に戻らない限り、まだ終わってはいないということを忘れずにいたい。

震災後の私

石　丸　奈都子（50回生）

今回の阪神大震災で多くの人が亡くなり、また多くの人がケガをして改めて地震の恐ろしさを実感しました。私は地震というのはごくたまに小さな揺れがある程度であまり地震が恐いなんて思っていませんでした。でも今回の地震は私の考えをはるかに越え、恐ろしいものでした。地震の直後私は家の中の飛びちったガラスの破片を見て死の恐怖を目のあたりに受けました。まだ15才の私にとって生死なんてものは本気で考えませんでした。それに2ヶ月後には大事な入試があったせいで私の頭の中は勉強、入試、それくらいのことしかありませんでした。まして自分以外の人の事など考えることもしませんでした。

でもその瞬間から私の考え方は一転して180度変わったといってもいいほど変わりました。どこがと言われてもはっきり説明することはまだ無理だけど、なんとなくただ毎日を過ごすのではなく自分でいろいろ考え行動し、一日一日を大切に充実した時を過ごせるように生活していくことが一番大切だということです。今まではいつもとかわらない朝が必ずきて学校へ行き授業をうける。そして帰る家がある。それがあたりまえの生活としてばく然と時が流れていました。今考えると、その時自分が何も考えずただ過ごしてきた時間がとてももったいなく思われます。

今回の地震のように、いつ今の幸せな生活が崩れてしまうかわかりません。だから、私は今この時を精一杯生きていこうと思っています。

「平凡」の大切さ

上　原　世津子（50回生）

1995年１月17日、「阪神・淡路大震災。」この日付けと名前を、私は一生忘れる事ができないだろう。私の今までの15年間の中で最も怖かったものの１つで、あの瞬間私は初めて真剣に自分の死について考えた。

「死ぬという事は、ただ体と心が別々になるだけのことだ。」と考えていた自分はどこにもいなくて、ただ「死ぬ事が怖い。」とおびえている自分が布団の中にもぐっていた。この時家族全員が無事であるかどうかが気になりつつも、何もできず、まだ頭の中が『地震が起こっている』この事を十分に理解できていなかった。

強い揺れがおさまった時、まだ太陽の光もなく、すべてが変わり果てているなど考えもせず、「私は生きているの？」と真っ暗い部屋の中で考え、私に体があるかどうかさわってみた。「私は生きている！」この時命の大切さを実感した。そして父の声がどんなに心強かったことか……。両親の部屋の一番近くにある私の部屋に、すぐに駆け込んできてくれて、

「大丈夫か？どこも打ってないな？」と言って暗い部屋から連れ出してくれた。家はまだ揺れていて怖いはずなのに、家族の人と一緒にいると、なぜか揺れはじめていた頃よりずっと安心していた。父は私を連れ出してくれた後、ぱっとすぐ姉と妹それぞれの部屋に安全を確認に行った。

４時間程してやっと電気が通り、死者と倒壊した家の多さ、火災などの被害の大きさをテレビで知った。「この映像はどこ？」と思わせられる程ひどいものだった。しかし、それは夢でも何でもない、神戸のありのままの姿だった。私の家の近くでは雪が降っていて、神戸の街が崩れているのが嘘のようだった。

私には六甲に住んでいた私のおじいさんの妹夫婦であるおじいさんとおばあさんがいた。私の親戚は家の遠い人が多く、その中で唯一身近で、私をかわいがってくれていたのだ。そのおじいさんとおばあさんの家がたった20秒間で倒れてしまい、その時は助かったものの、おじいさんはその後に亡くなってしまった。

今、震災前とほとんど変わっていない我が家にいると、昔のようにもどれる気がするが、もう、おじいさんとおばあさんの家に行く事もできず、おじいさんと話をする事もできない。平凡な生活というのは、手に入れやすそうで、実はすごく手に入れにくい大切なものだと初めて気付いた。

母

大　谷　慎　一（50回生）

地震当日、空は赤かった。

1995年１月17日、兵庫県南部地震により神戸の街は瞬く間に死の炎に包まれた。長田区や中央区から起こった火災で舞い上がった煙や塵は空を覆い、光を遮り、青くなるはずだった空を不気味な紅色に染めた。

兵庫区内の自宅は1階部分が押し潰され、母と姉が2階部分の下敷きになった。2階にいた僕は窓から跳び降り、交番へ走った。そこに警察官の姿はなかった。交通整理をしていた警察官に目をとめて、無線で救急車を呼ぶ事を伝えて再び家へ戻った。家の前に立つと無数の「助けて」との声が聞こえた。その声の一つが姉のものであることがその時初めて分かった。レスキュー隊が到着したのはそれから2時間程たった後だった。それから間もなく姉は助け出されたが動揺と恐怖から顔は青ざめ、表情が全くなかった。それから何時間たっても母の声は聞こえてくることはなかった。今思うと母の最後の言葉は前日の晩に風邪気味だった僕に対して発した「病院行きよ」という一言だった。母の言葉はいつも優しさに溢れていた。そして、その最後の言葉も最高の優しさを僕に与えてくれた。

東京に単身赴任していた父が帰ってきたのは地震の翌日だった。倒壊した自宅と母の変わり果てた姿を見て父は一言だけ「悔しいな」と漏らして歪んだ雨戸をたたいた。自分の建てた家で最愛の人を死なせてしまった自分を情けなく感じたのだろう。父が泣いた姿を見たのは、後にも先にも初めてだった。

僕自身の事について言わせてもらえば、母の事で最後に涙を流したのは地震から1週間もたっていなかった葬儀の時だった。1週間後には学校も再開され普段通りとは言えないまでも、学生としての大谷慎一の生活が始まった。進学を直前に控えた大切な時期に泣いてばかりはいられないというのが本音だった。悲しみを表に出そうとしない僕に違和感を抱いた人は少なくないはずだ。実際に数人の友人や先生から「悲しくないんか。なんでそんなに普通なんや。」みたいな事を問われた。悲しくないワケない。でも、悲しみを表に出す事によって得られるものは哀れみ以外の何でもない。その時の僕には哀れみなどというものは必要なかった。

高校進学と同時に母の事は完全に伏せてしまおうと思っていた。実際に母に関しての事実を知る人は僕自身の事を知る人の中でも一握りの人だと思う（この文を読むまでは）。しかし、僕が文集のために原稿を提供したのは哀れみを得ることが目的ではない。地震の恐怖や当事者の心境を後世に残すために、どんな形でもいいから少しでも力になればと思い協力したのだという事を理解しておいてもらいたい。

今思うのは、大切な人や愛する人を死なせたくない。自分の手で守りたいという事だ。母という人間を守れなかった分その思いは強く僕の中に根付いている。

母は、今の僕にとっては「母親」という存在だ。でも、10年たって結婚して僕自身が親になった時に「親」の先輩として母を見ることが出来ると思う。「子を持って知る親の恩」というやつだ。そして、母と同じ年（46才）になった時には一人の女性として母を見る事が出来ると思う。その時に初めて父の母に対する思いや、母の女性としての魅力が見えてくるのだと思う。

最後に、震災後に僕の精神的な支えとなってくれた友人をはじめとする方々に感謝したい。そして、今まで僕を一生懸命育ててくれた母に追悼の意を表したいと思う。

震災より学んだこと

川　口　広　未（50回生）

17日の早朝、私も震源に少し外れた北区で激しい揺れによって目を覚ました。地震なんかテレビの向こう側の世界だという意識で育ってきた私にとって、初の地震体験だった。そして、恐怖で震えあがったのも初めてだった。

そんな恐ろしい体験とはうらはらに、北区に普段の生活が戻ってくるのは早かった。1週間後にはほぼ元通りで、余震に体を緊張させながらも学校に通えるようになった。しかし、テレビの中ではそうはいかなかった。そこには考えられない次元の話、例えば身内や友達が亡くなった、そんな話があった。震災から1週間というもの、私はそんなテレビをひたすらぼんやりと眺めていた。受験もなにもそんな気分ではなかった。けれど、もっともっと辛いことがあった人たちの様子がしだいに明確になるにつれて、自分が情けなくなっていた。ボランティアができるわけでなく、勉強をするでもなく、自分が一番中途半端だったことに気がついたからだ。

中学校の先生の中にも、長田の方に住んでいる人がいた。何度が行われた集会の中で、実感のこもった震災体験の話を聞いた。その話の最後に、「君らは勉強できる状況にあって幸せだ。」とどの先生も口にした。私もそのときにその言葉の意味がよく伝わってきた。自分のできることを、一生懸命やろうと思った。

それからあっという間に受験を迎えた。受験の日、夢野台高校のグランドにあるテントを見た。入学してから、今も体育館にはフトンがしきつめられ、グランドにはテントがある。色濃く残る震災の爪跡が長田区の町の、どこにでも転っていた。そして今も普通の生活は、ここにはない。

これらの体験が私に伝えたこと、地震の怖さ、助け合いのすばらしさ、勉強ができる喜び。なにより普通の生活ができるありがたさを強く感じられたような気がする。

避難所生活を通して

川　﨑　真　吾（50回生）

僕は夢の中で自分が何かにぐるぐる回されるような感じがしたので、はっと目を覚ました。が、タンスの上にあった物にうもれて、しばらくは動けなかった。

それから何分もしないうちに、すさまじい爆音と振動が伝わった。すぐ下の階でガス爆発が起こったらしい。

なんとか自分の上に乗っていた物をどけて、まだ薄暗く、寒い部屋の中を見回した。今まで立っていた物がすべて倒れていて、床一面にガラスの破片が飛び散っていた。約10分後に2度目の爆発が起こり、それと同時に家から逃げ出た。

とりあえず、近くの小学校に避難することになったのだが、すでに多くの人達が避難していた。半分ぐらいの人達は、パニック状態で、先生方も人数確認に四苦八苦されていた。

最初の夜、ひとつの教室に100人ぐらいの人から寝ることになったが、寒い廊下で寝る人も少なくなかった。

2日目、まともな食べ物がなくて、おなかがすいた状態が続いた。いっこうに人は減らず、むしろ増えていった。

3日目、4日目もそんな日が続いた。

5日目、運よく友達の家では水が出るので、晩ごはんを作ってあげると僕の兄弟と友達ひとりをさそってくれた。僕達は喜んでごちそうになり、そこで友情の大切さと何よりも食べ物があることのありがたさを痛感した。

6日目、ようやく余震の数も減ってきたので家の様子を見に行った。以前は暗くてあまり見えなかったが、あらためて見ると、ただただすさまじいとしか言いようのない光景だった。とりあえず毛布や服を出せるだけ出し、避難所に戻った。

地震から1週間たった日、ひと組の老夫婦がやってきた。だが、おじいさんの方が、ひどく自分勝手だった。

夜中、少しの足音もよく響くような静けさの中を、突然大声でしゃべり出したり、早朝、まだみんなが寝ているのもおかまいなしに電気カミソリでひげそりを始めた。おばあさんは止めようとあれこれ小声で注意しても、少々ボケているらしく、あやふやに答えるばかりだった。

10日目、中学校で集会があった。幸いにもみんな無事だったが、家が燃えてしまった友達は多かった。

11日目、さらにおばあさんがひとり避難してきた。それがまたさっき出たおじいさんよりももっとわけがわからない人だった。僕達の隣りに荷物を置き、そのままどこかに行ってしまった。さっきのおじいさんは、周りの人達の注意によっていくらかは静かになっていた。夜中、ひょっこり帰ってきて何やらしていたが、僕達がトランプをしているのを見て、いきなり「私にかしてみなさい。」とか言って弟のトランプを取ってまじってきた。一応は普通にふるまっておいたが、それだけでは終わらなかった。

12日目、僕達家族は、いとこの家族と一緒に避難していたため、人数が多かった。そのおばあさんは、そこに目をつけたのか、「この荷物を見張っておいてね。」とひとこと言って、さっさとどこかに行ってしまった。僕らも家の中のかたずけや勉強などで忙しいというのに、あまりにも無責任だと不快に思った。

さらにその夜、そのおばあさんは帰ってきたが、礼の一言も言わずに、寝る用意をしだした。そもそも今寝ている所は以前避難していた人が、あとで来る人のためにとわざわざ残してくれた場所で、1人で寝るには十分すぎるほどのスペースがあったのに、さらに自分が使う場所を広げようとしていた。さすがに注意しておいたが、無意味だった。

1日たった14日目、そのおばあさんは、身の回りのものすべてを人まかせにした。自分の荷物はもちろん、自分がもらいに行くはずの救援物資を僕らに言いつけてさっさとどこかに行ってしまった。

その他にもいろいろと自分勝手なことをし放題だったので、周りの人みんなにあいそをつかされた。もちろんほとんどが僕らにたのまれていたのでよけいに不快感がたまっていった。

そして17日目、ついに僕達家族といとこの家族は家に戻ることができた。

しかしその後1週間と少しの間、同じ教室に避難していた人達に、ささやかながら、温かい紅茶とおかしをとどけてあげた。

もちろんまだ水とガスは出ていなくて、毎日の食事や洗濯もいつもの倍以上の時間がかかったけど、僕達と一緒に避難していた人達に、何かできることはないかと考えてのことだった。

やはり『困った時はお互い様』という言葉のとおり人は互いに助け合って生きていくものである。そして今、食べる物があって水があって電気やガスがあることが当たり前なのではなく、それがいかに大切で貴重なものであるかをあらためて痛感させられた17日間だった。

ちなみに今、僕の家族は、なんとか以前の生活ができつつある。それもこれもみんな周りの人達のおかげである。

僕は今、本当に幸せだ。

震災を通して学んだこと

河　南　理　絵（50回生）

1月17日、この日は忘れたくても一生忘れられない日になるだろう……。

震災から5ヶ月たった今、あの時の激しい揺れを思い出すことは少なくなったけれど、震災直後は、余震にも敏感になり、毎日おびえて過ごしていました。震災から2週間ほどたったころ、長田から三ノ宮にかけての場所を見に行きましたが、やっぱりテレビで見た光景と自分の目で見た光景は全然違いました。まだ生々しさが残っていて、改めて震災の恐ろしさがこみ上げてきました。もう悲しみを通りこして、ただ呆然としていました。

すぐ目前に受験をひかえていた時期でしたが、勉強する気にもなれず、毎日テレビばかり見ていました。けれども、避難生活の中で受験勉強をしている人の話しを聞いた時、自分がとても恥ずかしくなりました。被害も少なく、ちゃんと学校にも行っている私たちが頑張らないと被災者の人たちに申し訳ないと思いました。ボランティア活動にも、今すぐにでも参加したかったのですが、受験が終わるまで我慢しました。そして、受験後参加したボランティア活動では、人間の素晴らしい生命力を学んだような気がしました。避難生活をしている人は、とても強く震災なんかに少しも負けてはいませんでした。私は被災者のお世話をするために行ったのに、反対に被災者の方々から色々なことを教えてもらった気がします。

本当に突然起こった悪夢のような出来事。自然災害には逆らえないけれど、この震災を通して、何か自分の中で大きく変わったものがあると思います。今は、それが何かはっきりとは分かりませんが、きっとこれからの生活の中で役立っていくだろうと思います。

地震のあとで…

川　本　さやか（50回生）

１月17日、私はすごい音とともに、自分がこわれるんではないかというぐらいの揺れが始まったとたん、目が覚めました。すごく怖かったです。冷や汗をかいていました。その後も何度か余震があり、その度に心臓がドキドキしました。

テレビで見ていると、長田の方は、もっとひどかったんだと思いました。ほとんどといっていいほどの家がくずれて、焼けていました。人が泣いていました。わたしには、ほんとのところをいって、かわいそうとしかいえませんでした。行動力もなく、ましてや自分で働いて、稼いでいるのではない、ただの中学３年の私には、被災地の人たちに、少ない募金をするしかできませんでした。それに、心のどこかで、わたしの家や家族はだいじょうぶでよかった、と自分中心にしか思ってなかったのかもしれません。

けれど、地震で私の住んでいる西区にも、それ相応の被害はありました。電気やガスはすぐに使えるようになったけど、“水”です。水がなかなか出ませんでした。トイレは、わざわざ、水をくみにいって流さないといけないし、お風呂にも入れませんでした。飲み水も、近所の家の井戸水をもらってきて、どうにかしていました。けれど、そんなことは、よく考えれば、被災にあわれた人には、まだましなのでしょう。やっぱりぜいたくだなと思います。

受験勉強は、おろそかになりがちでした。午前中授業であせってもいました。すごく不安でした。もともと集中力がないうえに、もっと気が散って、ほんとに今思えば、よく合格できたと思います。

今、私の生活は、落ちついています。通学の時に、撤去作業をたまに見かけます。それを見て、あぁ地震のことなんて忘れかけていたなと思います。でも、これは忘れてはいけないし、心のすみっこにきっと残っていると思います。

この地震で私は、自分の情けなさをよく思い知らされました。１人の人間としての小ささを。だからもっと、人間として大きくなりたい。そう強く思いました。

心の支えだったもの

久　保　多喜子（50回生）

あの時から４ヶ月、思い起こせば、色々なことがあったな、と思います。私の家は兵庫区の湊川駅の近くにあります。半壊という判定を受けながらも、家の中の生活はほとんど震災前と同じに戻りました。

あの揺れの後、外が明るくなってから外に出て、周りを見回すと、すでに裏の木造住宅から火があがっていました。けれども、その時は、まさかあんなに沢山の死者が出て、火事が沢山起こって――なんて全く思いつきませんでした。

この震災で一番強く感じたのが、友達・知人・身内をはじめとする励ましてくれた人達の優しさです。特に、あんなに沢山死者が出たのに、私の友達・知人・身内が誰ひとりケガもなく、無事でいてくれたということがうれしかったです。実際、地震の被害を耳にした時は、「自分は本当に今生きているのか」と疑ったりしたこともありました。

私は地震の３日後の夕方から、三木市にある母の実家に避難しました。家が無事だったから自分の家にいたかったけれど、父が安心して市役所の仕事に打ち込むことが出来ないと分かり、三木に行きました。その決心がついたのも、心配していた友達の無事が確認出来て安心したからです。そして、その友達が被害がいく分かましな垂水に行ってがんばる。と言ってくれたから、私も三木に行って受験勉強をがんばろう、と思いました。２月いっぱいを私は三木市で三木市の中学に通いました。三木にいた時も、心の支えになってくれたのは神戸の友達との会話でした。大阪に引越した友達が大阪の高校に合格したと電話があって、私も絶対合格出来るようにがんばろう、と思ったし、沖縄の友達も、電話番号をわざと知らせないようにしていたのに、「１０４」の案内で調べて、避難先の三木にまで電話をして心配してくれたことも、私はとてもうれしかったです。普段何気なく接していた友達が、こんなに心の支えになっていたとは全然気付きませんでした。本当にみんな無事で良かったです。

複雑な思い

小　貫　芳　美（50回生）

あの時の地震が４ヶ月たった今でも神戸の街に大きな影響を与えている。私にとっても忘れられない、忘れてはならないことだと思っている。いったいどのくらい時がたてば、新しい神戸に生まれ変わるのだろうか…。

受験生の私にとって、中学生活最後の３学期が始まって、勉強もし、思い出もつくり…と毎日がとても忙しかった。あの日は、中学校最後の思い出として、先生方が計画して下さった球技大会が行われる予定だった。とても残念だったけれど中止。学校も１週間ほど休みだったけれど、その間ろくに勉強なんかできなかった。知り合いの人などからの電話が何回もかかってきて、心配してかけてくれたのがとてもうれしかった。テレビでは街の様子が報道され、外ではヘリコプター、救急車の音がひっきりなしに聞こえてくるのでなんだか余計に怖くなって、何もする気がおこらなかった。父の会社の側が焼けているのを

テレビで知り、父は「あかんかもしれへん。」と何度も言った。その言葉がぐっときたがあまり言葉に出さないようにした。どうか焼けないでほしいと願った。とにかく、書ききれないほどの心にしみたことがあった。幸い住んでいるところは北区だったのでよかったものの、親しみのある神戸から明りが消えたのを見、家や家族を失った人を見ると涙がでそうになった。でも、今街に出ると逆に励まされる。人間っていうのは、強いもんだなぁと思う。5000人以上の人々が命を失ったけれど、その人達のためにもやっぱりもとの神戸に戻らなければならない。これからの神戸をつくっていくのは、私達の世代だと思う。人間として未熟ながらも体験した阪神大震災に精神的にとても大きなものを与えられたような気がする。人々の輪があり、協力し合い、励まし合って「生きていく」ことを互いに感じることは、つい最近まで人間が忘れかけていたことなのかもしれないと思う。

1月17日、ひとりひとりが複雑な思いで朝をむかえた。神戸は一瞬とても暗い街となった。けれど何年か後、きっとすばらしい街になっていることだろう！

地　　震

園　　貴世子（50回生）

あの日以来、眠れない日々が続く
赤く光るあの日の空が忘れられない
暗闇に響くラジオの声
不安そうなみんなの目

あの日から4ヶ月余りが過ぎた
すっかり変わってしまった風景に思わず足を止め
込み上げてくる切ない思いに歯をくいしばる
いつかは景色も元どうりになるだろう
でも、あの日の事は一生忘れられない
忘れてはいけない

あの日弟と神戸の町を歩いた
「これって夢やんなあ？」
とつぶやいた弟の横顔が忘れられない
私は、つないでいた手を強くにぎってやることしかできなかった

この震災の中で一番うれしかった事
久しぶりに学校で会った友達と
「あんた、生きとったん？」
と言いながら笑いあえた事

頑張って

鍋島　浩（50回生）

まだ6時になっていなかった。揺れと同時に目が覚めた。怖くて外に出たが、外もものすごい有り様だった。何とか裏口から出て助かったが、数分後、近くで火事が起きた。次に自分の家を見た時は、すでに真っ平らな平野のようになっていた。僕は悔しかった。つぶれなかったのに焼けてしまった。焼けてしまうのだったら先につぶれておいてくれてもよかった、と思うほどだ。心の底から「もうこんなことが起きてはいけない」と思った。自然には逆らえない、そのことがすごく悔しかった。

大地震から4ヵ月余りたった今、僕は姫路から神戸の高校に通学している。そのため姫路の便利さと神戸にいる時の不便さを両方感じとることができる。確かに今、神戸の街には何もない。でも少しずつ復興していることもしっかりと分かる。小さなプレハブしかなくてもそこで店を開く。限られたものしかなくても、それだけでも必死に頑張ろうとしている。そんな人たちに僕は応援したいです。「頑張って下さい」と…。

私の震災体験

西村　悟（50回生）

僕がここ数ヶ月の経験を全て書くと、1冊の本になってしまうかもしれないくらいだ。だから、2、3の経験談を書きたいと思う。

まず、いちばん初めに心に残っているのは、朝地震の後外へ出てみると、周りは全て赤い空だった。僕の家から見て、北・西・東の方角全てに火事が発生していて黒煙が立ちのぼっていた。北は、上沢周辺、西は菅原市場、東は近くの市場の店舗からだった。至る所からのサイレンの音はなんの役にもたたず、火を消すどころか火のまわりをおさえることもできていなかったのがやけに腹がたった。

次に、避難生活だ。初めは家がたっていたので家にいようといっていたのだが、家のこわれ具合がわからなく、度々の本震を思わせる余震で、あわてて家をとびだして、兵庫駅に車で避難することになった。車の中は夜とても冷えて、2、3枚の毛布では全然役にたたず体の底からのふるえが止まらなかった。その寒さと、止むことのないサイレンの音や唯一の情報源であったポケットラジオの安否の確認の情報などで、その夜は一睡もできなかった。

最後に受験勉強について書きたい。地震から1週間は周りの仕事や電気がきていなかったので全くできなかった。その後も勉強しようと思ってひとりになると、だんだん心細くなってきて全然集中できなかった。

結局、家は半壊のり災証明をもらった。この地震で僕が経験したことは他の人の何倍もの経験をしたと思う。またこれを生かして今後もがんばっていきたい。

あたりまえの生活のありがたさ

橋　本　幸　奈（50回生）

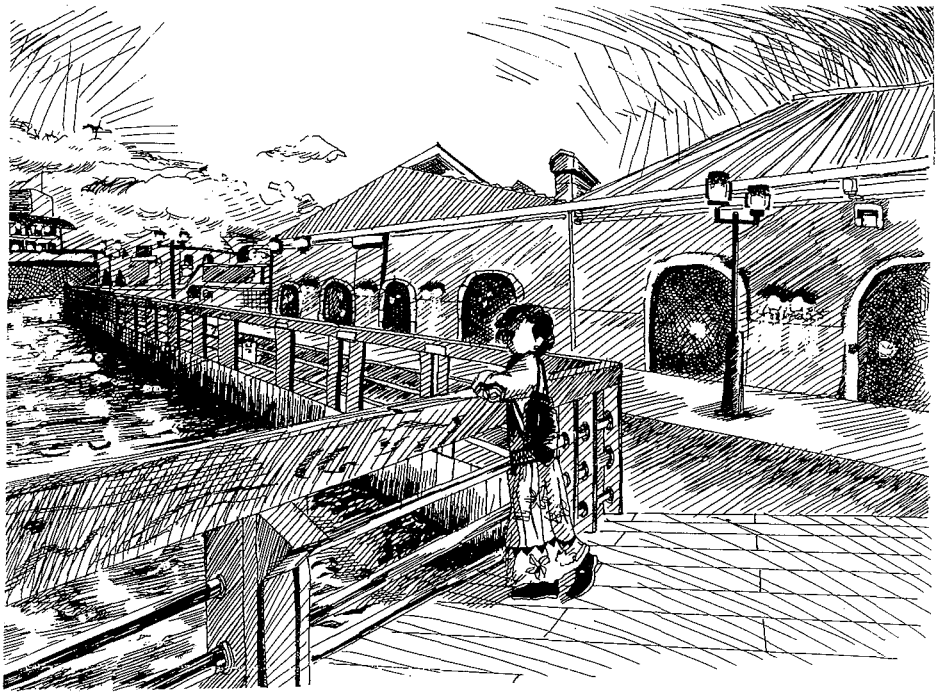
私の家はこの地震で半壊となりました。幸運にも住める状態で残ったので、今は地震前と変わらない生活ができています。

１月17日当時、電気は使えたものの水道・ガスは止まったままで、我が町長田が燃えさかる様子をテレビで見ながらの不安な夜が続きました。親せきや友人などの安否を気づかいながらも、連絡をとる方法もなく、ただ家の中でじっとしていることしかできませんでした。

はじめのうちは余震におびえるばかりでしたが、日ごとに気になりだすのはやっぱりお風呂のことや洗たくのことでした。不潔にしていれば、だんだんいら立ったり落ちつかなくなって、受験生だった私は、なかなか勉強にも集中できなくて逆に「これではダメだ。」とあせってしまい、だんだん精神的にもよくない方へと進んでしまっていたと思います。

そんなとき、心に思ったことは「いつもの生活を返してほしい。」ということでした。こんなときでないと私は気付くことができなかった。水道・ガス・電気どれがかけてもこんなに不便な毎日を送らないといけないということを……。普段の生活がどんなに幸せなものかを……。

たくさんの命がうばわれ、たくさんの建物が破壊され、こんなことはもう２度とおこってほしくはないけど、平凡な暮らしをしていれば、絶対に気付かないでいたことを実感できたと思う。



地震直後の体験

林　　英　二（50回生）

僕はあの大地震の瞬間は、まだ寝ていました。そして、大きなゆれとともに、タンスが足の上に落ちてきて家の壁もくずれ、一時生きうめになりました。

タンスの下からぬけ出して玄関の方へ行こうと思い、上を見上げるとあるはずの２階がなく空が見えました。僕は助けを呼びに台所の屋根があった所から外へ出て、家の裏の会社を走りぬけて表へ出ました。走っている間も何回もゆれました。表へ出て隣に住んでいた人に助けを求めました。その時、はじめて僕の祖母が家の下じきになっていると知り、道路を走ってきた車を呼び止めて車のヘッドライトで明かりを灯してもらいました。僕の家は路地の一番奥だったので、ヘッドライトではあまりにも暗すぎました。あれほど早く朝になってくれと思ったことはありませんでした。周りはガスもれのため、すごくガスくさく500mほど先のビルが火事で燃えていました。

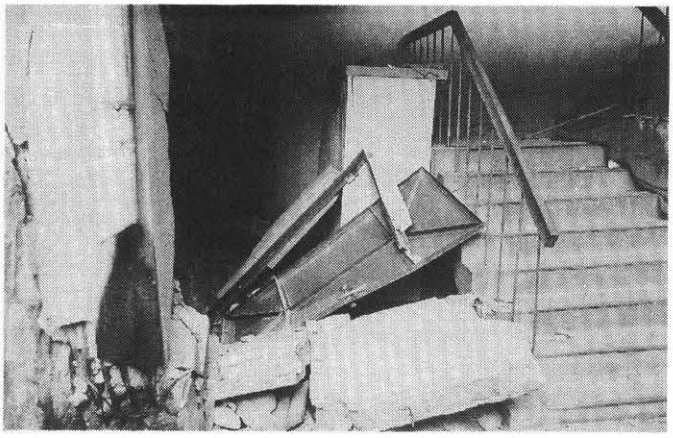
７時を越したぐらいに僕はうまっていた祖母を助けてもらうために兵庫県警へ行きました。行く途中や県警についた時の光景は今でも忘れられません。なんと県警は、１階がつぶれて２階が１階になっていました。夜勤の人もかなり１階にいただろうと思いました。自衛隊の人２人に来てもらい、家の中は二次災害の恐れがあると言われてもその時祖母は出ませんでした。

僕の母は自分の母をなくした思いで泣きわめき、今にも自殺しそうな感じがしました。しかし祖母は８時30分頃に町内会の人によって病院に運ばれたそうです。その時祖母は息をしていなかったそうです。僕はその時は自分の家のつぶれた様子など見たくなかったし、友達も心配だったので一人で自転車で走っていました。そして、この地震のすごさを知ったのです。

この後長い間公園で寝泊まりして、約４か月避難所での生活をしました。この生活も良いものではありませんでした。

僕の出身中学校の卒業式は学校ではできませんでした。

この地震でサバイバル精神や精神的にはとても強くなりましたが、こんな体験２度としたくないです。



（体育館入口）

今思う事、願う事

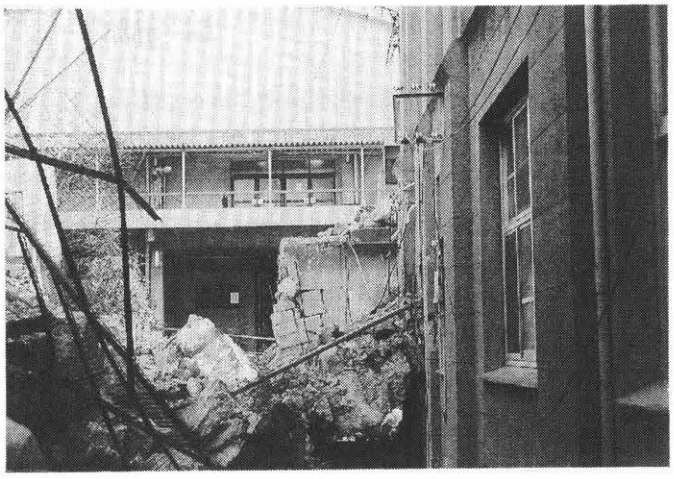
廣　澤　香　織（50回生）

わたしが小学生のときに大好きだった校長先生が、この大地震で亡くなりました。何年も会っていなかったので、新聞で見たときはおどろきました。もうあと少しで定年というときでした。あの頃の写真を見ても、わたしの記憶の中でも、やさしく笑っている先生がいるので今でも信じられないぐらいです。

１歳にもならない赤ちゃんも亡くなりました。いったいその子は何のために生まれてきたのでしょう。

がれきの下から聞こえる助けを求める声、燃えさかる炎。テレビで見た人はたくさんいるでしょう。こんなに近くに住んでいて、地震の恐怖を味わったわたしでさえ、本当の被害を初めて知ったのはテレビだったぐらいです。そのときも確かにショックでしたが、実際に燃えたあとやがれきの山を見たときは声が出なくて、ただじっと見つめていることしかできませんでした。どうしてこの子が、この人が、といったいどれだけ多くの人が思い悲しんだことでしょう。あのたった何十秒かの地震の影響で、４ヶ月以上たった今でも職を失った人や、避難所生活を余儀なくされている人がたくさんいます。そして亡くなった人も……。

しかし、わたしたちはいつまでも嘆き悲しんでいるわけにはいきません。もとの、いいえ、前以上の美しい神戸を取り戻すためにがんばっていかなくてはいけません。そのためにもこの経験を無駄にしてはいけないのではないでしょうか。何時間も暗闇に閉じこめられていて、それでも希望を失わず助けられた小さな命もあるのです。なぜここまで被害が大きくなってしまったのかを正しく知る事が大切だと思います。過去を振り返ってばかりいても前に進むことは出来ません。しかし、忘れてはいけない事もあるという事をしっかりと胸に刻みこみ、これからの事をみんなで考えていけたら……と思います。早くみんなの心の中が晴れるよう、明るい神戸の未来を願わずにはいられません。



（食堂の北側よりみた体育館）

地震におもう

渕之上　なおみ（50回生）

１月17日は私にとって大切な日になりました。多くの人が死に今だにもとの生活ができない人も多いけど、あの日がなければ気が付かないいろいろな事が分かりました。いままではどんな事でも自分には関係ないと思っていました。どう言えばいいのかわからないけれど、自分には自分達の地域には…といつも他人事だったから、地震が神戸をおそったことが信じられませんでした。いままで考えたこともなかったことにいろいろと気付き、どうしてこんなあたりまえですごく大事なことに気が付かなかったのか、そんな自分がはずかしくなった。

私は長田で生まれて長田で育ってこれからも長田で住むと思っていました。神戸が長田が好きでした。だからたった20秒で変わってしまった自分の町が信じられなかった。私の家族は全員無事だったけど家ではもう住めませんでした。家があるのがあたりまえだと思っていた私の考えを変えられてしまったのです。毎日生活してきた家がなくなってやっと気付きました。友達やその親、いろいろな命をうばわれ、もうみんなに会えないかもしれないと思いすごく不安になりました。いろんなおもいがまじってどうすればいいかわからなくなりました。でもその時、家族がいたから今私がちゃんといるんだと思います。もし、家族を失っていたら、ぜったいに今のような私の生活はありませんでした。どれだけ命が大切かを知りました。それと同時に、人間の自然に対する弱さをおもい知らされました。そして人の心の温かさも知りました。ボランティアとしてたくさんの人が助けてくれました。いろんな人のいろんな助けでみんなが助けられました。

失ったものは大きいけれど地震によって得たものも大きいです。だからぜったい忘れてはいけないことだと思う。それでもまだ私は分かったつもりになっているだけかもしれないけど別にいいと思う。今の私にはそれがせいいっぱいだから。

震災と私

村　田　宏　美（50回生）

いつ目が覚めたのか、気が付くとガラスの割れる激しい音が聞こえていて、その次の瞬間には大きな揺れを感じていた――１月17日の早朝。

被害の大きかった兵庫区にある私の家は、２階の床がはずれ、戸がすべてかみ合わなくなり、ひびの入っていない壁はなく、いつ余震で倒壊してもおかしくない状態になってしまった。そんな中、家族全員大したけがもなく無事だったのは本当に奇跡だと思う。

私達の避難生活が始まったのはその日から３日後だった。避難生活といっても、私達の場合は、親戚の家が近くて被害もなかったのでそこから学校に通うというものだった。通学の時間を除けば、衣食住すべてにおいて不自由なかったけど、何かがぎこちなかった。学校が数日間なかったりして、当たり前の生活を送れなかったからだろう。

震災で体験した事を思い返して文章にしようとすればするほど思いがあふれて、何を書けばいいのかわからない。それほど多くの事を体験したり見たりしてきた。物質的に失っ

たものは多いけど、精神的には強くなったし、何かを手に入れることができたと思う。
家もちゃんと修理されて、もとの通りの生活ができるようになった今、私はあの時手に入れた何かを失いかけているのかもしれない。

恐怖と人情

山　本　優　子（50回生）

『ゴォーッ』という音とともに、私の体は宙に浮いた。とっさにふとんをかぶった。
ただただ、恐ろしくて、たった20秒の出来事だったらしいが、私には20分くらい続いたような感覚が体に残った。
家の中は、真暗。私の顔の横には本棚が落ちてきていました。一瞬、体から血の気がひいていました。電気はつかない、水は出ない、夜が明けるまで家の中を歩き回ることさえできませんでした。ただ、窓の外から、ちらちらと見える赤い炎。体が震えました。
夜が明けたころ、家を出てみてびっくり!!　けむりが、猛々と立ち昇り、火の粉が飛び散ってきた時は、自分の家まで焼けてしまいそうで、心配で家を離れることが出来なかった。
夜には、だいだい色の炎が朝よりも広がってきて、心配が倍増。２日間ほとんど眠れず。食べものといえば、おかしぐらいで、飲みものを買うのもひと苦労。
２週間くらい、こんな生活が続いた。私は受験が近づいていたので少しは勉強しないと、と思っていましたが、気持ちが落ち付かず１週間ぐらい手に付きませんでした。
受験勉強している間に、私の家の上をヘリコプターが１日に最低10機近く通っていくので、私の家はギシギシ、メシメシとすごい音を立てました。
２～３週間して、私がうれしかったのは、ボランティアで、食べ物、衣類、日常に必要なものを運んできてくれた人々がいてくれたことです。
本当に“ありがとう”感謝しています。
あの恐怖の体験から、４ヶ月余りたちましたが、今だに、跡が残っている所も少なくはありません。
今後、こんな思いがけない事があるならば、このことを教訓として、もっと早く、確実な救助を求めたいと思います。
神戸の早い復興を願い……。

「地震や」

吉　本　智　幸（50回生）

物凄い音とともに跳ね起きた。瞬時に「地震や。」と判断できたが、何も出来なかった。何秒、何十秒たっただろうか。やっと揺れがおさまった。停電になっていたので声で家族を確認した。全員無事だったが、仕事に出ていた父が心配だった。

衣服を着れるだけ着て懐中電灯とラジオを持ち外へ出た。悲惨だった。うめき声こそ聞こえなかったが、あちらこちらで家族の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。「お母さん!!お母さん!!」崩れた家の前で子供がうずくまって泣いている。男の人が数人駆けつけてくれたのでなんとか助かったみたいだ。本当によかった。

「何処へ行こう。」みんなが口をそろえて言った。公園へ行きたいけど南の方にあるので津波が怖い。そうこうしているうちに陽が出てきた。朝だ。明るくなると被害の様子が、はっきりと分かった。「おーい。」後ろから声がする。ホッとした。父だ。けがもなく、元気だった。

その日は一日中あちらこちらで火の手が上がっていた。だんだんこちらへ火が近づいてくる。このままだと僕の家も燃えてしまう。本当に不安だった。祈るような気持ちで眺めていた。なんとか家の手前で火は止まってくれた。その日の太陽は煙のカーテンに包まれて不気味な真っ赤な色だった。

その夜、とりあえず近くの小学校へ行き、なんとか一夜を過ごした。あと２ヶ月間、そこで暮らすことになる。

数週間後、一番聞きたくなかった知らせが耳に入った。友の死である。彼の親や兄を見た人は何人かいたが、本人を見た人がいなかったので嫌な予感はしていた。「でも、あいつやったら……。」と考えていた矢先のことだった。

はっきり言って３月に入るまでは勉強どころの話じゃなかった。引っ越しの手伝いや水運びをやっていた。でも受験までのラスト３週間、亡くなった友のためにも必死で机にかじりついた。ここで不合格だったら地震に負けたことになる。だから頑張った。

あれから５ヶ月。神戸の町も落ち着きを取り戻し、人々の心にもゆとりが出てきた。今、考えると本当に恐ろしい体験だったと思うし、ある意味で、いい経験になった。少し自分が強くなったような気がする。

これを通じて人の暖かさや優しさに接することができたが、それ以上に自然の恐ろしさを感じた。

1995年1月17日夕刻から一昼夜……夢野台高校にて

佐野　正明

神戸市企画調整局企画部主幹
派遣先；㈶大阪湾ベイエリア開発推進機構

長田区役所から三人が派遣され、夢野台高校に着いたのは夕方。もう既に暗くなっていたが、いま思い起こすと見えていたかのようにはっきりと瞼に浮かぶ。たしかに月夜ではあったが、記憶では夜で見えないものであっても透かしたように見えるものらしい。これは、今回の震災体験での新しい発見である。

着いた早々に会ったのが体育館へ避難している人達のリーダー役のAさん、さらにグランドに避難している人達のリーダー役のBさん。「水・食糧を持ってきたんか」と詰め寄られたが、長田区役所も被災ししかも今もなお御蔵・菅原地区の火災で混乱していること、夢野台高校の状況が区役所本部でつかめていないこと、そのため先ずこちらの状況を本部に報告し救援内容を緊急に伝えなければならないことを訴え理解を求める。

先生や職員の方にこれまでのお礼と今後の協力をお願いし、事務室を避難所本部として使わせていただくことの了解を得る。リーダー役のお二人から話しを聞き概ねの状況を把握。Aさんは自治会の元会長、Bさんはスポーツ少年団の監督。このお二人が中心となって近所の人達と力を合わせ避難・救出にあたり、学校側のご厚意にもより既に第一次的な避難・救出は済んでいることを知る。

避難者700～800人、負傷病者数人、亡くなって体育館に収容された方2人。

電話が不通のため、800人分の水・食糧の調達及び救急車派遣と遺体収容の要請に本部へ伝令を送る。災害時しかも夜の伝令には危険が伴うことも想定され、派遣者三人のうち二人があたる。（なおこの後、この二人は他地区も含めた物資・食糧の搬送に従事。私一人となり、学校の様子も分からなかったため、教職員の方々のお世話・お手伝いがなかったなら何もできなかったことを付記し、深謝。）

伝令を送り出した後、AさんBさんの案内で、避難している体育館とグランドさらに近所の大丸山公園と市営住宅の集会所をまわる。避難状況を詳しく把握するとともに、避難している人達に、市から派遣され今着いたこと、伝令が既に走っていること、区役所や他地区の被災状況を伝え、一緒に頑張ろうと呼び掛けてまわる。

体育館は停電で暗闇、懐中電灯で少し様子が分かる程度。寒さと疲れと暗闇そして余震、不安と心細さで沈みきっている様子。グランド組は車で乗り入れ、いくつかのグループとなり焚き火で暖をとっていることもあるのか、こころなしか落ち着いた様子。何とか力になれればと祈る気持ち。

夜9時ごろ初めてのパンが届く。これだけの量では一人に一個はあたらない。しかし、混乱している最中でもあり、今日中に食糧が届くだろうかと心配していたのでほっと胸を撫で下ろす。こちらの状況が区役所で把握されたことがありがたく思える。リーダーにお願いしてさっそく配ってもらう。毛布も全員にというわけには行かないが届く。

夜中11時頃に遺体搬送車がくる。すぐに追い掛けるようにして赤十字社の救急車も

（北テニスコートのよう壁）

到着。医者と看護婦がセットで診察投薬、うち一人は救急車で病院へ搬送。負傷病者はお年寄りがほとんどなので気をもんでいたがひとまず安堵。救急車は愛媛ナンバー、医者も看護婦も訛のある言葉なので聞いてみると愛媛から今朝早く出てきたという。対応の速さに驚きありがたい気持ちで一杯になる。

松本通りの火災が迫って来る気配。もし、そうなると二次避難が必要となる。急を告げてからではこれだけの人数の避難はむずかしい。土地鑑がなかったため、職員の方に案内してもらい様子を見にいく。一面火の海、これまでにこれだけの広さの火災は見たことがない。しかし、火の勢いは弱まってきている。消防車からはちょろちょろした水しか出ていなかったが、幸い風がなく、少なくとも神港高校の前の道路までで止まるものと思われ安心する。

できることは全てした。これでなんとか夜は越せるか。校長室のソファーを貸してもらい、長丁場も覚悟し明日に備えて眠ろうと思うがなかなか眠られない。今夜は月がいやに明るい。

朝、パンが届き18日が始まる。するべきことがたくさんあると思われるが何をすれば良いのか。

非難している人達の数と名前をつかむため、包み紙やレシートの裏などに名前を書いてもらい集める。こちらからの電話はまだかからないが、受信はできるようになり避難者の安否確認の電話がかなりの頻度でかかる。尋ね人の訪問も多数あり、教職員の方々のお手伝いにより助けられる。

明るくなって体育館を見るとかなりダメージを受けている。代わりを捜そうにもこれだけの広さを他に求めることは不可能。1階の食堂はある程度の広さはあるが、外の擁壁が崩れてきていて危険な状態。4階の講堂に上がってみたが屋根が弱そうなことや4階への昇り降りも考慮しあきめらざるをえない。しかし、お年寄りや病弱な人達のため、校長先生にお願いし玄関脇の応接室の使用を許可していただき、落ちそうな

シャンデリアを外し室内を整理し使えるようにする。

学校からの連絡が通り関西電力がきてくれ体育館は照明がつくようになる。しかし、校舎は配線が複雑なため今日は無理とのこと。今夜もまたバースデーケーキ用の小さいろうそくに頼るしかないか。

自衛隊が炊き出しにきてくれるという連絡が昼過ぎに区役所から入る。800食分をトラック3台が来てグランドでやるというので、さっそくリーダーに伝えグランドをあけて準備をしてもらう。しかし、待てど暮らせど来ない。暗くなる頃やっと発信もできるようになった電話で区役所にきつく催促する。夜7時頃やっと米だけが届く。しかし、自衛隊は来ない。やきもきすることこの上ない。希望を持たせておいて、こんなふうになるんだったら最初から言わなければ良かったと思うが後悔先に立たず。(後で分ったことだが、結局来なかったとのこと。道路事情があの状態では仕方なかったと思いながらも、避難者の方々とりわけリーダーの方には本当に申し訳ない思い。)

夜10時頃、思いがけなく交代要員がきてくれ、翌日からは別の任務につきその後これまで夢野台高校に関わることはなかった。

ほぼ一昼夜だけのことだったが、私の人生の中でこれ程印象に残るものはなかったし、夢野台高校は一生忘れられないものとなるだろう。この体験や思いが載せられるこの文集は、自分史のひとつとしてこの上ない貴重なものとなる。この機会を与えて下さったことに感謝。深く礼。

最後に、指定避難所となっていなかったにもかかわらず、校長先生をはじめ夢野台高校の先生方・職員の皆様に御尽力・御協力いただいたことに敬意を表するとともに厚く御礼申し上げます。

(1995年6月17日、亡くなった方々の御冥福と一日も早い復旧・復興を祈りつつ)

震災当日の私

足立　隆

1月17日、5時46分の数十秒間に“死”を予感したと言ったら、大げさに聞こえるだろうか。それまでにも自分の死を漠然と感じた事はあったが、今回のように実感を伴って経験した事はなかった。

家具の下敷きとなったが、幸い重い物ではなかったのと倒れてきた位置がよかったので、大きな怪我もなく脱出することができた。その後の数十分はまだ周囲が暗い事もあって、ベランダで夜明けを待っていた。

ようやく明るくなり家の中を見ると、ほとんどの物が元の位置にはなく、めちゃくちゃな状態だった。鏡をのぞくとガラスの切り傷が数ヶ所顔にできていた。

「死ぬかもしれない。」と感じた瞬間を越えて生きている事を確認した時から、意外に冷静に行動していたようだ。しかし、近隣からは騒然とした雰囲気が漂っていた。すぐ横手の2階アパートは1階部分が押しつぶされ、ガスの漏れている臭いもしていた。少し離れた建物からは煙と炎が見えた。

自分がとりあえず無事であり、行動できる時点になって実家の事が心配になった。見渡せる範囲の景色はすさまじいもので、情報を得る手段もなかった(携帯ラジオを持っていなかった!)。自転車に乗り実家へ向かったが、途中見た町並みは予想以上にひどく、道路も普通に通れる状態ではなかった。

何とか実家についたが、長年住んでいた家は1階部分がぺちゃんこにつぶれていた。幸い2階に寝ていた両親は無事で大きな怪我もなかった。その時は家や今後の事はともかく命ある事をとてもありがたく思ったものだ。

しばらく両親の世話をした後、自分のマンションの事が気になった。まだこの地震

の被害の全体像など知る由もなかったので、警察や消防署の活動に重大な障害があるなどとはその時点では思っていなかった。だからマンションに着いた時には火事がすぐ間近に迫っているのを見て呆然としてしまった。

周囲の見慣れた建物がどんどん炎に呑み込まれ、焼け落ちていっている。少し離れた所でようやくといった感じで消火活動が行われていた。しかし、放水ホースは一本しかない。　貴重品をまとめ、いつでも運び出せる準備を急いでした。消防士さんがベランダに上り、一本のホースで懸命に消火をしてくれた。自分の住んでいるマンションが焼け落ちるかどうかは五分五分に思えた。

その時の数時間は一生忘れられない。一部私も消火活動の手助けをしたが、火の勢いはものすごく、それまで焼け尽くした建物跡は戦場のようだった。

火事は夜中の12時過ぎにようやくほぼ鎮火することができた。この時ほど消防士さんの存在を感謝したことはなかった。何度か避難するように言われたが、自分の住家がなくなるかどうか最後まで見とどけたかったので、邪魔にならないようにとどまっていたのだ。　結局南側の隣接したアパートは焼けてしまったが、マンションは残った。壁は少し焼けたが、燃え移らずに消し止められた。

消防士さんたちが一本の放水ホースを残して帰って行った後、家に残り、ローソクの明かりの中余震に怯えながら、眠れない数時間をすごしました。

申し訳ない事に、学校に向かったのは翌日のことでした。ただ、翌朝学校へ行く途中で見た光景も一生忘れられないものになりました。

報　告

島田　哲朗

H君、君がいたましいというよりほかに、どんな言い方も許さないような理由でこの世を去って、五ヶ月の月日がたちました。本当にもう五ヶ月もたってしまったのです。今、僕は本棚が倒れて本や問題集が散乱し、机が妙な方向に傾いたままほったらかしてある国語科準備室でこの作文を書いています。「報告」と気負いたって書き始めた僕の五ヶ月をふり返ってみて、君に報告出来る程のことは何もしていないことに気付き、ア然としている状態なのです。自分の準備室すら片づけ終っていない五ヶ月でした。じっと思い出していると、ただ歩いていたような気がします。Y先生と二人、避難所、生徒の自宅、知人の手伝い、知り合いの見舞い。別にそうせねばならない義務や、仕事上の拘束があったわけではありません。目的も、その朝二人で思いついたものであったり、偶然かかってきた電話での連絡に触発されたものであったり。ようするに何で

もよかったのです。学校には、電気も水もガスもありませんでした。暗い職員室の片すみで教頭先生が一人で仕事をしておられました。鈴蘭台から電車のレールを伝って歩いたり、西宮から自転車に乗ったり、三時間も四時間もかけて学校にやって来て、跡片づけや今後の対策に懸命の先生方や職員の皆さんは、もちろんいらっしゃいました。しかし、暗い校内でくずれた壁や、天井からぶら下がっている蛍光燈、どこからかただよってくる異臭を目にしたり鼻にしたりするのは陰気で、僕には耐えられそうもなかったのです。そういうわけで、実際は街に逃げ出したようなものだったのです。街は、全体が平行四辺形の寄り集まりのように壊れていました。ビルも電信柱も道路も電車のレールも。実に勝手気ままに、かたむいたりひしゃげたりしていました。あらゆるものが壊れていました。そこで、僕はあらゆるものが壊れうるということを本当に初めて知りました。こんなふうに知ることが出来たことは、歩いていてよかったことだと思っています。僕たちが後生大事に抱え込んでいる常識や価値観など、なに程のものでもないのです。すべては壊れる。しかし、だからといって虚無や無常の中をさまよっていたわけではありません。街や避難所で出会った、生徒や卒業生、友人達は思いの外明るく、快活でした。「生きる」ことに積極的に立ち向っている彼等の姿は、共に生きていることの喜びを与えてくれるものでした。六月のある日、久し振りに歩いていた、長田の街角で出会った生徒のお父さんがこう話してくれました。「みんな焼けてしもうて、私、商売始め直すのもしんどおて、ぐずぐずしてたんです。そしたら、センセ、あいつが『オヤジ、そんなんやったら死んだほうがましやど』ゆうんですわ。私、目ェー覚めましてん。」　H君、新しい強さとでも言うべき何かを若い彼等が育て始めているということを君に報告します。僕も、その中に生きることで、何か新しい生き方を見つけたいと思います。もうすぐ暑い夏が来ます。時のたつのは、おそろしく速いものだと感じます。しかし、君が死んだあの大事件のことと、五千数百名と報道される犠牲の中に君がいたことを僕はわすれないと思います。さようなら、冥福を祈ります。

震災一日目を振り返って

松本　睦之

1月17日のあの大震災。いまでも、まだ信じられません。1月16日の晩、たまたま、深夜寝付かれなくて、夜道を散歩しながら、「明日は給料日だなぁ。」と呑気に考えていました。いつもの日常が繰り返されるのが当然のように25年間過ごしてきましたが、それはあの20秒によって打ち砕かれました。

しかし、震災直後、部屋は落ちた家財具で散乱していたものの、家族は無事だし、我が家とその周辺には特に外傷がなかったので、今日一日交通機関が麻痺する程度と軽く考えていました。ところが、不通の神戸電鉄にかえて、車で西神戸有料道路を利用して丸山まできたとき、どうでしょう！眼下の街のあちらこちらから、黒煙が上がっているではないですか。そして、10時30分過ぎに学校に到着して、車より降りた途端、知覚に入ってきたものは、無残に破壊されたアスファルトと、ガスの臭いでした。学校に入ると、正面玄関・グランドにすでに住民の方々が悄然とした様子で避難されていました。

その日の晩のことは今でも忘れられません。私は、神戸市職員さん、本多先生、教頭先生とともに、学校の事務室で一夜を過ごしました。散乱した事務室の中、使用不

能の電気の代わりに蝋燭を灯し、時々襲ってくる余震に戦きながら、刻々と増える一方の死傷者数や被害地域がラジオから報道されるのを聞いていました。松本通の火事がこちらにも飛火するのではないかということで、松本通の火災現場にも行きました。消防車はすでに来ていましたが、為すすべもない有り様でしたので、その時は何とも腹立たしかったのですが、後から水道管破裂のため水が使用できないためだったことを知りました。深夜には、待ちわびていた救援物資が到着したので、物資の搬入を手伝いました。安否の確認の電話が掛かり始めたのもこの頃です。切迫した受話器越しの相手の声、昼間のうちに避難された方々に予め書いてもらっていた現住所・名前の書いたメモを、懐中電灯を頼りに懸命に探しました。そして、ようやく長い長い一夜が終わりました。

翌日以降の話は、また機会があれば、そちらに回したいと思います。ただ、最後に私が今回の震災から学んだことを箇条書きにして筆を置くことにしましょう。

①自然の脅威

電気、水道、ガスがスイッチを捻れば、簡単に手に入る。夏はクーラー、冬はストーブ。近代的利器に囲まれて、自然の脅威についてほとんど思いを馳せたことがなかった。雲仙普賢岳の噴火、奥尻島の地震の報道を見聞きしても、まさか関西を襲うことはないだろうと恥ずかしながら軽く考えていた。しかし、戦後50年をかけて築き上げてきたものが、僅か20秒の自然の猛威により否定されてしまった。

②人の優しさ、強さ

寒空の下、協力し合って、堪え忍んだ住民さんの生命力、意志の強さ。また、全国から寄せられて来た救援物資、義援金。風呂、食事、レクレーション等、様々な工夫を凝らしたボランティア活動。

③危機管理の大切さ

「安全は空気のようなもの」と高を括ってきた。リスク回避を考慮せず、経済的効率性のみ追求するやり方はもはや通用しないのでは。

日記帳から

宮地　洋子

1月17日（火）　明け方、ガタッというすごい音でとび起きた。続けて猛烈な横ゆれ。体の底から恐怖がわいた。息子の名を大声で叫んだ。しばらくしておさまったので、大急ぎで着替えて下に降りる。停電でまっ暗。携帯テレビでニュースを見ると、M7.2、震源地は淡路島という。信じられない。地下鉄が止ってしまった。

1月18日（水）　地震は神戸中心部ですさまじい。火事がずっと続いている。生徒のいる長田区、兵庫区が心配だ。死者が2千人を越えている。Oさんの両親のマンションが全壊で西神南の家につれて来たという。水が出ないそうで、車でポリタンクの水を持って行ったが、道路は大渋滞だった。電話にかじりついたが、クラスの生徒で連絡がついたのは7人だけだった。

1月19日（木）　地下鉄が板宿まで動き出したので登校した。板宿から歩いたが、道ぞいの惨状は何と言えばよいのか。まだ煙がくすぶっている。職員室はロッカーが倒れムチャクチャ。F、S両先生と水木小学校から順に兵庫区の避難所を回る。停電したコンクリートの廊下にも布団をしいている。3組のY君や7組のAさんと会う。がんばってというしょうもない言葉を口にする自分が情けなかった。神戸は当分ダメだ。

1月20日（金）　1人で長田区の避難所を回った。8組のSさんに会った。真陽小でW君のお母さんと話しをしている時に大き

な余震がきて、二人で抱きあってしまった。

1月21日（土）　Y先生と会下山町、湊川町等学校の北方面を回る。帰りが1人で少々心細かったが、トボトボ歩いていると被災者の人から声をかけられ弁当をもらった。申し訳なかったがありがたくいただいた。歩きながら食べようかと思ったががまんした。

1月23日（月）　須磨の叔父、叔母の家に電話がかからないので、板宿から線路沿いに歩いて訪ねた。10年以上も来てないが記憶と地図をたよりに捜した。古い家の多いところであちこち全壊で道がふさがっている。屋根の上を乗り越えたりしてたどり着いた。二人とも無事だが娘の所に避難しているという。家は大破していたが、まずは安心だ。

1月25日（水）　初めて職員会議がもたれた。久しぶりに見る顔、それぞれ大変そうだが、何はともあれ無事でよかった。学年会で生徒の安否確認、被害状況をまとめる。夜に大学時代の友人から電話がありうれしかった。夜11時頃大きな余震があった。いいかげんにせんかい。

1月26日（木）　S君が我がクラスで最後まで確認がとれず、出かけて行った。周囲はひどいが、本人も家族も家屋も無事だった。万才。

1月30日（月）　鈴高と夢高とに別れて集会をもった。久しぶりに見る顔、やはりホッとする。地震以来2週間というのが信じられない。

一昨年購入したぶ厚い「十年日記」の二年目の欄、一月はこのようなものだった。

6月11日（日）　母の所へ行く。寮母さん二人と話をした。地震で緊急に入所された方のうち約10名は継続入所になるそう。4人部屋が6人部屋になって窮屈そうだ。

約5ヶ月後の一ページ。まだまだ地震のことが続くだろう。私なりにできることをしてゆきたい。

震災・断片

武藤　眞一

その瞬間、激しい揺れと同時に、ありとあらゆる音がした。ゴーッという地鳴り、ドーンという音、建物のきしむ音、ガラスの割れる音、家具の倒れる音、食器の割れる音。揺れている間は声も出なかった。妻は「なにっ？なにっ？」と繰り返すばかり。息子たちや母に「大丈夫か？」と問う自分の声がうわずっているのが分かる。あらゆる家具が足の踏み場がないほど折り重なっている。息子と母が家具の下敷きになっていたが、すぐ助け出すことができた。枕の回りにもガラスが飛び散っていたがけがもなかった。不思議だ。

「ガスがもれている」というので道路に出る。そこへ親戚の子が車で「親父が下敷きになっている」と言いにくる。パジャマの上にジャンパーだけ着て二人の息子と向かう。住吉川沿いの道路にキ裂。電柱も倒れていてなかなか進めない。１階が押しつぶされてどこから手を着けていいのか？一番奥の部屋だという。裏の壁を破ることにする。近所の人がバールやノコギリを持ってきてくれる。瓦をどける。柱を切る。壁は破れたが、家具がじゃましている。余震で瓦が落ちる。上体が見えたがスチール家具に足がはさまってぬけない。自分たちの手に負えないなと思ったが、金ノコを持ってきてくれた人がいる。４時間半かかった。あきらめないでよかった。

自転車で学校へ向かう。御影高校付近の家の倒壊がひどい。ＪＲ六甲道付近で高架が落ちている。市場がペチャンコ。三宮付近はいたるところで行き止まり。新聞会館、サンプラザなど崩れている。生田消防署から県庁にかけて消防自動車、救急車、自衛隊、パトカー、機動隊などでごった返している。松本通一帯焼失。寒けがする。重池住宅も崩れている。校舎もだめだと思っていたが新館以外は大丈夫。信じられない。玄関付近や事務室はごった返している。生徒の安否の確認、避難している人の問い合わせ。ＯＢもすでに何人か電話の対応などに来てくれている。

学校から帰ると、知人の娘さん２人が亡くなったことをＴＶで知る。すぐ遺体安置所になっている灘高校へ行く。真っ暗な体育館に入るとき少し勇気がいった。入口で遺体の番号を聞く。家の下敷きになっていたのだろうが、ローソクの光でみると、２人とも生前のままのきれいな顔をしていた。21才と17才だった。初めて涙が出た。

何日目だったか、ほとんどの生徒の無事が確認できたが、残り数名の安否が確認できない。先生方が手分けして避難所等をまわることにする。自転車でまず、長田区腕塚町まで行く。ＴＶで見た状況とは全く違う。ひどい。一面焼け野原。これで無事でいられるだろうか。鳥肌が立つ。地図で目印にしていた建物はたまたま焼け残っていて、すぐ見つかる。その向かいに「全員無事。××に避難しています。」とメモした板。公衆電話を探して何度も学校へ連絡しようとするが通じない。いったん学校へ戻り、つぎに東灘区へ引っ越した生徒の家へ向かう。一角が全部倒壊していて住所も表札も確認できない。近くの学校で住宅地図を見せてもらうが、転居以前の地図らしく名前は見当らない。家が全壊しているのは確かなのだが、無事なのだろうか。交番、近くにいた人、避難所でも聞いたが結局不明。（後で担任の先生に無事の連絡が入る。）

１月29日の夜になって、事務室に「明日からここの避難所に入れて下さい」と男性が来る。「今になって？」と聞くと、「女房の葬式をやっと済ませた。これまで女房の遺体と車で寝泊まりしていた」とのこと。つらかっただろうな。自分なら耐えられる

か？

道路はいたるところキ裂、デコボコ、ガレキ、行き止まりに加えて渋滞。交叉点ごとに全国からきた警官が立っているがミニバイクの二人乗り、歩道走行、信号無視、何でもあり。それでも大きな混乱がなかったのは多少とも理性が働いているからか。もっぱら自転車が有効だった。４月までに2500キロは走っただろう。

危険度の高い建物から解体が始まる。カニのハサミのような機械でコンクリートだろうが鉄筋だろうが容赦なく壊す。工事をしている人に罪はないのだが、まるで悪魔の手だ。いろんな思い出もあるだろうに、大事なものは取り出せたのだろうか。衣類や書類がヒラヒラ舞って落ちるのが一層悲しい。

この震災で自分がやさしくなったと思う。知らない人にも声が掛けられる、荷物をもってあげる、車に乗せてあげる。みんなにそんな気持ちが湧いていたようだ。また、自分が涙もろくなったとも思う。悲しい場面はもちろん、嬉しい場面でも、すぐ目頭がジーンとしてしまう。あるうどん屋さんが壊れた店先で箱を並べて営業していた。「水道ガスが復旧するまで一杯100円！」との看板。ワカメと削りぶしを乗せただけだが、心意気に感激。「ありがとう、ごちそうさま」と言おうとして、胸が一杯になって声が詰まってしまった。逆に「がんばってね」と励まされてしまった。

この震災で自分は本当の恐ろしさを経験しただろうか。家は半壊だが住める。家族も無事だった。仕事もある。肉親を失った人、家を失った人、仕事を失った人の辛さはとても実感できるものではない。

この震災で自分は何ができただろうか。自分の無力さが歯がゆい。それに比べて生徒諸君やＯＢたちの活躍は大したものだった。電話の応対、水の出ない便所の掃除、ガレキの処理、水運び、教室の整備。「食べてください」とおにぎりを届けてくれた生徒や下着、靴下、水を両手にぶら下げて「避難している人に」と持って来てくれた生徒もいた。本当に多くの、人間の、特に若者の、素晴らしい面を見た。

震災と関わって

森岡　礼次

１月17日、地震が神戸の町を襲って以来、学校職員としてこの震災に関わってきたが、この間、随分多くのことがあったように思う。良いことも、悪いことも、すべての意味で、この震災で多くのことを教えられた。

１月17日、北区の自宅を出、学校に向かう途中で神戸の町を見下ろしたとき、自分の目に飛び込んで来た光景が忘れられない。火事による巨大な煙は、町全体を包み、途中、ラジオ放送で聞いていた「町の10ヶ所以上から火の手が上がっている」という言葉からは想像もできない世界だった。この時初めて、空が曇っているのが町から上っている煙のせいであることがわかり、心臓の鼓動が激しく高鳴ったのを記憶している。「まさかこれ程の大火災が、これ程多くの場所で起こっているとは。」そう感じながら、渋滞する道を学校へと向かったのが、今から思えば、この震災との本当の意味での関わり始めだったのかもしれない。

学校では多くの被災者が避難してきており、彼等の応対に苦慮した。辺りにはガスの匂いが立ち込め、多くの家が倒壊していた。身の危険を感じながらも、数少ない、学校に出てきた職員と一緒に、怪我人の手当（とは言っても消毒以外、何もできなかったが）をしたり、建物の被害状況を一部調べるなどし、走り回った。校長がたまたまオーストラリアからの留学団の世話をして

おり、ちょうどこの日、彼等が帰国する予定だったので、避難してきた団長の奥さんを校長の家に送ったり、また、自宅からろうそくなどの物資を運んだりした。夕方、ようやく学校にたどり着いた先生方に、後のことをお願いし、1日目は自宅に戻った。

この日のことは、特に鮮明に覚えている。「これってホンマかいな？ウソやろ！」そう思いながら1日目はひたすら過ぎていった。

次に学校に出たのは6日後のことである。この間、道路が閉鎖され、車が動かせなかったため、不安に思いながらも学校へいくのを断念せざるを得なかった。2日目に学校へ行こうとしたとき、自宅付近で一台の車が事故を起こし、長田区などに向かう緊急自動車が動けなくなっている光景を目にし、この時期に車を動かすことの周りに与える影響を考えると、自粛せざるを得なかった。

6日後の学校では、何人かの先生方で、避難所をまわる段取りが進んでいた。早速それに合流、半日ほどかけて10ヶ所ほどの学校や施設をまわったのが、学校における2回目の活動だった。避難所では何人かの生徒と出会ったが、その顔を見るにつけ、何故かほっとしたのを覚えている。学校に帰ったときに、他の避難所をまわっていた先生から、本校の生徒が避難所でボランティアをしていたことを聞かされ「なかなかやるなあ」と感心し、「自分も負けてはいられない。」と気持ちを新たにした。次の日からはほとんど休まず、学校にいっていたように思う。

今回の震災で、自分が一番強く感じたことは、ボランティアなどで活躍している人達の姿によって、自分自身がどれだけ励まされたか、ということである。中には、わけのわからないことで、怒鳴られたり、文句を言われたりしたこともある。正直言ってとても不愉快な思いもした。しかし、時折見かける、無償の親切や、「有難うございます」の一言がとても励みになり、何とかやってこれたのだと思う。

その後の自分の行動は数えあげればきりがない。ある小学校に知り合いがいて、そこへ手伝いにいったとき、本校の先生がこの小学校を訪ねてきて、職員室でお互いに「こんなところで何してるん？」と顔を見あわせたこと、また、ラグビー部の部員とともに本校校舎のトイレの水運びをしたことなどは良い思い出である。また大人げなくも、周囲の一言に感情的になり、怒りをあらわにしてしまったことや、生徒諸君に何気無く投げかけた一言が、彼等を傷付けたのではなかったか、と反省したことなどは嫌な思い出である。

空き箱に「被災生徒にカレーを！」と書いて、前任校の卒業式に出向いたこと、雨の晩、テニスコートの真ん中に被災者のための溝を掘る手伝いをしたこと、手伝いにいった小学校で御馳走になったキムチのおいしかったこと、救援物資で届いた青色チョークで板書して「今日はとってもブルーな気分！」と訳の分からないジョークを飛ばしたこと、この震災の中、新1年生が入学し、その担任になったこと、文化祭で復興を願って折り鶴で神戸の町を皆で描いたこと、今多くの被災者がいる中、こうして学校生活が送られていること――多くのことがあり、そして多くのことがこれからも続くだろうと思う。今僕に言えることは、今までこの震災を通して多くの経験を僕はしてきた、ということであり、その経験を自分なりに今後の人生に生かしていきたい、と思っている僕が今ここにいる、ということである。今回の地震で、僕は本当に多くのことを教えられたような気が今しているのである。

地震その時、そして学校では

山崎日出男

1995年1月17日未明（5時46分）、突如ゴォーッという音とともに、ドーン、ドーンと突きあげられ、横にゆさゆさゆれだした。これはただもんじゃあない。家のゆれ方から、ひょっとして倒壊するんではないかと思った。南東を向いた壁に留めてあった本棚（飾り棚もついた）が留めをひきぬき倒れ、本が飛び、ガラス、花瓶が割れ散った。電気は消えた。すぐヘッドランプ、ラジオをとりにいった。ランプで照らすと居間は足の踏み場がない。直交する壁の食器棚は倒れなかった。重い物も固定した位置から相当ずれていた。時折りゆれが音とともに来た。まず家族の無事を確認し、なすすべもなく夜明けを待った。　夜が白みはじめ、息子が外に出て近所をみてまわってきて、屋根の瓦が相当落ち割れているという、近所も同様にすごいという。私も外に出て家のまわりを調べた。基礎の部分4ヶ所庭の地割れにそってヒビ割れていた。屋根は棟の部分の瓦が飛び落ち下の屋根の瓦をあちこち割っていた。家の壁は外は大丈夫だったが、家の中は壁土が落ち、クロスが破れさけ、戸などがゆがみずれていた。市街の方は煙がもうもうと上がっている。特に高取山の向う側がすごい。

ついに来た。いつかくるだろうとは思っていたが、まさかこれほどのものとは予想できなかった。六甲山系の活断層の多さから地震がないというのは逆に、“もうそろそろいつきてもおかしくない”と話していた矢先のことだった。

朝食をとりあえず済ませて、居間を片づけてから、車で降りていった。市街地に近づくにつれて被害はひどかった。家は倒壊し、道は割れ段差ができたり、盛り上がったりで、車は走りにくかったが、どんどん進めた。しかし学校に行くことはできなかった。上沢の火事で、通行止めになっていた。いったんひきかえし、今度は歩いて学校へ向った。丸山中学の裏手（北側）が校舎のところから崩れ下の家を押しつぶしていた。アスファルトの割れめからか、ガスの臭があちこちでしていた。学校の時計は5時46分で止まっていた。本館は無事のようだが、新館（理科、家庭科、図書室など）は、柱にざっくつ状態があったり、壁が落ちたりでひどいやられ方だ。本館も職員室は中メチャメチャ、私の机の上はきれいになくなっていた。机やら棚も動き、原型にもどすのは大変そうだ。学校の中は人気が少なかった。2～3人の先生に出会っただけ、玄関に、「避難所は体育館」の立て札がたっていた。テニスコートの擁壁が崩れ、受電室が損壊をうけ、校舎内の電気はついていなかった。この日は何も出来ず、せず帰宅した。学校の付近の家も相当倒壊したり、傾いたりしていた。重池住宅の一棟、二棟、一階、二階がつぶされ、低くなっていた。房王寺の住宅の前の神鉄の線路が波打っていた。町は崩れ、燃え、空を黒煙がひろがりおおう中ヘリコプターの音がうるさく飛びかい、消防自動車などの救急車輌のサイレンが、けたたましく行き交っていた。

家に帰って電気は来たもののテレビがうつらなかった。7時すぎようやくうつるようになって、神戸の惨状が目に飛びこんできた。松本、長田の火事、三宮などのビルの倒壊などなど、言うべき言葉がなかった。今度の活断層の直下型地震のすごさが、身に焼きついた。

18日は朝から、食料、道具（ヘッドランプ、ガスコンロなど）をもって登校、事務室内は、市の職員、本校の職員がおられた。事務室内の整理、避難所の本部としての場づくりなどが行なわれた。私はただできる

ことだけをした。屋上の受水槽がやられていて水が出ない。トイレがこんもりになっている。誰かが「プールの水だ」といい、稲葉さん、織田さん等と、体育館のプールのところへ行った。体育館の下は基礎がずれ壊れている。プールへのドアが開かない。外側からまわられた稲葉さん、「水がない」「プールの水は全部流れている」水をどうする？救援の水を待つより他なかった。学校内のトイレを使用することは出来なくなった。新館はメチャメチャ中へ入り階段を上がっていく、化学も生物も準備室は入れない。棚が皆倒れ足のふみ場がない。物理も同様、ドアは吹っ飛んでいるが実験装置の入れてあった棚が倒れ入っていけない。天井の蛍光灯は落ちていた。

避難して来ておられる人達の中には体育館、グランドともリーダーが生まれ、避難の場所の区割りや、乏しい救援物資の分配などがなされていた。18日には救援物資は少なかった食料もほとんどない。皆の持ち寄った分だけだった。19日頃からにぎり飯などがとどくようになった。生徒がもってきてくれたおにぎりもあった。電気はつかず事務室は暗かった。体育館は外から直接電気を引いてもらい、灯がともっていた。夜は冷え込んだ。

19日の夜、事務室の電気はついた。一ヶ所分電盤に電気を入れてもらったからである。灯がつくとホッとした。でも事務室と校長室、職員室の一部だけである。学校の職員、市の職員ともども、物資のおろし、外からの電話の問い合わせの応対だった。電話は外から入ってくるが、こちらからは通じなかった。区役所やいろいろなところへは皆歩いて頼みに行かれていた。食料や毛布など救援物資がとどくようになる。玄関先に荷が山積みになってきた。避難者への応対、救援物資、場所などに関して学校としての対策指示は全くなかった。物資の管理も、市の職員が避難者のリーダーである飯田さん（グランド）、森川さん（体育館）といっしょに受けとられ管理され分配されていた。物資はリーダーたちで、グランド、体育館、重池園と人数などにより分配されていた。私達は物資おろし、電話応対、掲示物の場所を作り貼っていくことの手伝いをするだけだった。学校へ来れる人、これない人も、できることはまず生徒の安否を、職員の安否を確認することに集中した。各学年主任、柴田先生、福島先生、平家先生を中心に連絡を取りあい、倒壊し、燃えている街中へ生徒の安否を求め、避難所へ、家へとまわられていた。

次々と無事が確認されていったが各学年とも確認できない生徒がおり安堵できない。教師も確認できない人がいたし、事務室にもまだの人がいた。松本さん、佐山さん、織田さん等は大変だった。事務室の書類の整理、安否、電気や、水道の交渉、県との応対など、めまぐるしかった。泊り込みも続いておられた。当初教頭も泊り込みが続いた。

21日（土）夜から雨、外のテントはさぞ寒かろう。事務室も冷え込んできた。小さな石油ストーブが一つであった。西側の教室、２階の207，208，209，210はいざというときグランドに避難されている人達が入れるように、稲葉さん、住野さん達が机を寄せ、蛍光灯を片づけ整理していて下さった。大会議室には数人入っておられた。夜廊下も教室も暗い。雨をさけて教室へ入られても暗いのである。余震がくると、外へ飛び出しておられた。外は、グランド数ヶ所で火を燃やしておられた。倒壊した家の廃材などである。火のそばにいないと寒いのである。火のまわりだけが明るい。住民の人々は夜になると不安なのである。事務室に電灯がついているのをみて、なぜ大会議室や教室に電気がつかぬ、つけてほしい

と要求されてくる。私達も、市の職員も、理由を話し、せめてと懐中電灯をわたしたりしていた。雨が降るとテントが欲しい、テントないか、学校のテントは体育館の下で取り出せない。家に織田さんから電話が入り、物理室にあるオートキャンプ用のテントのことを話した。翌朝聞くと、物理室はわからなかった、山岳部のテントを借りたとのことだった。オートキャンプ用のテント倒れた棚のところからなんとか取り出し、これもまた後利用された。

21日、23日と生徒の安否がまだ確認できない生徒のところを、宮地先生、梶原先生とまわった。湊川町10丁目、会下山3丁目、熊野4丁目、どうしようもなく崩れている家などすさまじい。東山町、荒田町、崩れのひどいところ、あれここは地震なかったの？というところが混在していた。23日の段階で2年生はあと数人になった。3年生はいち早く皆無事との確認がとれ、大倉先生が事務室で「3年生全員無事！」といわれた、そのとき傍らで、「オッ、優秀やな！」という声。誰や！この場違いな言葉を発しているのは？皆が必死で安否の確認でかけずりまわっているときに、そんな言葉しか出てこんのか!!何が優秀なんや！と怒鳴りかけたが押さえた。その場に居合わせた人の中に怒りが拡がっていた。　24日は、“当分の間学校は休み”ということを全生徒に連絡することになり、北区、西区の生徒で電話で連絡のつくものは電話でまわし、後は避難所、テント場など貼紙をしていくことになり、柴田先生、福島先生、藤本先生、森岡先生他来ておられた先生方と手分けして貼ってまわった。まわっていて、生徒の無事な顔をみた時は嬉しかった。2年生も1年生も、25日には全員無事が確認できた。職員も全員無事、皆ホッと安堵した。ただ2年の生徒のお母さんが一人、岡本先生のお母さんがこの震災のため亡くなられた。家の倒壊方向で奇跡的に助かられた先生もおられたし、4～5時間下敷きになっていた生徒もいたということだった。

避難所をまわり、街をまわって、生徒の無事な姿に出会った時は、お互い嬉しさで一杯だった。避難所で泊り込んでボランティアとして被災者のための仕事を手伝っていた生徒、水や食糧を北区からザックに背負って歩いて運んできてくれた生徒、食糧の差し入れにおにぎりをたくさん作ってきてくれた女生徒、電話応対、泊り込みにかけつけてくれた卒業生、頭の下がる生徒達が一杯いた。皆何かをしなければと考え行動していた。

25日は第一回の職員会議、状況説明で終り、学校として何が出来、どうするのか、対策は語られなかったし、またそういう動きもなかった。言いすぎになるかも知れないが、場当り的な対処だけで、後手後手のようであった。

神戸市の職員の対策本部が突然応接室へ移っていた。え!!何んで、応接室電気灯いてないで、私達には分けがわからない。一緒に話し合い協力し合っていたのに！理由は？

さらに、グランドの足元が悪いため、グランドに電灯を、大会議室に避難している人の安全のため、一階の廊下に灯を、つけられるチャンスがあったにもかかわらず、何ぜ!?　28日の職員会議はこの件で紛糾した。皆何ぜ!?　だが理由は語られなかった。灯はまだついていない。職員会議で30日に生徒を北区と学校に分けて集め、学校通信を配り事態の説明、皆への要望などを伝達することを決めた。すぐ、手分けしてビラの貼付に手分けしてまわり、電話での連絡網をまわした。

30日集まった生徒は、お互いの顔を見て無事を喜びあい、情報を話しあっていた。寒い中鈴高のグランドで話を聞いていた。

学校に集まった生徒は、私服がもっと多勢いるかと思ったが少なかった。疲れた表情はしていたが、友達の顔をみて微笑んでいた。

2月2日に夢高通信第2号を配布した。学校再開への予定の連絡通信である。ただこの時点でまだ電灯はつかないし、水も出ない。それに本館2階の化学部の部室から、こわれた薬品が混合し、異様な臭いが、悪臭が出ており、その処置もできないでいた。この悪臭は2階、職員室にまでひろがっていた。この処理に対し、化学の先生や校務員さんにさせようとしていた。化学部の部室に入ると、数十秒間もたない。気分が悪くなり、頭が痛くなるのである。専門家を呼んで処理してもらうよう抗議してもわかっていない。しばらくして、どうなっているのかとただすと、また校務員さんにやらそうとする。職員の安全をどう考えているのか、自分からやろうというのではなく、人に押しつけるというふうであった。業者が来たが、砂を入れたり混ぜたところは、業者も危険として、処理はしてくれなかった。(6月になっても未だ臭いは消えていない)

応急の受電室が6日になってやっとつき、学校内に電灯がついた。電灯がつけられるチャンスから2週間近くもたっていた。進路指導部も、電気が来ず、コンピューターが動かず、3年の入試の情報などで困っておられたが、長いコードで何とか、その場をしのいできたが、ホッとした様子だった。でも水はまだである。救援の水が、給水車がもってきている水が、たのみであった。トイレも校舎内は使えず、救援の水を使って職員用トイレだけだった。(小用のみ)トイレがない。住民の人たちでヒマラヤスギの下にトイレが掘られ、サッカーゴール、暗幕で簡易トイレが作られたりした。体育館側の道に仮設トイレがおかれていた。仮設トイレは入ると震度3のゆれだった。玄関のところまで水が来た。でも受水槽がなくまだだめである。とりあえず玄関のところに水道が来ただけでも有難かった。

2月7日神鉄が長田まで開通し、8日から学校再開、生徒はペットボトルに水を入れてもって登校。講堂に全校生(2年生と1年生)集まり、教室の割りあて、大掃除をした。

2月9日から特別時間割で午前中3時間の授業をした。生徒は久しぶりに集中していた。

生徒の方が事態の順応に早かった。2年生は修学旅行出来る状態でなく中止となった。卒業式は予定通り講堂で、3年生と在校生代表者で、この頃、職員が率先して計画をたて学校内の行事日程など、皆の協力で順当に進んでいた。ただ、私達の及ばないところは遅々として進んでいなかった。

避難されている住民の方々は、住民の方々でリーダーを出しまとまって物資、や緊急時に対処されてきていた。リーダーの方はほとんど不眠不休であった。仕事も投げうって頑張っておられたし、医療ボランティアで来られたお医者さんも、体育館舞台横でずっと泊り込み、被災者の健康のため、頑張っておられた。学校はというと、組織だった対応がとれておらず、いろいろな問題が後へ後へとずれていった。住民の方々とのコンタクトでは、佐山さんが、各テントをまわられていろいろ話しを聞かれていた。住民の方々との気持などを知る上でとても活躍されていた。職員一同ほんとにやるせないどうしていいかわからない気持ちで一杯である。対応によっては、水ももっと早く出たろうし、入試前日なんてことはなかったろうし、未だ出来ぬ特別棟の問題もそうである。

もっと皆の声を真摯に受けとめ、裸でぶつかりあい、協力しあえるよう、計画性をしっかりもって、懸命の遂行がなければ、

いろいろな問題は解決せず、増すばかりである。何とかなるまで待つだけでは、信は生まれない。

震災を乗り超えて

（44回生）山根　宗子

1月17日、午前5時46分あの日、初めて地震の恐ろしさを身をもって感じた。停電で、電気はつかない、部屋はぐちゃぐちゃで足の踏み場もない。「一体、何なの？」その言葉が何度も頭を巡った。

私はその日から大学の後期試験で出かけるつもりで用意をしていた。その時、停電がなおり、テレビがついた。傾いた阪神高速道路、崩壊している三宮周辺、そして空の上からみるめちゃくちゃな長田区。見馴れていたものが無惨な姿に変わり果てていた。そのテレビの状況を見て、まっさきに考えたのは「夢野台高校はどうなったのだろう。友達は…」という事であった。校舎は大正時代のもので、古いし、建設中の校舎もある。現実が把握できない中、不安は募っていった。

やっと、友達とも連絡もとれ、私の友達の全員の無事が分かった。皆、口々に「夢野はどうなったんだろう。」という言葉がでていた。その後、夢野の方へ行ってきた友達が、「夢野は見た目そんな被害は受けていない。長田駅周辺も、わりと無事だ。」ということをきいた。ホッとした。

あれから約4ヵ月たち、私は教育実習の事前指導を受ける為、地震後初めて、高校へ行った。地下鉄上沢駅の方から高校へ向かった。この道のりもよく通った所だ。しかし地上に出て辺りが、かなり更地になっていたのに驚いた。進んでいくにつれ、見慣れた所がなくなっている。ガレキの山を見るより、更地をみる方が、妙に悲しくなった。

現在、夢野台高校には、体育館にもグランドにも、たくさんの被災者の方がいらっしゃる。教育実習生として体育を教えることになっていた友達が高校で教育実習が出来なくなったことを知っていた。高校では部活はおろか、体育さえ出来ないのだ。そして驚いたことは、校舎に関しては新館のダメージがひどい事だった。壁や天井がはがれ、一面にコンクリートの塊が落ちていた。今もし、大きな地震がおこれば、間違いなくつぶれるだろう。そんな状態だった。私が教育実習にきて3日目、授業の見学をしていた時、鉄筋の落ちる、ものすごい音が聞こえた。その時は工事現場の方から聞こえてきたのだと思った。しかし、それは、壊れかけの文化住宅が勝手に崩れた音で、その瞬間は粉塵でその周辺が見えなかったという。

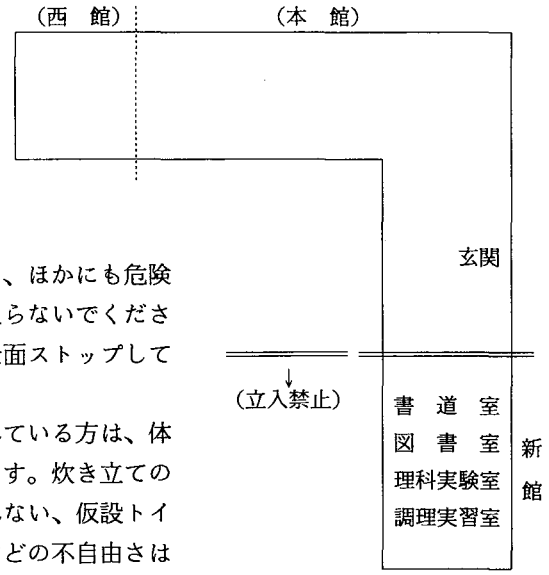
まだまだ地震の恐ろしさと危険性の背中合わせの学校生活を送っている生徒たちは、どんな不安と悩みを抱えているのだろうか。一番楽しいはずの高校生活なのに部活動もままならないなんて、彼らは、こういう形で、傷つけられていると、私には思える。私達の頃は、受験勉強以外にストレスなんてなかった様に思える。ただ単純に毎日が楽しかった。　しかし、何をも恨むわけにもいかない。現実を事実として受けとめるしかない。不幸にして家族・知人の方を失った人、家をなくしてしまった人が大勢いる。その中で自分の命が無事であったことをかみしめて、今ある逆境を持ち前の明るさと、パワーで乗り超え、より強く優しい人になって欲しいと思う。これから生徒の皆は、何を考え何をすべきか、自分自身で答えを見つけ、自分の道をつくっていってほしい。これからの夢野台高校を支える力はあなた達自身なのだから。

夢高臨時通信(1) ……保護者の皆様へ

平成７年１月30日

１月17日未明、阪神大震災が私たちを襲いました。本校およびその周辺は大変な被害を受け、本校の南一帯は瓦礫の山と化しています。保護者の皆様には、在校生の安否のことや学校の今後のことなどについてご心配なされているのではないかと思います。未定の部分もたくさんありますが、とりあえず現状報告をいたしますので、ご理解と今後のご協力をたまわりますようお願いいたします。

（学校および周辺の状況）



校舎は本館と西館の間、本館と新館の間に亀裂が生じました。特に、新館（西側にすこし傾斜）との亀裂は大きく、専門家の検査により立入禁止となりました。

北側のテニスコートのよう壁が崩れたり、ほかにも危険な箇所があるので、不容易に校内に立ち入らないでください。また、電気・ガス・水道はいまだに全面ストップしています。

周辺住民のかたで本校で避難生活をされている方は、体育館やグランドを中心に約1000名ほどいます。炊き立てのご飯や味噌汁が食べれない、お風呂に入れない、仮設トイレからの悪臭、厳しい寒さのテント生活などの不自由さは基本的には解消されていません。

本校からＪＲまでの間は、ほとんどの家屋が全半壊か、立っていても斜めに傾いているかのいずれかです。本校の南にある高層市営住宅は、１Ｆ部分が潰れ斜めになっているし、新長田駅付近は焼け野原になっています。夜の帳がおりると街灯が消え、自警団の人たちが防犯活動をしています。

（在校生の状況）

あの激震のなか、967名全員が大きな負傷もなく奇跡的に無事でした。避難所を巡回していて１月23日にその確認ができたとき、学校は大きな喜びの渦に包まれました。教職員

のほうも無事の確認ができ、本当に良かったと思います。

ただし悲しいこともあります。親を亡くされた方、家屋が全壊および半壊した100余名ほどの方、親戚・知人宅でなく小学校や中学校等で避難生活をしている40余名の方、いまだに遠方の県外に避難転居を余儀なくされている方などがおられます。

一方では、被災地の避難所でボランティア活動をしている生徒達、トイレットペーパーやティッシュ等の不足物資を収集してくれた生徒達、自身が被害を受けたにもかかわらず友の安否を気遣い被災地を駆けまわってくれた生徒達、掛かりにくいにもかかわらず時間をかけて電話連絡をしてくれている生徒達など、素晴らしい動きを見せてくれています。

（これからの予定など）

◇　耐寒登山および３学年の学年末考査は中止になりました。

◇　学校は「当分の間は休校」とします

その理由→１．学校や校舎・通学道路の安全確認ができていない

２．神戸電鉄が長田駅まで開通していない

連絡網の内容やサンＴＶ・ＡＭ神戸の報道に注意してください

◇　１年の模擬試験および２年の修学旅行は中止にします。

◇　卒業式や１・２年の学年末考査および考査後の日程については、実施時期や内容について検討中です。

◇　春季休業中の運用についても検討中です。

◇　授業料免除について

住居が全半壊した生徒の授業料が免除になる見込みです。育英会臨時募集もあります。詳細は学校が再開してから連絡します。

◇　被災した人で避難先や移動先に変更が生じた人は学校または先生まで必ず連絡先を知らせてください。

◇　転校等の相談がある人は先生に連絡してください。

（当面の生活について－生徒の皆さんへ）

いままでの家での生活が不可能になった人は、家族の人達と協力をして生活の再建に努力してください。大変でしょうが頑張っていただきたいと思います。

さほど大きな被害を受けていない人は、浮かれることなく今すべきことは何かを考え、大きな被害を受けた仲間のことを思う日々であってください。学校が再開されたときに、その仲間に具体的に何ができるのかを考えてもいいのではないでしょうか。

ともあれ、このような予告なしの未曾有の天災は、大部分の人達が初めて経験します。小さなことで苛だつことなく、みんなで協力のスクラムの輪を広げていきましょう。

兵庫県立夢野台高等学校

☎078－691－1546

夢高臨時通信(2) ……保護者の皆様へ

平成７年２月２日

震災以来17日がたちました。学校のほうは、校舎が老朽化していたので被害も大きく復旧は思うに任せられない状況ですが、安全確保をし授業再開に向けて鋭意取り組んでいます。

（１月30日の生徒招集について）

大変な状況下795名もの生徒が集まってくれました。その際に、被害状況などの調査をしましたが、結果は以下のとおりです。

（なお　この結果は当日の調査結果とそれまでの確認事項とをあわせたものになっています）

学年	家屋被害			避難者		転居	転校
	全壊全焼	半壊	軽度(壁崩・ひび)	親戚知人	公共施設		
１年	１６	１２	９０	２４	８	２	０
２年	１１	１８	１１７	２３	６	１	２
３年	８	１４	１００	３０	５	０	０
(小計)	３５	４４	３０７	７７	１９	３	２

やはり（？）と言うべきか、あまりの惨状に愕然とせざるをえません。いまだに、百名近くの本校生およびそのご家族が避難生活をされていますし、将来の生活設計がたたない方もたくさんいらっしゃいます。そのなかで、２年８組の大谷優見子さんのお母さん、保健体育の岡本節代先生のお母さんが亡くなられました。心よりご冥福をお祈りします。

（本校生の動き）

前号でもすこし紹介しましたが、各所で素晴らしい動きをしてくれています。兵庫大開小学校で連日泊まり込みでお世話をしている仲間、灘区の小学校でボランティアをしている仲間、本校に手伝いに来てくれている仲間と卒業生、その他多くの人が各所で頑張ってくれています。

また、神戸電鉄が不通なので今は直接的な手伝いはできないけれど、学校が再開されてから何かできることをと集団で考えている仲間達もいます。点数だけでは表現できない大切な人生の勉強をみんなが大なり小なりしているようです。ここでいくつか生の声を紹介します。

ボランティアをしているＡ君　「余震も心配だし体もえらいけど避難している人を見たらしんどいなんか言うとられへん」

再開後を考えているＢさん　「何から考えたらいいのか分からないけど何かせなあかんという気持ちでいっぱいです」

（これからの学校の予定）

校舎のことや授業のことなど不安なことが多々あると思いますが、学校のほうでは次のように考えています。最善はできないまでもよりベターなことをと思っていますので、ご理解ご協力をお願いいたします。

◇　神戸電鉄が長田駅まで開通した翌日を学校再開日とします。

A．再開時には当分の間は午前中３時間授業（特別時間割）とし９時30分開始です。再開初日は以下のものを用意してください。

（用意するもの）・濡れ雑巾１枚（ビニール袋にいれて）
・水をいれたペットボトル１本
（上記は北区＆西区で自宅で用意できる人だけ）
・手袋or軍手

B．水道が不通で便所が自由には使えないので心づもりしておいて下さい。

C．電車の運行状況はかなり悪いので早めに登校するようにして下さい。その際に立入禁止区域には入らないで下さい。

D．信号が機能していなかったり道路状況も悪いので事故防止のため自転車での登校は厳に慎んでください。

E．ＨＲ教室については一部移動はありますが安全な必要数は確保しています。

◇　家屋崩壊などで教科書等紛失をした生徒には学校のほうでコピーをして準備をします。

◇　学校再開後も暫くのあいだは本校で避難をされている方との共同生活が続きますので、避難されている方の気持ちを汲んで自覚ある行動をとりましょう。

◇　卒業式も学年末考査も時期・実施内容については多少の変更があるかもしれませんが、基本的には実施いたします。

（ともに頑張りましょう）

避難をされている方、いかがお過ごしでしょうか。心身ともに疲労困憊のピークだと思いますが、どうか頑張っていただきたいと思います。学校のほうでもできるだけのご支援はさせていただきたいと考えていますので、遠慮なくご相談ください。必要であればお伺いいたしますので、連絡お待ちしています。

ほぼ今までどおりの生活ができる生徒諸君は、無為の日々とならないようにしてください。生活のリズムを保つことが肝要です。

夢高臨時通信（最終号）……保護者の皆様へ

平成７年２月８日

いよいよ学校が再開されました。当分の間、避難されている方との共同生活が続きます。しっかりマナーを守りながら、お互いに楽しく過ごせるようこころがけるとともに、遅れた分を取り戻すべく勉学に全力投球してください。君たちの奮起に期待しています。

（当分の間の時間割と使用教室）

時　間　割　→

９：25	登　校
９：30～10：10	１限目（40分）
10：20～11：00	２限目（40分）
11：10～11：50	３限目（40分）
12：00～12：10	ＳＨＲ
12：10～12：25	清　掃

使用教室　→

２年１組→３０７号	２年２組→３０８号
２年３組→３０９号	２年４組→３１０号
２年５組→２０７号	２年６組→２０８号
１年８組→３０２号	※他クラスは従前の教

（これからの日程－個々の詳細は後日連絡します）

◇　２月27日（月）　卒業式予行
◇　２月28日（火）　卒業式　※在校生出席はクラス２名
◇　３月15日（水）　試験場準備
◇　３月16日（木）　高校入試
◇　３月17日（金）
　　↓　　校内立入禁止
　　19日（日）
◇　３月20日（月）　合格発表
◇　３月22日（水）
　　↓　　学年末考査
　　25日（土）
◇　３月27日（月）
　　↓　　教科書販売．写真撮影　etc
　　29日（水）
◇　３月30日（木）　終業式

３／16 ↓ ３／21　テスト休み

“自彊不熄”の気持ちでみんなで協力しあいながら頑張りましょう！

（これからの生活上の心得）……生徒の皆さんへ

1．ボランティアについて
避難所で、学校で、地域で、また学校からの連絡係として、多くの諸君がボランティアとして活動してくれました。これからも君たちの活動を期待しますが、必ずしもそのような場が見つかるとは限りません。自分のことは自分ですること（例えば、自分が汚した所は自分で始末するとか、自分の出したゴミは持ち帰るとか）も立派なボランティア活動だと思います。

2．共同生活のマナーについて
体育館やグランドに約600人の方が避難生活をしておられます。不便さを乗り越えてお互いの立場を尊重しながら頑張らなければなりません。日常生活のルールやマナーを守るとともに、言葉づかいにも気をつけよう。
特設電話、救援物資、炊き出しは避難されている方のためのものであることを弁えること。

3．トイレの使用について
「小」は校内の使用可能なトイレを使い（バケツで水を流す。ペーパーは流してはダメ！）、「大」はできるだけ登校前に済ませ、やむを得ない場合は体育館前の仮設トイレを使う。仮設トイレの前には消毒液が置いてあるがウエットティッシュや、お絞りを用意しておくと便利です。
学校は断水が続いており、トイレ、掃除、手洗いのために、水の出る地域の人はペットボトルに１本の水を持参してください（元気のある人は友達の分まで２本でも！）

4．立入禁止区域について
新館（特別教室棟）は破損がひどく、全面立入禁止です。他にも壁や天井の破損しているところがあり、立入禁止の表示がしてあるので指示に従うこと。また、食堂、大会議室、209～212号教室は避難されている方に割り当てられた部屋なので立ち入らないこと。

5．登下校について
交通事情も考え、安全に気をつけて、余裕をもって通学すること。自転車通学は道路の状況などから従来通り禁止です。
通学経路が変更になって定期を買う場合は申し出ること。

6．食事について
午前中授業の間は校内で食事をしないこと。午後の授業が始まれば、焼きソバ、カレー、パン、牛乳などの販売を予定しています。

7．部活動について
当分の間、部活動は行いません。部室への立入も禁止です。特別の場合は顧問の先生から指示があります。

8．制服・教科書について
制服がなくなった人は当分の間、私服で登校してください。教科書がなくなった人にはコピーを用意します。いずれも申し出てください。
なお、着なくなった制服や体操服のある人は、ＰＴＡの行っているリサイクル運動に協力してください。

各種の経済的援助

1）経　緯

生徒の安否確認ができたのが１月23日、学校が再開されたのが神戸電鉄の運行再開を受けて２月８日でした。以降生徒たちの話を聞くなか、長田区と兵庫区を中心に多くの家庭で、経済的に大打撃を受けていることが明らかになってきました。

学校のほうでは、この生徒たちに対して何らかの援助をしようということで、２月中旬に検討を始めました。援助の柱は以下の４点です。

［A］　ＰＴＡからの震災援助金
［B］　県教育委員会からの臨時の授業料減免措置
［C］　県教育委員会からの教科書の無料支給
［D］　独自の震災教育援助基金の設立

2）ＰＴＡからの震災援助金について

当初よりＰＴＡよりありがたいお申し出をいただき、学校再開以前より調査はなされていました。住居の全半壊焼の人を対象に、ひとり１万円を合計167名の者が２月に頂戴いたしました。

3）県教育委員会からの臨時の授業料減免措置

臨時ということで、罹災証明があれば減免措置の対象となりました。以下の表がその内訳です。

	授業料免除	神戸市奨学金	育英会奨学金
48回生	６８	４７	7
49回生	５７	４０	6
50回生	６６	未募集	未募集

4）県教育委員会からの教科書の無料支給

総額28万円の援助がされました。教材すべてを賄うわけにはいかないので、教科書を中心に合計67名の者が３月に購入の援助28万円を受けました。現金の授受ではなく、学校のほうより業者に支払いをするという形をとりました。

5）独自の震災教育援助基金の設立

学校では２月中旬より検討を始めましたが、どうあるべきかについてはかなり時間を要しました。結果的には、３月初旬には親蔦会（同窓会）とＰＴＡの好意的な配慮により、両者の共同発起人ということで、卒業生を中心に募金を始めることになりました。

①（震災教育援助基金の概要）

［名　　称］　夢野台高校震災教育援助基金

［代表発起人］　親蔦会会長　繁　田　　愃
　　ＰＴＡ会長　岡　田　三　彦

［設立の趣旨］
兵庫県南部地震により県立夢野台高等学校在校生のなかで学校納付金等の免除措置の必要な生徒に対して教育援助金を支給し教育の機会の均等の保護に資する

［援助の対象］
◇　全半壊および全半焼で罹災証明をもらったもの
◇　家計の主たる維持者が失業したもの
◇　上記には該当しないが援助を必要とするもの

［援助の内容］
◇　学校納付金の免除
◇　その他

［援助の期間］
暫定的に平成７年度の一年間とするが期間の延長が生じた時には再度検討する

［募金の金額］　一口¥5,000円

［募金の方法］　所定口座に郵便振込

［事　務　局］　学校内の基金委員会

②（発　起　人　一　覧）

（第二高等女学校）

1期生－小田　清子
2期生－藤井　澄枝
3期生－白井喜美子
4期生－広瀬　小枝
5期生－宇賀　　貞
6期生－白羽　　宣
7期生－谷　　迪子
8期生－横山　蔦恵
9期生－佃　　良一
10期生－吉岡　房枝
11期生－吉田　禅子
12期生－樫村　綾子
13期生－丹治　雅子
14期生－吉岡　佳子
15期生－吉村和歌子
16期生－柴田　悦子
17期生－中野　直子
18期生－加藤万里子
19期生－高井　照江
20期生－高宮橋九栄

（夢野台高校）

3期生－立田　雅彦
4期生－管田　　洋．若林　暎子
5期生－南出　英之
6期生－吉本　範彦
7期生－木下（山川）陽子
8期生－松井　　脩
9期生－岡田　　稔
10期生－山田　昌宏
12期生－福島　保利．伊集院（魚住）武子
13期生－川端　耿一
14期生－寺川　朋子．谷口　紘一
15期生－森　　正文
16期生－上本　　通
17期生－大林　和利
18期生－小西　規雄
19期生－左成　外記
20期生－渡辺　正見．高橋　年明
21期生－中西　敏美．村瀬　裕一
22期生－八木　龍二
23期生－田中　康憲
24期生－住友　宏行
25期生－寺井　　敬
26期生－吉見　　洋
27期生－小野原　豊
31期生－上野　　修
32期生－田坂　昌彦
33期生－有井（中崎）真由美
35期生－徳山　範夫
38期生－中村　　一
37期生－森岡　礼次
38期生－小泉　智士
39期生－本多　淳二
40期生－徳原　英世
41期生－西川　敦子
42期生－高田　優子
43期生－今城　淑子
44期生－矢尾　　智
45期生－田島　功規
46期生－江嶋　理恵

平成７年６月14日

保 護 者 各 位

夢野台高校震災教育援助基金について

兵庫県立夢野台高等学校
学校長　山根　邦雄

麦秋の候　皆様におかれましてはお変わりございませんでしょうか。震災の余波のなか、ご苦労の多い日々をお過ごしのことと拝察いたします。

さて、標記の件に関しましてご案内させていただきます。多くの方々が被災されたことを鑑みて、本校では３月初めより、同窓生（親蔦会）・ＰＴＡ会員・教職員などを中心にして、「夢野台高校震災教育援助基金」の募金をお願いしてまいりました。反響も予想以上に大きく、遠く北海道や鹿児島も含めて、2000名を越えるご厚志をたまわりました。

つきましては、下記の要綱で基金を運用いたしますので、ご理解ご協力たまわりますようお願いいたします。

記

（名　称）　夢野台高校震災教育援助基金
　　代表発起人－親蔦会会長．ＰＴＡ会長

（趣　旨）　県立夢野台高等学校在校生のなかで兵庫県南部地震により被害を受けた生徒にたいし教育援助金を支給し教育の機会の保護に資するものとする

（運　用）　◇　全半壊（焼）および失（休）業などの被災生徒に平成７年度の学年諸費および補助教材費の援助をおこなう（¥65000）
　　◇　申し込み書を提出→所定銀行等の口座に振り込む

夢野台高校震災教育援助基金 受給申し込み書

学 校 長 様

夢野台高校震災教育援助基金の受給を申し込みます

1995年６月（　　）日

住　所（　　）

（　　）年（　　）組（　　）番．生徒氏名（　　）

保護者氏名（　　印）

※学校備考欄（記入しないでください）

①	②	③

③ **基金決算書**（平成７年８月16日現在．中間報告）

（収　　入）		（支　　出）	
摘　　要	金　　額	摘　　要	金　　額
ＰＴＡ（在校生）	580,770	震災援助金 （@65,000円×230人）	14,950,000
親蔦会（同窓会）	19,236,735	部活動交通費補助 （平成7年7月～8月の夏季休業中）	1,000,000
教職員	1,829,780	記録誌 （@440円×1,500部＋3%分）	679,800
県立学校長協会	100,000	郵送料Ⅰ＝趣旨書発送費 （@80円×11,518通）	921,440
		郵送料Ⅱ＝決算書・礼状発送費 （@80円×2,200通）	176,000
		援助金振込手数料	115,566
		事務費＝ゴム印代金他	210,947
		次年度繰越金	3,693,532
（小　　計）	21,747,285	（小　　計）	21,747,285

（決　　算）	
収　　入	21,747,285
支　　出	18,053,753
残　　高	3,693,532

※　残額については次年度の「震災教育援助基金」として繰り越す

◇ **基金事務および経緯について**

３月４日　　震災教育援助基金要綱決定
３月25日～28日　趣意書などの発送準備
　　クラス有志や吹奏楽部・ダンス部・本校卒業生などが積極的に協力してくれる
３月29日　　趣意書（11,518通）発送
６月中旬　　募金集約　※個人（卒業生．教職員他）　2,112人
　　団体（ＰＴＡ．親蔦会．校長会．学年団．組合他）　９口
７月１日　　給付受給条件などの決定
７月中旬　　震災基金給付　※230人
９月下旬　　礼状および決算書の発送

編　集　後　記

出来事はやがて「年表」の中に、記号のように無機的に記載されるだろう。だが、「年表」からは、その渦中の人の思いというものは見えてこない。この記録誌の殆どの頁を、生徒諸君の文章で費やしたことの意味もそこにある。

ここには60数編の生徒諸君の文章を収録したが、48、49回生の諸君の文章は、1995年１月17日からほぼ１カ月後、学校が再開した２月に、国語の時間やＨＲの時間に書き記したものが殆どである。一方、50回生の諸君の文章は、６月、すなわち震災から４ケ月余りが経過してから書いたものである。

記録誌への掲載のために書き直しを依頼したが、「つらいから……」と躊躇した人も多かった。書くためには記憶をたどらねばならず、それは人によっては苛酷な作業であったはずだ。だが、それが痛苦の体験であればあるほど、人はその苦闘の渦の中で何かを思い知り、「私」と「私」を取り巻く世界を見つめ、確認し、次の一歩を踏み出していくことができる。そもそも、つらくもなく、苛酷でもない青春などというものを信用できるだろうか。

「書くことによって自己を確認すること」
「個別の体験や思いを世代として共有すること」

単なる記録のための記録誌ではなく、上記のような意味を、生徒諸君が読み取ってくれることを願っています。

発行責任者　兵庫県立夢野台高等学校
発行年月日　1995年10月１日

（題字は書道教諭）
（文中のイラストは49回生）